



機巧少女は傷つかない

海冬レイジ

海冬レイジ

るるる

機巧少女は

傷つかない

Facing
"Doll's
Master"

2013年 秋

TVアニメ

放送開始! 真の学園祭

2013

7月28日開催! ステージ観覧応募締め切り迫る!

新しい世界を
感じてください

MFD文庫

真の学園祭

【審査員】



海登レイジ

かいとう・れいじ

…つづく！(闘えながら)

札幌市在住。1月8日生まれ。A型。

【イラストレーター】

るろお

**6月30日締め切り！ 夏の学園祭2013
観覧チケットの応募を急げ！**

イベントの時間

- ※11:00～11:40 「海は友達が少ない俺 AFR RADIO」公開録音【会場限定】
- ※12:10～13:10 M!文庫Jラジオあこいね!! 公開録音ステージ
- ※13:40～14:30 「時分秒のクワイムエッジ」お披露目舞台【秋葉原】
- ※14:50～15:30 「わんわんびよん」アニメ化記念ステージ
- ※16:00～16:40 「宮城王子と読む401巻」スペシャルステージ
- ※17:10～18:30 「魔法少女は歯が痛い」スペシャルステージ

イベント応募はこちらから！

www.mediafactory.co.jp/bunkoj/fes2013/

※ステージの開催および参加応募は必須です。応募事項をよく読んでください。※観覧は無料ですが、観覧は抽選で当選者しか参加できません。※ステージの内容、開催場所は予告なく変更する場合があります。

海冬レイジの本

機巧少女は傷つかない 1 Facing "Carnibal Candy"

(イラスト めろめ)

機巧少女は傷つかない 2 Facing "Sword Angel"

(イラスト めろめ)

機巧少女は傷つかない 3 Facing "Elf Speeder"

(イラスト めろめ)

機巧少女は傷つかない 4 Facing "Rosen-Kavaler"

(イラスト めろめ)

機巧少女は傷つかない 4 Facing "Rosen-Kavaler"

CD(Side-A)付録特装版

(イラスト めろめ)

機巧少女は傷つかない 5 Facing "King's Singer"

(イラスト めろめ)

機巧少女は傷つかない 6 Facing "Crimson Red"

(イラスト めろめ)

機巧少女は傷つかない 7 Facing "Genuin Legends"

(イラスト めろめ)

機巧少女は傷つかない 8 Facing "Lady Justice"

文庫11巻&コミックス⑧巻同時発売記念!

「夜々かわいいよ夜々
キャンペーン」実施中!

星の文庫「機巧少女は傷つかない1」(本書)と併せてお申し込みする半分のハートマークと、アライブコミックス「機巧少女は傷つかない1」の裏にあるもう半分のハートマークを両集合わせると、現れた二次元コードにアクセスすると夜々の歌の続きで声が聞けるぞ!



※二次元コードの読み取りアプリをインストールしてご利用ください。各端末、機種で対応が異なる場合があります。※対応外の機種もございますので、ご了承ください。





機巧少女は傷つかない

海冬レイジ

11

580

機巧少女は

傷つかない

Facing
"Doll's
Master"

海冬レイジ

るるる

【監督】



海堂レイジ

かいせう・れいじ

…つづく！（闘えながら）

札幌市在住。1月8日生まれ、A型。

【イラストレーター】

るろお

アニメ化で夢を叶えたくてになりました。
がんばるますですぜー。



9784840151832

ISBN978-4-8401-5183-2
C0193 ¥580E



1920193005806

定価：本体580円（税別）

メディアファクトリー



機巧少女は傷つかない11

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。結社の大幹部（金蔵親）の魔女アストリッドによる学院襲撃を退けた雷真達。だが、その代償はあまりにも大きく、夜々の会戦力の魔術回路が消失、重傷の危機に陥った。夜々を修復できるのは、作り手たる花柳斎彌子だけ。しかし、肝心の彌子は行方不明。一方、度重なる不祥事で学院の權威は失望。各国から夜会のやり直しの声が上がりはじめ、遂に英國が機巧師団を学院に差し向ける！ 迫る命の刻限、彌子はわずか一昼夜、雷真は一縷の望みをかけ帝都を日遊すが——。シンフォニック学園バトルアクション！

J 海冬レイジの本

機巧少女は傷つかない 1 Facing "Carnibal Candy"

[イラスト めろめ]

機巧少女は傷つかない 2 Facing "Sword Angel"

[イラスト めろめ]

機巧少女は傷つかない 3 Facing "Elf Speeder"

[イラスト めろめ]

機巧少女は傷つかない 4 Facing "Rosen Kavalier"

[イラスト めろめ]

機巧少女は傷つかない 4 Facing "Rosen Kavalier"

CD(Side-A)付録特装版

[イラスト めろめ]

機巧少女は傷つかない 5 Facing "King's Singer"

[イラスト めろめ]

機巧少女は傷つかない 6 Facing "Crimson Red"

[イラスト めろめ]

機巧少女は傷つかない 7 Facing "Genuin Legends"

[イラスト めろめ]

機巧少女は傷つかない 8 Facing "Lady Justice"

[イラスト めろめ]

機巧少女は傷つかない 9 Facing "Star Gazer"

[イラスト めろめ]

機巧少女は傷つかない 10 Facing "Target Gold"

[イラスト めろめ]

機巧少女は傷つかない 11 Facing "Delf's Master"

[イラスト めろめ]

マフィンドール

機巧少女は傷つかない11

Facing "Doll's Master"

海冬レイジ

11月11日







機巧少女は

傷つかない

Mechanical Dolls - One

細きレイラ・るるお



「雷真のためなら、たとえ火の中、お布団の中」

「雷真のいるところが、夜々のいるべきところですよ」

「おともします雷真。地の果てまでも」

そう言ってくれたのに――

「夜々！ おい！
しっかりしろ！」



「ふむ……見事な人形じや。」「ダンスほど注文したいわ。」

「いる丁は反発を覚えた。」


「当惑……でも……これ……れるものと思えたか。」



「光榮ですわ、金持様と手
だけと、商談はまた後回し」

「主——！」





「何か考えがあるのよね？
そうなんでしょう？
貴女、意地悪なものね？」

路上の大隊――
縦列で布陣した
人形使いの二団が見える。

「そんな頼り方があるかい。
ご期待に添えなくて悪いけど、答えは否だ」



contents

Prologue	相棒 #2	p13
Chapter 1	去りて、きたる	p25
Chapter 2	弱さを知れ	p63
Chapter 3	白か、赤か	p101
Chapter 4	無謀に賭ける	p144
Chapter 5	魔竜と巨人	p178
Chapter 6	あなたが愛した人形 #1	p250
Intermission 1	旅路の果て	p284

**Unbreakable
Machine-Doll**



マシンドール

機巧少女は傷つかない11

Facing "Doll's Master"

海冬レイジ

MF文庫 



夜叉

自称「真実の愛」、花柳道陰謀の
真凶「黒月夜」の男。



赤羽雷真

赤羽は身が人形使い。一門の仇を
討つためマダラスの命を盗る。

機巧少女は 傷つかない

登場人物紹介



アンリエット・ブリュー

シャルの妹。現在はキシリーの
研究所でメイド勤務。働き者。



キシリキ

機巧科学の教授で雷真の担任。
その正体は「黒十字」の姫主。



シャル・ロート・ブリュー &
シタム・シド

ブリューは数百年の謎を解く。
父親は謎の「魔術」は破壊力抜群。



ラザフォード

19世紀最期の魔術師として
学園長。神性機巧を愛している。



リキ

「魔術」の術名を盗る実力者。
妹のために魔道を継承す。



ムレイ

リキの愛妹。いつもおふくを
12機に買われている。巨乳。



アリヌ

ラザフォードの妹。父のために
あれこれ魔術。千年が機巧。



イオネラ

17歳で工学部教授の天才少女。
花柳道の熱烈なファンを自認。

世界中から後援が集まる、魔術の
最高学府。4年に1度「夜会」を
開催し、「同世代でもっとも優れた
才能」に魔道の特典を与える。
ラザフォードの就任後、
神性機巧開発を強力に推進中。

王立機巧学院



花柳斎 瑠子

江戸時代に花柳界を走る現代の
人形師。偶然に舞臺の舞台を歩いた。

三月花



小紫

夜々の妹。《情月影》の花。
目も上手で元氣いっぱい。



いろり

夜々の妹。《情月影》の花。
縁起物に目覚めてゴージャスな娘。

日本軍



火重

アデアス所屬の戦闘人形。
魔術の秘（密？）にまつては。



土門 日輪

土門一ツツ子家傳の魔術師。
魔術の秘（密？）にして魔術の道場。



グリゼルダ

魔術の秘（密？）を習った魔法の魔術。
意味、意味を弟子にした。

魔術師協会

監視



マダガス

中世一ツツ子家傳の魔術師。アデアス
所屬の秘（密？）にまつては。魔術の道場。

300年前の魔術から続く
魔術の魔術師。時の魔力
を裏から握って来た……と
される。原太子エドモンド。
魔術の魔術ライオンも
参加している。



アズモッド

大魔術師（魔術師）の魔術。
多くの魔術師に魔術師。

魔術の師団（結社）

魔

◎これまでのおはなし

機巧文明華やかなりし20世紀初頭。ひとりの日本男子が至高の自動人形を
引き連れ、王立機巧学院の門をくぐった。滅亡した毒刺一門、何より妹の仇を
討つために……。夜々も大詰めかと思われたとき、結社の襲撃を受け学院は
大混乱。悪魔の末からくも暴走に成功するが、今度は夜々の心臓に魔術が……。
一夜明けて、遺命倒壊の学院に新たな脅威が迫る――

口絵・本文イラスト ● るろお

編集 ● 池本昌仁



Prologue

相棒 #2



「雷真のためなら、たとえ火の中、お布団の中」

ゆっくりと前のめりに傾いでいく、相棒の体。

「雷真のいるところが、夜々のいるべきところですよ」

かつて彼女がくれた言葉が、雷真の耳にこだまする。

「おともします雷真。地の果てまでも」

そう言ってくれたのに――

「夜々ー おいー しっかりしろー」

血だまりに沈む夜々に、雷真は必死に呼びかける。

おびただしい量の血液。ひと目見て、危険な状態だとわかる。

「姉さま!? 姉さまっ!」

廊下の暗がりには、小紫の悲鳴が響く。学生たちが何事かと集まってきて、深夜の校舎は騒然となった。いろりが小紫を抱きかかえ、叱るように言う。

「落ち着け、騒いで何になると言うのだ。おとおまえは早く、夜々を呼んでこい!」

「おまえが落ち着け!」

いりりは完全に錯乱している。白い肌はいつにも増して青白く、涙で顔も見えていない。とにかく、ぬめる鮮血をかきわけ、雷真は夜々を抱き起こした。

出血しているのは、自動人形の中枢部（イブの心臓）があるあたり。

（さっき胸から飛び散ったのは、心臓の破片かよ……!?）

破滅的な予感で体が震える。とにかく魔力を渡そうと、夜々に手をかざした瞬間、
「どけ！」

学生たちの向こうから、聞き覚えのある怒声が飛んできた。

人垣を軽く飛び越え、魔術の師ドリゼルダが現れる。ドリゼルダは夜々の体を一瞥しただけで、即座に状態を見抜いた。

「金剛力の魔術回路がない」

雷真もとっさに重視を試みる。——師の言葉に嘘はない。夜々の体内に不自然な空洞、欠落が生じていた。胸から弾け飛んだのは、金剛力だったのか……。

「心臓に穴があいている。魔術回路をはぎ取ったのと同じ状況——とちかく処置室を空けろ！ 誰か工学——いや、医学部のパーシヴァル教授を呼べ！ それから、急いで花柳斎女史に連絡をつけろ！」

「わ、私が硝子を呼んでくるっ！」

小紫が我に返り、涙をぬぐって立ち上がった。

「足では間に合わん！ 電話を使え！」

「は、はい！」

駆けて行く。雷真は無理やり心を鎮め、もう一度、夜々の胸に右手をかざした。夜々には自己修復能力がある。魔力を与えれば、少しでも助けになるはずだ。

「バカ、やめろ！」

グリゼルダが雷真の腕をつかみ、やめさせた。

「心臓の処置が先だ。今魔力を渡すのは、壊れた機械を動かすようなものだ」

「けどよー だったら俺は、どうすりゃいいんだ？」

「何もするな！ ひとまず、私が念動で傷口を癒いでいる。今は待て」

「俺は、何もできないのか……？」

「そうだ！」

膝から力が抜け、崩れ落ちそうになった。

相棒がこんな状態なのに、自分には、何もできないのだ。

この学院にきて、雷真は飛躍的に成長した。だが、それは戦闘に限った話。理学、工学、医学の知識は素人同然。座学をないがしろにしてきたことを、心の底から後悔した。

「ぐっ……」

グリゼルダが不自然に力む。彼女の首、巻かれた包帯に血がにじんだ。

「お師匠さま、傷が……」

「……くそつ、魔力がもうない！」

つい数時間前まで、学院は戦場だった。グリゼルダにも余力がない。

「あのっ、手伝いますー」「僕もー」「魔力を貸しますー」

学生たち数人が手をあげる。グリゼルダはわずかに表情をゆるめ、

「助かるー トランスファアができる者は並べー」

そして、魔力の受け渡しが始まった。

魔力の融通にはかなりのロスが生じるため、学生ひとりが提供できるのは雀の涙ほど。

それでも学生たちが次々に力を渡し、夜々のために死力をふりしほってくれる。

手の空いた者は湯をわかし、器具をそろえ、医学部の学生を呼び集めて、手術のために処置室を整えてくれた。思いがけない優しさに触れて、涙が出そうになる。それをぐっとこらえ、既にボロ泣きのいろりを抱えて、天に祈る。

（夜々……死ぬな！）

永遠にも思える十数分ののち、コツコツと杖をつきながら、医学部長パーシヴァル教授がやってきた。

ただちに手術が始まり——処置は未明まで続いた。

「手の施しようがないな」

しわがれたその声が、廊下に静寂をもたらした。

パーシヴァルは手術着のまま、落ちくぼんだ眼を雷真に向けた。

「即死を免れただけよかったと思ってくれ。金属部品で鉄てつを打ち、患部を強引に固定した
——が、もって一昼夜といったところだ」

雷真は言葉を失った。……鉄？ 鉄で固定したのか？ 傷口を？
それに、一昼夜とは。

「どういうことだよ？ 治してくれたんじゃないのか？」

突っかかりそうになる雷真を、いろりがしがみついて止める。

必死にかぶりを振る。……ここでパーシヴァルを怒鳴り散らして、何になると言うのか。
自動人形の修復に関しては、あちらがエキスパートだ。

「……悪い、先生。俺……動転どうてんしてて」

「よい。話を戻すが、金属部品を使ったのは、人形の自己修復能力を抑えるためだ」

「抑える……？ ほっとけば治っちまう……から？ 夜々は禁忌——」

あわてて口をつぐむ。だが、もちろん、パーシヴァルはわかっていた。

「そう、それが原因で、助からぬ」

「どういう……意味だ？」

「禁忌部品は魔力を生む。魔力は自己修復を強制する。だが、修復されたところで、魔術回路が収まるべき部分は、永遠に穴があいたままだ。魔術回路がないからな」

雷真のとなりで、グリゼルダが嘆息した。「やはりな」という顔だ。

「市販品では駄目だ。自己修復の結果、異物として排除される。金属部品も然り」

「夜々自身の……肉ならどうだ？ ふとももとか、尻とか、使うんだろ？」

「心筋に同化する。すると、やはり穴があく。あいている状態が完全なのだ」

つまり、新しい魔術回路を取める以外に、修復の方法がない。

「一昼夜もすれば、銀の固定も限界を迎える。その頃には、人形の余力も尽き——再手術に耐えられまい。リペアするには、専用の魔術回路を埋めるほかない」

「ほかにほもう……夜々を救う手はないのか……？」

「いや、ある。全データを吸い出し、別のボディに移せばよい」

一瞬、理解が追いつかなかった。

「待ってくれ……よ？ それは……夜々が……死ぬってこと……じゃねえか！」
いろいろが混ぐみ、口を覆う。だが、パーシヴァルは怪訝そうに肩をひそめた。

「データを移すと言っただろう？ 記憶も思考もそのままだ」

「それは夜々じゃない！ ただの複製——本人が死んでるのに——」

「やめろ、バカ弟子。教授を責めるのはお門違いだ」

興奮した雷真を、グリゼルダがたしなめる。——その通りだった。

パーシヴァルは気分を書したふうもなく、淡々と説明を続けた。

「私も長いこと機巧医学をかじってきたが、ここまで完全な生体機巧を見たのは初めてだ。せめて一週間あれば、対策も考えてやれただろうが……悪く思わんでくれ」

ぼん、と雷真の肩を叩き、立ち上がる。

「どうしてもリベアにこだわるならば、至急、製作者を呼ぶことだ」

杖を突き、歩き出そうとして、グリゼルダに目を留めた。

「ミス。君も重傷なのだから、数日は安静にしていたまえ。魔術の使用は厳禁——特に、君の一族に伝わるというあの秘術、死にたくなければ使うなよ？」

「ああ。ありがとう、先生」

パーシヴァルが去っていく。雷真はあわてて追いつがりに、どうにか札を言った。

その後、廊下の向こうから、小紫の弱々しい声がした。

「ごめん……また、ダメだった……」

青ざめた顔で、立ち尽くしている。

先ほどからずっと、硝子に電話をかけ続けている。だが、つかまらない。硝子は屋敷に戻っていないようだ。

泣きぐそをかく小紫を、いろりが抱きしめる。あるいは、泣き叫びたいのはいろりの方だったかもしれない。いろりは夜々のことを、本当に大切にしていたから。

そんな姉妹を、グリゼルダが痛ましそうに見つめている。自分が自動人形を失ったときのことを思い出しているのだろうか。

雷真の胸を、狂おしいほどの焦燥が暴れ回った。

取るべき行動が、わからない。今こそ、俺が何とかしなくちゃならないのに！

「……電話が駄目なら、直接捜すしかねえ。俺がひとつ走り、行ってくる！」

「いえ、雷真殿は夜々の情にいてください」

いろりが涙を払い、充血した眼を雷真に向けた。

「醒數には、私が参ります。それから、いくつか心当たりを回ってみます」

「じつとしてられるか！ いいから待ってろ——」

ばあんつ、と甲高い音がこだまする。

頬を張られた。思い切り。

いろりは目に一杯涙を溜めて、雷真を叱った。

「落ち着いてください！ 貴方が焦って、どうなるというのです！」

のはっていた血が、すつと下がった。

いろりの言う通りだ。雷真が焦ったところで、事態は何ひとつ好転しない。

夜々を（十字架の騎士団）に奪われそうになったとき、十分に懲りたはずだ。あのとき

雷真は冷静さを失い、闇雲に動き回って、貴重な時間を無駄にした。

あれから俺は、何の進歩もしていないのか？ 違うだろうか？

「……悪い。どうかしてた」

雷真は深呼吸して、きつぱりと告げた。

「醒數の方はいろりに任せる。小紫は電話を頼むぜ。俺は、ちょっと出てくる」

「どこへ行かれるのですっ。どうか冷静になって、ここにいてくださいと——」

「いや、これは冷静な判断だ。硝子さんの居場所、わかるかもしれない」



姉妹が息をのむ。グリゼルダも意外そうにこちらを見た。

「確かめたいことがあるんだ。それはひょっとしたら、決定的な手がかりになる……かもしれない。——お師匠さま、疲れてるところ悪いが、夜々を頼む」

「ああ。ここは任せろ」

雷真は窓の外を見た。白みかけた空の下、荒れ果てた庭園が朝霧に濡れている。

今日まで、夜々は俺を護ってくれた。だから、今度は——

（俺が夜々を救う。絶対に）

決意を秘めて、廊下を駆け出す。

このとき抱いた希望がごとごとく碎かれることを、雷真はまだ理解していなかった。



Chapter 1 去りて、きたる

1

機巧都市の外れ、海沿いに大きな病院が建っている。

六階建ての重厚な造りで、敷地内には緑豊かな庭園もある。このあたりは比較的空気が澄み、海風にも助けられ、白亜の壁も汚れていない。

その最上階、富術層向けの個室に、学生時代オルガが収容されていた。

午前八時。朝食の食器を下げに、二人のメイドが入ってくる。

酸素マスクを疊らせながら、オルガはかすれ声でつぶやいた。

「出歩いて……いいのか……アリス……？」

顔も見ずに問う。メイドは苦笑して、栗色くちいろの髪をかき上げた。髪はたちまち輝くような銀に変わり、自信ありげな美貌が現れる。

もう一人のメイドは少女ですらなく、背の高い男——シンに変わった。

「君こそ、しゃべっていいのかい？」

銀髪の乙女——アリスがオルガの枕元に立ち、親しげに笑いかけた。



「さつき、ソーネチカが見舞いに来たよ。面会謝絶と伝えて、帰ってもらったけど」

「彼女は……怒っていた……だろうな……」

「カンカンだったね。目の仇にしていたライバルが、そんな惨めな状態じゃあ」

オルガの全身を眺める。祖母アストリッドの腐毒を浴びた体は、包帯でぐるぐる巻き。幸い、壊死は食い止めることができ、どこも切斷には至っていない。

「（金色のオルガ）と呼ばれた君が、くすんだ銅貨みたいに見えるよ」

「情けない……話だ……だが……おかげで……えほっ」

「ああ、無理にしゃべらなくていい。君の美声が失われたら、悪人が悲しむからね」
多少はやつかみもあるのだろうか、意地悪な顔で茶化す。オルガは苦笑して、

「君こそ……わき腹の傷は……重傷だろう……？」

「結社の連中に救われたよ。連中の応急処置で、実は言うほど危険じゃなかった」

「皮肉だな……心優しいあの者たちに……感謝しなくては……」

「意地悪な女だね。（女帝）陛下にも言われたよ」

「ソーネチカは……自分だけが無傷だと……言いたいのさ……」

笑いが生まれる。アリスはふつと眼をなごませ、ささやくように言った。

「今は生きて再会できたことを喜ぼう。僕らは命をつないだんだ」

その通り、こうして皮肉を言い合っているのも、命があったからだ。
和やかな気分で笑っていると、ドアが強めにノックされた。

シンがアリスの背後に立ち、控えめに耳打ちする。

「お嬢さま。お友達が焦れていらつしやるようです」

「もっと焦らしてやつてもいいくらいだけだね。入れてやれ」

「仰せのままに」

「アリス……？ 誰だ……？」

「あの唐変木、どうしても君に面会したいと聞かなくてね」

シンがドアを開け、誰かを導き入れる。

入ってきたのは、顔見知りの男子学生だった。

実質最下位の成績ながら、今や夜会の優勝候補。狂王子の機巧都市支配を妨げた英雄に

して、魔王に挑んで生還した猛者——赤羽雷真だ。

アリスはなぶるような目を向け、

「聞き分けの悪い男だね。面会謝絶と言ったのに」

「悪い。オルガにどうしても訊きたいことがあつて——」

「オルガに？ 僕じゃなく？ とつとと解りなよ」

「何でだよー ここまで入れといてー」

アリスは雷真の首に手を回し、上目遣いになって、悪戯っぽく言った。

「妬いているからに決まってるだろう。僕にキスしたら許してやつてもいいよ？」

「妬くなー あと、シンを刺激しないでくれ頼む」

殺気をまき散らすシンの前をすり抜け、雷真はオルガの前に立った。

「療養中のごとこ悪い、どうしても訊きたいことがあったんだ。……結社のことで」

雷真は胸ポケットをまさぐり、大事そうに何かを取り出した。

薔薇が彫り込まれた、金の指輪。

オルガの顔が強張る。アリスは注意深く指輪を見つめ、オルガにたずねた。

「薔薇の意匠だね。結社ゆかりのものかい？」

「……その通りだ。……それを、どこで？」

「あんたと（塔）で歸つた夜、バカ王子が置いて行つた」

夜会にかこつけて、結社はイザナギのプリンセス——土門日輪を消そうとした。その夜

のことだろう。エドマンドが直接、雷真の戦闘能力をはかつたと聞いている。

「それは……薔薇の印章だ」

名前を聞いて、アリスの表情が凍る。実物を見たのは初めてか。

「その意匠……青薔薇のものだな……ずいぶん前に……空席となった座だ」

「空席？ 座？ どういうことだ？」

「それは……えほっ」

咳き込むオルガに代わり、アリスが口を開いた。

「印章ってのは、結社の幹部（薔薇）の身分を証明するものだよ」

「持つてゐるだけで効力があるよ。何せ、連中は超一流の魔術師ぞろい——顔も名前も自在に変えられるんだからね。エドマンド王子は青蔷薇の後任に内定していたんだろう。自分に与えられた指輪を、君に残して行つたんだ」

「……それって、連中にとっちゃ、すげえ貴重品……だよな？」

「彼らだけじゃない。世界的に貴重な品だよ。小国なら傾くね。戦争の火種にもなる。青蔷薇の印章と言えば、オーストリア継承戦争の発端じゃないか」

雷真が裏面を囁む。彼の顔をよぎつたのはおそろく、このちっけな指輪が、世界大戦の引き金になるかもしれない、という予感だろう。

そんなものを残して行くとは。恐るべきは黒太子エドマンドの酔狂。そして、彼にそこまで買われた雷真だ。

「……で、訊きたいのはここからだ。これと同じものを、ある人が持つてたんだ」

アリスはびんときた様子で、先回りして言った。

「花柳斎かい？ それは確かな情報？」

「また聞きの話だ。持つてるところを直接見たのは俺の相棒……とキンバリー先生らしい。夜々がお師匠さまに伝えて、お師匠さまが俺に教えてくれた」

「なら、ミス・キンバリーに確かめればいいかな？」

アリスが出て行くとする。雷真はあわてた。

「行く前に教えてくれ。これを硝子さんが持つてたってことは、つまり……？」

「普通に考えるなら、花柳斎も（善蔵）の一人ということだね」

「……喪つてきた幹部を返り討ちにして、奪ったのかも知れないぜ？」

「そうかもしれないね」

曖昧な言い方をする。オルガの耳にも、それは空虚な撃めに感じられた。花柳斎は凄腕の人形師かも知れないが、魔術師としては名を聞かない。善蔵の魔女を返り討ちになど、おとぎ話もいいところだ。

雷真は難しい顔で黙り込んでいたが、やがてまっすぐアリスを見上げた。

「アリス。おまえに頼みがある」

「僕と結婚する気になったのかい？」

「なつてねえ！」

「なら、その話はなしだね」

つん、とそっぽを向く。シンがわざとらしく感嘆の息をついた。

「さすがはお嬢さま……！ 相手の足もとを見る卑しい態度、正視に堪えません」

「OK、シン。ならそんな眼球は後でつぶすとして」

アリスはしなつと雷真に頭をあずけ、すねたような口ぶりで言った。

「僕は怒つてゐるんだよ、ライシン。虫の居所が悪いんだ。相棒が重傷になれば、そりゃあ心配にもなるだろうさ。だけど、そうなる前に——昨日の夜の段階で、僕の安否を確かめるくらいの甲斐性はあつて然るべきじゃないのかい？」

ましてアリスは功勞者だ。オルガ、シャル、日輪とともに金薔薇と戦い、そこで重傷を負いながらも、人質救出の鍵となる務めを果たしたのだから。

「あ……。それは、その……要かつた」

素直に感謝する雷真を見て、少しは溜飲を下げたらしい。アリスは助け舟を出した。

「花柳商が見つからないんだってね？」

「ああ——つか、何で知ってんだ？」

「甘く見てもらっちゃ困るよ。僕の情報網をさ」

「……ひよつとして、もう捜してくれたのか？」

普段まったく動搖を見せないアリスの顔に、さっと赤味が差した。

「もちろん善意じゃないけどね。それをネタに君を揺さぶろうと——おい、シン。おまえは何をにやついている？」

「にやついてなどおりません。どうぞ気にせず続けてください。それに、私はかりでなくミスター・アカバネにも筒抜けのようです」

シンの指摘通り、雷真もまた、口元をほころばせていた。

「……おいライシン。何がおかしいんだ」

「普段のおまえなら、善意だ、好意だって、やたら強調するところだよな？」

「これは一本取られましたね、お嬢さま——」

「黙ってるシン。焼けたフライパンで口を塞がれたいのか。舌をソテーに——」

「どうかそのへんで。これ以上は墓穴かと思えます」

アリスは真つ赤な顔で舌打ちした。普段の余裕ぶった彼女からは想像もつかない。意外な一面を見た気がして、思わずオルガも笑ってしまふ。

雷真はアリスに頭を下げ、誠実そうな眼をして言った。

「ありがとよ。なら、そっちは引き続き頼む。もし硝子さんの居場所がわかったら、すぐ教えて欲しいんだ。一秒でも早く、頼む」

「OK。君はどうするんだい？」

「こうなりや、尾を使って捜してみる」

「……その体で？ 焼却の魔王に殺されかけたんだらう？」

「我ながら、いよいよ化け物じみてきたな。全然、何ともねえんだ」

そんな馬鹿な、と思ったが、確かに怪我を負っている様子はない。だが、魔力はかなり消耗しているはず。

それでも彼の瞳に迷いはなかった。彼の精神は鋼の強度だ。

（私の愛しい男と……いい勝負だな……）

などと内心で憶えるオルガの前で、アリスは釘を刺すように言った。

「馬鹿が馬鹿をやる前に警告しておくけど。もし花柳齋の居場所を見つけても、単独行動は絶対するなよ？ 結社がかどわかった可能性もある」

「——なるほど。そいつはぞつとしねえな」

「行動を起こす前に、僕にも連絡を寄越せ。ババは利に聡い男だから、有利と踏めば力を貸してくれる。僕もひと肌脱ごうじゃないか」

「私も……手伝おう……」

オルガは喉を押さえ、痛みをねじ伏せて、強く言った。

「してしまったことに……言い訳はすまい。だが……せめて少しは……埋め合わせたいと思う。もつとも……今は本当に……微力だが……」

「——ありがとよ、總代さん。だが、あんたは養生しててくれ。さもなきや、例の最下位野郎に殺される。さつきも下のロビーでぶつ殺されそうになったんだ」

冗談めかして礼を言い、雷真はドアに向き直った。

もう行くつもりだ。その技に胸をからめ、アリスが引き止めた。

「待ちなよ。もうひとつ、君の耳に入れておきたいことがある」

「何だ？」

自分たち以外にひと気がないのを確認してから、アリスはたずねた。

「君は白？ それとも赤？」

「……は？ 何だそりや？」

オルガにも、意味がわからない問いかけだった。

「よく考えて答えることだね。浅慮で答えれば、命にかかわる問いかけだよ？」
息詰まる緊張を漂わせて、アリスはこう続けた。

「善か悪かの二項対立——学院で起ころうとしている、選別だ」

2

「くれぐれも、己の立場を忘れぬことだ」

金色の瞳の男が、キンバリーの手首に触れる。

彼の指から魔力がほとばしり、キンバリーを封じていた手錠が外れた。

「別命あるまで、しばし大事を取るがいい。無理をすれば痕が残るぞ。」

キンバリーの尾を示す。昨日、鉄杭で刺し貫かれた部位だ。軌には穴があいているが、足の方は治癒されていて、あいた穴から包帯が見える。

キンバリーは返事をする気にもなれず、仏頂面でだんまりを通した。

男の苦笑が風に溶けて消える。何とも鮮やかな消えつぶり。男が去ると、キンバリーは鬱屈した気分で、変わり果てた風景を見回した。

午前の青い空の下、焦土と化した庭園が広がっている。半壊した校舎は廢墟のようで、どこもかしこも瓦礫の山だ。

……護れなかった。何も。

治せと言われた足で、瓦礫を蹴飛ばす。激痛がむしろ心地よく、胸がすつとした。身を切るような寒さの中、吸い寄せられるように、医学部の校舎に向かう。

壁が少々破れているが、強度は十分だ。荒れた廊下を進むと、一階の医務室、医療器具が散乱した部屋で、白衣の男がカルテを拾い集めていた。

「よう。難しい顔してんな」

「……顔も見ないで、何を言う」

「見なくてもわかるんだよ。おまえさん、機嫌が悪いと忍び足になる」

小娘扱いされたようで面白くない。キンバリーはからかうように言った。

「珍しく動揺じゃないか。ケツをまくって逃げたと思っていたぞ？」

「敵の大將、あの金鬚（きんすけ）だつてな？」

クルーエルの黒ぶち眼鏡（めがね）がこちらを向き、レンズ越しに鋭い視線が飛んできた。

ボーカーフェイスを維持したつもりだったが、クルーエルには通じなかった。

「なるほど。その顔だと、勝てなかったようだな」

「……勝つ？ 戦うこともできなかったさー このキンバリー教授がなー」

衝動的に壁を殴りつける。あるいは昔なじみだから、甘えが出たのか。一度感情の糸が切れると、もう衝動が止まらなかった。

「私は何をやっていたんだ、この一五年……馬鹿馬鹿しい！」

壁を殴る。殴って、殴る。皮がむけ、床に血の染みが広がった。

思いきり振りかぶり、全力で叩きつけようとする手を、クルーエルがつかんだ。

「よせ、エイミー。冷静でお高くとまってる、イヤミな教授はどこいった？」

「お高くとイヤミは余計だ！」と言うか、それはほぼ悪口だろう！」

「それでも医者なんてね。俺の前で自傷行為は許さんぜ？」

「許さなければどうだと言うんだ？ 教授でもない、囑託医風情が——」

悪態をつくキンバリーの口を、クルーエルの唇が塞いだ。

二人の眼鏡がかすかに触れ合い、カチカチと音を立てる。

たつぷりキンバリーの唇を食った後で、クルーエルは笑って言った。

「ペナルティを与えるのさ。こんなふうに——つてえええ！」

ヒールが足の甲に刺さり、たまらず飛び上がるクルーエル。キンバリーは唇を押さえながら、鋭利なダガーを突きつけた。

「虫唾が走る！ 舌を出したまえ！ 切り取ってやる！」

「そうそれ、その意気だよ」

猛り狂うキンバリーを、クルーエルは軽くあしらった。

それから、ふっと虚無的な微笑を浮かべた。

「生き恥はさらすもんだな。こうして千載一遇のチャンスにもありつける。おまえさんと甘いロマンスを楽しんだり——あの戦争のケリをつけたり」

「チャンス？ どういう意味だね？」

「金儲けは執念深いんだ。必ず仕返しにやってくる」

仕入れた情報が脳裏をよぎる。魔女は学生の攻撃で焼き尽くされたという。

だが、そう簡単に死ぬタマではない。

クルーエルは壁際のロッカーに向かい、邪魔な瓦礫をどかし始めた。

「次があるなら、準備すりゃいい。上司が許してくれないってんなら、認めさせる努力をしろよ。そういうのは得意になったんだろ、キンバリー教授」

ひん曲がった鍵を、離儀して開ける。

「俺もそろそろ、亡霊どもにせつつかれるのは嫌気が差してきてね。嫌なことは全部忘れて、女子学生に悪戯しながら楽しく暮らそうと思ってたのに、連中が眠らせてくれねえんだよ。そんなとき、セトの大魔女さまが御自らご尊顔をお見せくだすったんだ。丁度いい機会ってやつさ。ここらで不眠症の原因を断つ」

「ふん……。それこそ、君に何ができると言うんだ？ 魔術師でもないくせに」

「おいおい、忘れたのかい、新兵のエイミーちゃんよ」

ロッカーを開け放つ。中に収められていたものを見て、キンバリーは言葉を失った。

「分隊で唯一生き残ったのは、俺なんだぜ？」

手投げ弾。粘土爆弾。導火線にワイヤー。魔力絶縁シート。魔抗アーマー。

何よりも一番目立つのは、黒光りする長銃身――

バイボットつき的大型小銃。口径が異常に大きい。これに合う弾丸は間違いないく専用のもので、射手には殺人的な反動がかかるはず。移動しながらの発砲はもちろん、立ち撃ちができるかどうか怪しい。

その銃が何なのか、キンバリーは知っている。

対機巧氣銃。自動人形に魔抗金屬をぶつけ、魔術的な防禦を強引に突破、純粋な衝撃力のみで破壊するという、力任せの武装だ。

ゆうに十キロは超えるそれを、クルーエルは片手で取り出した。

「経験者の意見は貴重だろ。おまけにそいつは、腕利きの狙撃手ときてる」

「……意匠者め。そんな雑菌まみれのを診察室に隠していたのか」

「あいにく、とつくに滅菌済みだ。フォーク代わりにも使えるぜ」

皮肉っぽく笑う。その笑顔が一五年前の彼と重なり、キンバリーも釣られた。

「なら、あの魔女の口に突っ込んでやろう」

互いの肩を叩いて、笑い合う。ずっと昔、そうしていたように。

ささくれ立っていた心がやわらいでいく。驚くくらい穏やかな気持ちで、キンバリーは窓の外、荒れた庭園に視線を投げた。

次は仕留める——最後に笑うのは、こちらだ。

そのとき、べきりつ、と廊下でガラスが砕けた。

誰かが破片を踏んだのだ。振り向くと、頬を染めたグリゼルダと目が合った。

「すすすすすまん女史！ おおおおお取り込み中だったな！」

てのひらをこちらに向け、ものすごい勢いで左右に振る。

顔でたように顔が赤い。視線が不自然に泳いでいる。

ゼルダめ、どのあたりからのぞいて——いや、考えるまい。こちらまで赤面したくない。今度こそボーカーフェイスを維持して、キンバリーはそっけなく応えた。

「ゼルダか。別に取り込んではいない」

大人の余裕を見せつけた……のだが、クルーエルが明らかに挙動不審になり、白々しく口笛を吹いたので、色々と台無しになった。

キンバリーはクルーエルの足をヒールで思いきり踏みつけ、悲鳴を背中に聞きながら、グリゼルダを押して廊下に出た。

犬のしっぽのようなポニーテールが揺れ、首筋の包帯があらわになる。

「その首——負傷したのか」

かなりの深手だ。魔王がこれまでの傷を負わされた原因は……。

「あの二体を取り上げてしまい、すまなかつたな。君の剣と盾は、既に協会から返還されている。後で届けさせよう」

「私の傷などどうでもいいよ。貴女の方こそどうなんだ。協会は？」

「ひとまずは、誣責で済んだよ」

「そうか……よかった……！」

「おや？ 心配してくれたのか？」

「無論だ」

まっすぐな眼差し。先ほどの自傷行為が恥ずかしくなる。

こんな私にも氣遣つてくれる者がいる。その存在を、いつしか忘れていたようだ。

「ありがとう、ゼルダ」

「な、何だそれはっ。正面切つて言われては、その……照れるじゃないか！」

「君も今、正面切つて言っただろう？」

どちらからともなく、笑いが漏れた。

学院は荒れ果てた。だが、やられたのは主に設備で、人的被害はそれほどでもない。

まだやり直せる。生きている限り、必ず――

「それで、私に何の用だね？ 控していたのだろうか？」

「ああ、学院長からメッセージを預かつている」

蠟で封のされた手紙を差し出す。蠟には学院の校章が押されていた。

中身を開け、一読して――にやりとする。

「さすがは古規、手回しがいい。もう協会と話がついているのか」

「やけに嬉しそうだ、何と書いてあったのだ？」

「要人がくる。それに合わせ、防衛案件プロトコルを解除する、とさ」

「防衛案件――ああ、学生と職員の見守り規定か」

「そうだ。今後は学院の敷地外であっても、襲撃者を直ちにあげられる」

「……その何が嬉しいんだ？ 私は今までもそうしてきたぞ？」

「君は少し自重したまえ」

べちつとグリゼルダのひたいを指で弾く。

「通制防衛となるケースでも、これからは学院が責任を負うということさ。そこで、ものは相談なのだが——君にこの要人警護を頼みたい」

「要人？ 誰だ？」

「蟻を招き寄せる光——私の天使となりそうな娘さ。今日にも戻るそうだ」

グリゼルダは首をひねった。誰のことか、わかっていない。

「順を追って話そう。昨晚、バツキンガムで大きな祭があつてね」

「待て待て、どうしていきなりバツキンガムの話になる？」

「まあ聞け。一夜明けて、この国は引っくり返った。先鞭をつけた者は、世辞にも立派な連中とは言いがたい。が、敵がそれ以上の悪党だったから、協会は黙認した。昨日、私が戦闘を禁じられたのも、その祭と関係がある」

グリゼルダはさらに首をひねった。キンバリーはかまわず話を進める。

「僧王一派が次に蟻がらせをするとなれば、やはり学院だ。かの天才少女が戻ってくれば、連中に一泡噴かせる手段もありそうだ」

グリゼルダは情けない顔になった。ますますわからない様子だ。

そんな彼女を笑い飛ばし、彼女の肩を叩いて、キンバリーは言った。

「つまり——ここから反撃開始、ということさ」

機巧都市の繁華街を、雷真はひたすら、硝子の姿を求めて走る。

病院から学院に戻る爆踏だ。硝子の艶やかな美貌は、どんな人ごみでも必ず目立つ——そう思つて速回りしているのだが、それらしき姿は見当たらない。

昨日の学院襲撃事件は、もちろん世間に広まっていた。だが、街はおおむねいつも通りで、人通りも途切れることはない。ただ、不穏な気配が満ちているだけだ。

雷真の頭の中では、先ほどのアリスの聲が繰り返し再生されていた。

「さあ、答えなよ。白か？ 赤か？」

「だから、それは何だよ。つか……何の符牒だ？」

「なかなかいいところをついてるよ。符牒だとすれば、どういう意味だい？」

雷真は思考を巡らせる。いきなり白か赤かと訊いた。それはつまり、雷真が（どちら）を選ぶかということ——

「所属を訊いた？ 派閥争いか？」

アリスは表情をゆるめ、満足げにうなずいた。

「さすがは僕の未来の旦那。その通り、学内に二つの派閥がきつつつある」

「今の台詞の前半部分、承諾した覚えはねえからな？」

「この符牒、オルガは知らないようだね。ということとは、どういうことだい？」

「(円卓戦争) 開幕以後に成立したことで……片方はアスラか!」

アリスはそうだともしも違ふとも言わず、思慮深げな眼をして、別のことを言った。

「君、(善戦戦争) は知ってる?」

「え? ああ——この国で昔あった内戦……だっけ?」

「国王打倒を目指したヨーク公は、白薔薇の紋章を掲げて戦ったそうだが」

「じゃ、国王側が赤薔薇か」

「当時は白薔薇のみが用いられた、って話だけだね」

「それになぞらえた……のなら、現状維持は(赤)派だな。俺は赤だ」

即断即決。学院が二つに割れ、守旧と改革に割れたというなら、雷真としては現状維持を取る。余計な混乱が生じて、夜会に差し障りがあったては困る。

アリスは驕をからつばにするような、大きなため息をついた。甘い吐息が胸にかかり、そんな場合ではないとわかっているのに、雷真はどきりとした。

「浅慮は命にかかわると言つたはずだよ。僕が白の深奥であれば、君は卑座に攻撃され、最悪命を落としていた……かもしれない」

「は? いくらなんでも、学生同士でそれはねえだろ」

「甘いね。白の勢力が何を目的としているか、君はわかっていないんだ」

「何が……目的なんだ?」

「現状維持の反対だよ。昨日の騒ぎは何だったんだい?」

雷真^{ライシン}は天井を見上げた。何だったかと問われて、敢えて概括するならば……。

金蓄藏^{キンゾウザウ}とやらが流した放送、あの一節が脳内に甦^{よみがえ}った。

（我らは金の楯^{タテ}——学院の不正を正す者なり！）

あれは表向き^{ウラムキ}の主張で、事件は狂言^{キヤウゲン}と言えるものだった。だが、あそこで語られたことが、一部の連中にとつては事実で、真実の一端を表しているのなら？

「学院長の更迭も、夜会^{ヤカイ}の中止も、実際に主張してる奴がいる……!?」

「そうだ。理屈^{リクツ}で考えてみなよ。手袋持ちはもう数えるほどしかない。まだ魔王^{マウオウ}の目があるのは（元帥^{エンスイ}）マダナス、（女帝^{メイト}）ソーネチカ、（劍帝^{ケンテイ}）ロキ、（三千世界天子^{サンゼンセカイテンシ}）アスラの一派。あとは君と、その取り巻きの女子だけだ」

アスラは仲間たちに共同研究という顔をぶら下げているが、公式に魔王の称号を得るのはアスラだけ——つまり、魔王の座は英国のものということになる。ロキ、フレイは英国が保護するか、出身国の米國が保護するかで係争中。最有力候補のマダナスは国籍不明。ソーネチカはロシア帝國。ほかの国にはもう、何の旨^{めい}みもない。

「魔王の称号が得られないなら、夜会をつぶすか、やり直したいって国は一杯あるだろうさ。世界大戦が始まろうってご時世なんだから」

アリスは雷真の胸を突き、ぐいぐいと押した。

「まして学院の設備が壊滅し、教授陣の監視がゆるんだ今、不満がどんな形で顕在化するかわからない。君も他人を信じるな。目頭^{めがしら}、額みに思ってる連中でもね」

雷真の頭に、シャルや日輪、ロキ、フレイの顔が浮かんだ。

「あいつらなら、俺と同じ方を選ぶだろうぜ」

「……だといけどね」

「氣をつける。ご忠告、ありがとよ」

「そんなぞんざいな礼を言うくらいなら、キスをしろよ」

「無茶言うな」

「何が無茶なんだよ」

アリスはむつとした顔をして、雷真の胸ぐらをつかみ、下に引っ張った。

野生動物なみの反射神経を持つ雷真でも、これはかわせない。ぐつと踏ん張った際に、

アリスは背伸びをして、雷真の頬に唇を押し当てた。

べろりと唇をなめ、肩の銀髪を跳ね上げる。

「今日のところはこれで我慢してあげるよ。人捜しの着手金としては、ちょっと安すぎる

氣もするけどね」

赤らんだ頬が何とも可憐だ。グロスの唇に思わず目を奪われ――

直後、雷真は震え上がった。あわてて背後を振り返る。

……誰からも、おかしなツッコミは入らなかった。

回想を終えると、改めて重圧がのしかかってきた。

アリスの危惧は、どのくらい事実なのか。学生が二派に割れているなど、意識したこともなかった。だが、その一派がアスラと聞けば、あり得る話にも思える。

かつて、アスラと「一対一」で話したことがある。

あのとき、アスラは雷真に「同志になってくれ」と言った。あれは夜会に限った話だと思っていたのだが――思えば、妙なことを口走っていた。

「これは僕の羞恥心が言わせたことだと思つて欲しい」

セドリツク・グランビルには氣をつけろ――

彼は確かに「羞恥心」と言った。あれは、何を恥じていたのだろうか？

あのセドリツクはエドマンドの変装だった。それを知っていたのなら、アスラは結社の側の人間か。いや、アスラとオルガは対立陣営だった。両方が結社の人間とは考えにくい。だとしたら、結社の動きを察知していた……結社の敵か？

結社の敵ならば、こちらの味方にならないか？

――わからない。何を判断するにしても、情報が少なすぎる。

「雷真！」

小紫の声で我に返る。いつの間にか、学院の正門前に到着していた。

城塞のようなゲートは常のごとく開放され、学院の焼け野原が外から見通せる。

そのゲートの下に、小紫の小さな体があった。

雷真を待っていたのだろう。青ざめた顔で駆け寄ってくる。

「どうした？ まさか——夜々に何かあったのか？」

「ううん、夜々姉さまはまだ眠ってる……」

「じゃあ、いろりが戻ってきたのか？」

「……いないの」

「さすがに雷真を見上げ、ゆっくりかぶりを振る。」

「誰もないの！ いろり姉さまが……お屋敷が……荒れて……めちゃくちゃで！」

「落ち着け。落ち着いて、ゆっくり話せ」

小紫は仔細ずみのように震えながら、必死に説明した。

「いろり姉さまが、戻ってこなくて……」

「硝子さんを捜してるんだろ？ 心当たりを回ってみるって言っただぜ」

「だけど、私ずっと、お屋敷に電話してたもん！ いろり姉さま、出てくれてもいいじゃない！ だから私、行ってみたの。そうしたら——」

小紫が何に取り乱していたのか、ようやく雷真も理解した。

「屋敷が無人だったんだな？ 荒れてたってどういうことだ？」

「誰かが家捜したみたいなの……いろんな人の足跡があって……」

ぞつと寒気が走り、全身の血が冷えた。

最悪の想像が脳裏をかすめる。アリスの言う通り、硝子は拉致されたのでは……？

昨日、硝子から感じた硝煙の臭いが、今さらのように鼻腔を刺した。

「……おまえは夜々の側にいてくれ。俺は、この目で確かめてくる」

「一人じゃ危ないよー 雷真までいなくなっちゃったら、私……っ」

じんわり涙がにじむ。小紫の気持ちは痛いほどわかった。この異国で、硝子（しょうこ）もいろいろも行方不明。夜々は死の危機に瀕し、意識不明。ここで雷真とはぐれたら、小紫は本当に、ひとりぼっちになってしまう。

「……なら、先に軍と連絡をつけよう」

「だけど、連絡先わからないよー」

愕然（がくぜん）とした。確かに、そうだ。番号も所在地も雷真は知らない。

実質、硝子が雷真の上官として機能していた。軍の命令は民間人の硝子が受け、密偵の雷真は軍属ではなく学生として学院に潜入する。雷真はそもそも軍の内情を知らないのだから、拷問や自白剤で秘密を漏らすこともない。

その仕組みが今、完全に裏目に出ていた。

（……いや、連絡がつかないだけなら、まだいい）

司令部が壊滅している可能性もある。もし無事なら、あちらから接触がありそうなものだ。だが、誰（たれ）からも、何の連絡もない……。

大海原のと真ん中を漂流しているような気分になった。

気が急ぐ。いろいろには冷静になれとたしなめられた。国でもわかっている。それでも、夜々の胸が割れ、彼女が床に倒れたときの、あの戦慄（せんりつ）が今も離れない。

（くそっ！）

雷真は自分の頬を両手で張り、深呼吸した。

目を閉じ、気を鎮め、そして、決断をくだす。

「やつぱり、俺は屋敷に行ってみる。誰かに襲われたのなら、硝子さんは手がかりを残してくれてるはずだ。抜け目のない人だから」

「なら、私も行く！ 雷真一人じゃ心配だもん！」

「いや、おまえは残れ。俺が戻ってこなかったら、おまえが夜々を護るんだ」

一度おさまった小紫の涙が、また盛り上がってきた。

「やだよ……そんなの、やだ……っ」

しがみついてくる。死んだ妹を思い出し、胸がえぐられるように痛む。かつて勘当同然で赤羽の家を出たとき、こうしてすがりつく妹を、雷真は見捨てたのだ。

覚悟が鈍る。煩悶する雷真に、前方から遠慮がちな声がかかった。

「う……。だったら、私がライシンと一緒に、行く？」

ぼてぼてと肉球で土を踏みしめて、ガラム犬十数頭が歩いてくる。

その真ん中に、真珠色の髪の乙女、フレイが立っていた。

きりつと勇ましい顔で、フレイはほよよんと胸を叩いた。

「私たちが、ライシンの力になる！」



数分後、雷真はフレイとともに、市街を駆け戻っていた。

小紫は何か言いたげだったが、フレイが同行するということで、大人しく引き下がった。その小紫の周りには、ラビ以外のガラム犬をすべて残してある。どちらかに何かがあれば、ガラムの遠吠えで即座に連絡できる——らしい。

「悪いな。こんな時期に、自動人形使用訓練破りなんて危ない橋を渡らせちまって」走りながら、フレイを振り向く。フレイはラビの背中にしがみつかながら、ふるふるとかぶりを振って、はにかんだように笑った。

「う、大丈夫。警備も混乱してるし、何かあれば、すぐロキを呼ぶから」

姉弟仲は良好のようだ。雷真は少しほっとして、進行方向に向き直った。

やがて、目的の屋敷に到着する。街中にもかかわらず、庭園つきの一戸建て。庭には桜が植樹されているが、すっかり葉は落ち、もの悲しい風情だ。

一応、周囲に気配がないのを確かめてから、中に入る。

小紫が言った通り、屋敷は無人だった。大勢の人間が入り出した痕跡があり、引き出しや戸棚も漁られていて、中身がベッドにぶちまけられていた。

すべての扉を開き、引き出しを開けてみる。

軍部の連絡先がわかるかも……という期待もあったが、それらしいメモは見つからない。

これでも情報部、味方の足を引つ張るような情報は書面に残さない。仮に残していたとしても、先にきた連中が持つて行つただらう。

結局、雷真に見つけられたものと言えば。

「硝子さんつて……やっぱ、すげえのつけてんだな……」

胡蝶をあしらつた布地を引つ張り、レース越しに向こうを透かして、雷真は赤面した。

「ライシン……厭欲……」

フレイの悲しげな声が聞こえて、あわてて下着を放り出す。

いつの間にか、ドアの隙間からのぞかれていた。

「前から思つてたが……気配消すの、上手いな」

「う。小紫ちゃんほどじゃないけど、私たちも（音）はごまかせる」

ふきふさとラビの頭を撫でる。ラビはくすぐつたそうに耳を伏せた。

なるほど、音か。足音や衣擦れ、呼吸音などは重要な手がかりだ。雷真も普段、まずは

音で異変を感じてから、周囲に注意を向けている。

フレイはすたすたと歩いてきて、巻貝に似た煙管を差し出した。

「——硝子さんの愛用品だな。どこにあった？」

「下の食堂にあった……。吸いかけ、だったみたい」

煙管を受け取り、観察する。傷や血痕は見当たらない。

「硝子さんがこれを置いて行くなんで、考えられねえ」

「ほかの部屋も回ってみたけど。誰もいない、ね？」

「——だな。手がかりになりそうなのは、この煙管と、そこらの足跡だけか」

明らかに多人数。急いでいるから、玄関で泥を落とさなかった。わかるのはそのくらいで、情報と言えるほどのものではない。

再び焦煙が込み上げてくる。そのとき——

風鈴の音色のような、涼やかなベルの音がした。

この音は知っている。電話の音だ。

砲弾のように部屋を飛び出し、階下に飛び降りて、玄関の電話にしがみつくと、相手が誰かもわからないうちに、雷真は叫んでいた。

「硝子さんか？」

「——そこにいるのね、坊や」

すっとんと腰から力が抜けた。

「硝子さん……無事なのか？　いろりもそこにいるのか？　今どこにいますんだよ？」

「叫ばないで。いろりも、私も、びんびんしてるわよ」

「よかった……すぐ戻ってきてくれ！　夜々が重態——」

そこで、違和感に気付いた。

いろりが臂にいるのなら、硝子が夜々の状態を知らないわけがない。

夜々の状態を知っているのに、戻ってこないということとは。

「――何があったんだ。身動き取れない状況なんだろ？　すぐ助けに行くー」

「余計なお世話よ」

頭から冷たい水を浴びせられたような気がした。

「坊やには関わり合いのないこと。学院にとどまり、軍の命令を待ちなさい」

「……なら、すぐに戻ってきてくれ。夜々の命を救えるのは硝子さんだけだー」

「どの口でそんなことを言うの？」

抑揚のない声。怒鳴られたわけでもないのに、雷真の心臓がきゅうつと収縮した。

「何度、私の言いつけを破ったの？　昨日だって、私は夜々に戦うと言ったのよ。自分たちは約束を破るくせに、相手には義務を果たせと迫るの？」

まさしく正論、ぐうの音も出ない。硝子の方に理がある。

「答えて。坊やは信用に足る男？」

「……正直、自分でも自信がねえ。これまでやってきたこと、頭じゃ馬鹿だとわかってるが……同じ局面になったら、たぶん同じ馬鹿をやる。何度でも」

上手くやれなかったことを、後悔する気持ちはある。

けれど、やってしまったことに後悔はない。

「俺を信頼してくれなくていい。だが、夜々だけは救ってくれ……頼むー」

「夜々の寿命が、残りわずかだとしても？」

ずん、と胃の底に重たい衝撃が落ちた。だが、雷真は歯を食いしばり、答えた。

「ああ、そうだ。俺は最後まで、夜々と一緒に戦いたい」

心の底からそう思っている。相棒と呼べるのは、夜々だけだ。

「……そう。夜々は幸せだったわね」

だったと言ったのか？

凍てついていた硝子の声が、不意に優しくなった。——不安になるほどに。

「夜々のことはもういいわ。小柴を大事になさい。この先の戦いに必要でしょう？」

「おい……何だよ、それ……」

「お代を頂戴しようなんてけちなことも言わない。手切れ金代わりにくれてあげましょう。

——そうそう、その屋敷に置き忘れたものも、全部坊やにあげるわ。自動人形はないけれど、軍にかけ合って、いくつか見繕ってもら——」

「待てよ——」

無意識に受話器を握りしめる。自分の声が震えるのを自覚しながら、雷真は言った。

「賭けは、どうなるんだ……俺たちの賭けは……!?」

「坊やに損はないでしょう」

「何でそんな言い方をする！ 夜々はどうなる!? 助けてくれるんだろ!?」

沈黙の間があく。一瞬だったのかも知れないが、雷真には無限のように長く感じた。折るような気持ちで答えを待つ。やがて、硝子はさりと——

「私は何も、してあげるつもりはないわ」

雷真は絶句した。頭が真っ白になり、思考が止まる。

呆ける雷真などおかまいなしで、硝子は容赦なく言葉を続ける。

「夜々はそのまま捨て置きなさい。学院に渡してもいいでしょう。彼らなら、いくばくか資金を出してくれるかもしれない——」

「もうやめろ——」

怒鳴ってしまう。背後でフレイが身をすくませ、ラビの爪がチャツと床を引っかいた。

「……やめてくれ、そんな言い方。夜々はあんたの……娘じゃねえかよ……」

「娘？ 人形が？」

硝子は小馬鹿にしたように笑った。

「家族ごっこはもうたくさん。心得違いをしてはだめと、何度も教えてあげたはず。自動人形は道具、使えない道具に価値などないわ」

——この硝子は、本物か？

（違う……）

心は違うと叫んでいる。だが、否定する根拠が見当たらない。

硝子の言葉は一貫している。出会ったときからずっと、硝子はそう言っていた。

自動人形は道具だと。勘違いをしてはいけない。人間と同じではないのだと。

雷真が勝手に思い込んでいただけだ。硝子は三姉妹を其の娘のように大事にしていると。錯覚していたのか。勝手な幻想を抱き、押しつけていただけか。

「硝子さん……覚えてるか？ 少し前、俺に、せつ……せ……」

「接吻？」

「……そうだ。その……を、してくれただろ？」

「ええ、覚えてるわ」

ドイツの学生が（十字架の騎士団）を名乗り、夜々を連れ去ったとき。いろりを使えという硝子に反発し、雷真が夜々を取り戻した——あのとき。

硝子は「ごほうび」だと言って、雷真に口づけをくれた。

夜々を取り戻してくれたことには礼を言いたいと、そう言ってくれた。

「あれは……どうしてだったんだ？ こんなふうにな夜々を——俺たちを捨てて行くなら、どうして情をかけてくれたんだ……」

硝子は答えなかった。退屈そうな、倦怠を帯びた沈黙が返ってくる。

（何で答えてくれない？）

やりきれない想いで、雷真はずっと抱いていた想いをぶつけた。

「硝子さんにとっちゃ、俺は殻つぶしの居候かもしれないが……俺は硝子さんを……あの三姉妹を……家族だと思ってんだよ……」

「それは何とも、つまらない誤解だったわね」

出合い頭にばさりと刀を浴びたような、そんな感覚。

雷真の胸のと真ん中を、確かに今、実体のない刃が貫いていった。

「最後の命令を与えるわよ。今すぐ学院に戻って、やるべきことをやりなさい」

「……断る。俺がやらなくちゃならないことは、学院にはない」

硝子はため息をついた。

「なら、どうするの？」

「……そこがどこだか知らないが、硝子さんを連れに行く。力尽くでも、連れ戻す」

「こっちの都合はおかまいなし？」

「硝子さんだって俺の都合を無視してる。……お互いさまだ」

「……最後まで言うことをきかないのね。坊やには本当、うんざりだわ」

くすつと硝子は笑った。普段通りの笑い方が、今は無性に、雷真の胸を締めつける。

「それじゃあね。もう会うこともないでしょうけど」

「硝子さん！ 待っ——」

がちやんつ、と硬い音が鼓膜を打ち、それきり、通話は切れてしまった。

5

ゆつくりと受話器を戻す。フレイが遠慮がちに、雷真の顔をのぞきこんできた。

「ライシン……大丈夫？」

「……ああ、大丈夫だ」

ほんの一秒前まで、泣きたい気分だった。だが、今は――

「むしろ、やる気が出てきたところさ。硝子さんは生きてる。夜々^{ヤヤ}はまだ死ぬと決まったわけじゃない。助けられる！」

フレイは雷真を見つめ、感じ入ったように、小さく微笑^{ほほえみ}んだ。

「やっぱり、ライシンは強いね」

「そうでもねえさ。実は今、ちよつと平べソかいてたよ」

「ううん、強い……。こんなときでも笑ってる」

そつと雷真の口元に触れる。指の感覚がくすぐったくて、雷真はあわてて逃げた。

「う。それで、どうするの？」

「……まずは知恵をしぼろう。デキトーに走り回っても時間を無駄にするだけだ。何とか今日中に硝子さんを見つけねえと」

「う。じゃあ、ライシンは考えてて。私たち、追跡してみる」

「――匂いとか？」

寢室を見上げる。金頭には無論、下着がある。フレイは頬^{ほほ}を染め、怒った顔をした。

「ライシン、やらしいっ……エロ！」

「前にあんたがやってたネタだらー！　つか、結局やるんじゃねえか！」

フレイはもう硝子びやうしの下着したぎを持っていて、ラビの鼻先に近付けていた。それから煙草たばこ、服物はくぶつの臭においも嗅かがせ、屋敷やしきを出る。雷真らいしんもそれに従った。

「毎度思うけど、よくこれでたどれるよな。足のニオイって、地面に残るか？」

「尾じやなくて、草とか、土とか、靴底くつぞこのにおい」

「それじゃ、誰たれが誰だかわからないだろ」

「う。近くまで行けば、洗剤せんざいや香水、本人の香りで、わかる」

下着したぎのにおいが重要になるのは、近付いてからということか。

「う……あのね」

並んで歩きながら、フレイがもそもそとつぶやいた。

「昨日、あんなことがあったから……言っておきたいの」

「何だ、改まって」

「冬が終わって、あったかくなったら」

思い詰めたような横顔。フレイは真剣な調子で、不安げに雷真を見た。

「みんなでまた……お昼、しようね？」

ほんの数か月前まで、当たり前前にできたこと。

だが、学院は襲撃された。乙女たちが座っていた庭園も、変わり果ててしまった。

実戦は夜会とは違い、常に死の危険がある。もしまた襲撃を受けるようなことがあれば、

この先、誰がいなくなるかわからない。

フレイの不安を取り除いてやりたくて、雷真は敢えて、茶化して言った。

「もう変なもん、サンドイッチに入れるなよ？」

「う……入れないもん……」

「なら、約束だ」

フレイは嬉しそうにうなずいた。

それから三十分。二人はラビの嗅覚を頼りに、追跡を続けた。

既に市街中心部、ライムストリート駅前に到着している。

普段通り往來が激しい。昨日の襲撃事件を知って、機巧都市から逃げ出そうとする者もいれば、復旧工事や調査のために訪れる者もいる。

「ラビのやつ、止まっちゃまったな。どうしたんだ？」

「う……。鉄道を使った……みたい」

では、硝子はもう機巧都市にいない？

雷真は天を仰いだ。英国は広い。駅のある街、すべてを当てるなど不可能だ。

（……いや、あきらめるな。まだ手はある。あるはずだ！）

第一に、聞き込みという手がある。いろいろも硝子も恐ろしく目立つ。本当に鉄道を使ったのなら、目撃者は必ずいる。駅員の誰かしらが把握しているだろう。

それに。

（……とびきり危険な方法だが、賭けてみる……価値はある）

自分自身の思考にあきれ、雷真は薄笑いを浮かべた。

ひとつ、とんでもない手を思いついてしまった。

だが、その手段に訴えることが最善なのか、確証が持てない。

いきなり最後の手段に訴えて、万が一失敗したら——硝子は取り戻せない。夜々は死ぬ。

つまり、誰も救われない。これをやるのは、最後の最後だ。

「とりあえず、駅員に訊こう。上りか下りかだけでも覚えててくれれば、大助かり——」

ふわっとクチナシの香をかいだような気がして、雷真は口をつぐんだ。

硝子が好んで焚き焚めていた香だ。それが今、ほのかに香った。

弾かれたように振り向く。背後に、線の細い男が立っていた。

「久しぶりですね、雷真。かれこれ三年ほどになりますか」

日本語で言われる。

雷真は我が目を疑った。次いで魔術を疑い、最後に幻覚を疑った。

男が身につけているのは浅葱色の着物。編み笠をかぶり、わらじ履き。腰には二刀を差

している。異国の風俗に合わせようなどという、殊勝な気持ちだが微塵もない。

編み笠を外し、にっこり笑う。女と見紛うばかりにたおやかな、綺麗な顔だ。

「いやあ、えげれすというのは実に見事な国です。文明開化の香りがしますねえ」

「……開花も何も、こっちの文明だろ」

「によしようにも美しい！ おお……いと神々しい、神々のいただきよ……」

フレイの胸に鋭い眼光を放つ。雷真は頭痛を覚えた。そして反省した。はたから見たら、女性の胸に見とれるというのは、こんなにも見つともないことなのか。

フレイがびくびくとカニ歩きして、雷真の背後に隠れた。

「う……この人、何て言ってるの？」

「あんたがすごく綺麗だってき」

「うー そ、それは、その……どうもっ」

「胸もでかいって」

「う……!?」

嬉しそ^{うれ}うだった顔が、たちまち悲しみに曇る。フレイは両手で胸を隠し、非難がましい目で雷真を見た。――別に雷真が悪いわけではない。

(フレイにも見えてるってことは、幻覚じゃねえ)

少なくとも、存在はしているようだ。雷真は一応、確かめてみた。

「師範。本物……なのか？」

剣の師――雲雀は両手を広げ、そつと雷真を擁護した。

女のような細腕で、雷真の背中を叩く。細く締まった体はしなやかで、強靱な瞬発力を秘めていた。あの頃とまったく同じ感触だ。

いつも笑っているような目、ほっそりと筆で書いたような眉、色白で骨ばった長身瘦^{やせ}躯。いずれも、雷真の記憶の中の彼と一致する。

本物だ。ようやく実感がわいてくる。

くすぐったい気持ちになる。と同時に、雷真は冷静さも取り戻した。

「会えたのは嬉しいけどよ、観光案内してやる余裕はねえんだ。俺は今めちゃくちゃ取り込み中で——聞が悪いにもほどがあるぜ」

「まったくもって同感です。何もこんなときに、ねえ？」

心臓をわしづかみにされたような気がした。

どういう意味だ？ この男、何を、どこまで、知っている？

「……師範。英国には、何しにきたんだ？」

雷雀の目が、ずっと刃物のように鋭くなった。

それだけで空気が凍りつき、道往く人々がぞっとした様子で立ちすくんだ。ラビが逃げ腰になり、ふさふさのしっぽを後ろ足に挟む。

雷雀は雷真を冷たく見据え、感情の消えた声でたずねた。

「君を斬りに——と言ったら、どうします？」

次の瞬間、駅の内部で爆発音が響き、ガラスの天蓋が粉々に弾け飛んだ。



Chapter 2

弱さを知れ

1

ライムストリート駅に、特異な列車が到着した。

わずかに二両。機関車と装甲された客車のみ、という異様な編成だ。

その客車から、白衣姿の乙女が降りてくる。

緑がかった髪をゆるく三つ編みにして、肩に垂らしている。おっとりとして頼りない顔立ちだが、瞳の奥には油断ならない知性の光があった。

乙女は駅に降り立つと、ぶるぶるっと身震いした。

「ううっ、さむーい！」

その後ろから、そっくり同じ顔立ちの、乙女型自動人形オビエクト・ヒューマンが降りてくる。

「白衣の下は夏の格好ですから、当然です」

「へぶちっ。ううっ、失敗したな。私ってそうゆうとこ抜けてるよね」

「お気を落とさずに。イオネラさまは天才ですから、バカと紙一重なのです」

「それ替めてないし！ 暖めてもないよね!」



怒り出すイオネラの肩に、人形は自分の上着をかけてやった。

「駅舎の外はもっと冷えますよ。白衣一枚は控えてくださいませ」

「……うん。ありがとう、エヴァ」

されるがまま、白衣の上から上着を羽織る。かなりヘンテコな格好だが、イオネラ自身は頓着せず、懐かしそうに学院の方角を眺めた。

「雷真くん、驚くかなー？」

「驚くだろうと予測されます。ですが、同時に嫌な顔をするものと予測されます」

「え、何で？ 私何してないよね？むしろ歓迎されるべきだよね？」

エヴァは主の質問をスルーして、あくまでも無表情で言った。

「スケコマシのライシンさまは、また取り巻きを増やしているでしょうね」

「私は気にしないよ。だって、その状態の雷真くんを手に入れちゃえば、全員私のものになるってことだからね」

「実にイオネラさまらしい、自分本位な発想ですね。嫉妬はされないのですか？」

「うん。私は私を一番に抱っこしてくれれば、それで満足だからね♡」

「一番は難しいと思うがね。よく戻ったな、イオネラ」

横から声をかけられる。ホームの中央に、キンバリーが立っていた。

相違わず隙のない立ち姿。その後ろにもう一人、黒髪の女性が立っている。そちらはダークカラーの背広姿で、白い装甲の機械天使を二体、従えていた。

「やつほー、エイミーちゃん。お迎えありがとう」

「キンバリーと呼びたまえ」

「女史よ、要人とはこの少女か？」

男装の女性が怪訝そうにする。キンバリーはうなずいた。

「そうだ。以後、私と君とで護衛する」

イオネラはきよろきよろと左右を見回し、不満げに唇をとがらせた。

「うー、残念。雷真くんも運えにきてくれると思ったのに」

「バカ弟子？ よくわからんが、それはすまなかった——」

「雷真くんがおかえりのチューをして、そのままベッドに運んでくれると思ったのに」

「女史よ、つまりこの小娘は斬っているのか？」

「いいわけがないだろう。分別を持て」

殺氣立つ彼女を恐れもせず、イオネラは天真爛漫な笑顔に向けた。

「初めまして。あなたが魔王ゼルダちゃんだね？」

「ちゃん、だと？ む……ちよつと可愛らしい気もするが——」

はつとして、かぶりを振る。

「おかしい呼び方をするな、なれなれしいー」

ぎんつ、とイオネラをにらむ。ケンカ慣れしたチンピラでも逃げ出しそうな迫力だったが、イオネラはぼやぼや笑っているだけだ。

機械天使二体がその前に進み出て、優雅に腰を折ってお辞儀した。

「ご無沙汰しております、ママ」「ご機嫌麗しく、ママ」

「ごぶさただねー。二人とも、元気してた？」

「ママ——お母さんと言ったのか？」

グリゼルダが目を見張る。二体は頭部をスムーズに上下させた。

「肯定ですわ、マスター」「イオネラさまは我らの製作者です」

「馬鹿を言え。こんな子どもに、おまえたちほどの自動人形オートマタが造れるものか」

「イオネラを子ども扱いするな。君だって私から見れば小娘だ」

キンバリーにまで肯定され、グリゼルダも疑うわけにはいなくなる。

半ばあきれたように、二体とイオネラを見比べた。

「よほど経験を積んだ、熱練の名工が手がけたのだと思っていた……。設計に一切の無駄

がなく、構造は強固、機構の信頼性も高く、魔力伝導にも減衰がない。何と言うのか……

天才というものを目の当たりにした気分だ」

「魔王さまに誉めてもらえるなんて嬉しいね。でも全然、大したことはないんだよ。基礎

設計はDワークス案をベースにしてるし」

「私とて素人ではない。言うほど簡単な話ではないと理解しているつもりだ」

自動人形は普通、搭載する魔術に合わせて設計される。Dワークスの設計は、あくまで

も（熱風操作）を前提として作られていたはずだ。

「そもそも機巧としての精緻さが違う。ケルビムとは雲泥の差じゃないか」

「こつちが後発なわけだしね。先行機体に勝てないようじゃ、先に設計した人に失礼だよ。魔術回路はエイミーちゃんがいじってくれたから、負担は半分こだし」

「……まさに天才の言動だな。簡単そうに聞こえるよ」

魔王が苦笑する。キンバリーはイオネラの肩を抱き、改めて紹介した。

「事実、このイオネラは本物の天才だ。本来ならまだ学生たるべき年齢だが、ことハード面——機械いじりに関しては、当代随一と言っている。ゆえに少々危険な存在でね。現在は魔術師協会の監督下にある」

「そんな御仁がなぜ学院に？ 昨日の今日で、結社の再襲撃もあり得るぞ」

「うん、それなんだけど。私は私の責任を果たしにきたの。半年前の自分のあやまちを正すために、戻ってきたんだよ」

「半年前？」

「初夏、機巧都市を襲った大事件——君にも伝えてあるだろう？」

キンバリーに言われ、グリゼルダはすぐに思い至ったようだ。

「陸上戦艦ダイダロス——バカ弟子が最初に黒太子とぶつかった、あれか」

「そう。狂王子が機巧都市を支配し、五十万の市民を危険にさらした。あの所業を可能にしたのが《絶対王権》と《無限連鎖反応》。その脅威は、先刻ご承知だろうか」

「つい昨日、嫌と言うほど味わったな」

「結社はあれを実用化し、実戦に投入した。対策は急務だ。あんなものが各地の紛争地帯に投入されたらと思うと血が凍るよ。急ぎ、対抗魔術を用意させる」

「ふむ。それはわかったが、工学教授なら大勢いるぞ。なぜ、この娘なんだ？」

「それはだって、どっちも私が作ったものだからね」

「なに——？」

グリゼルダがまばたきをした、その瞬間、となりのホームで何かが光った。

大気を震いで、こぶし大の金属弾が飛んでくる。

それは空中で炸裂し、閃光と衝撃をまき散らした。

爆発音が響き渡り、天井のガラス屋根が弾け飛ぶ。破片が雪のように舞い、さらさらと

まふしく日光を弾いた。

至近距離からの爆破。ずだ袋にされてもおかしうはなかったが、キンバリーの（魔防）

——念動の盾が三人を守っていた。

敵も決められるとは思っていなかったようだ。爆発の煙にまぎれ、四足のシルエットが

飛びかかってくる。サーベル状の長い牙がイオネラの首を狙う……が、これも当たらない。

自動人形の牙は、白い刀身が受け止めていた。

機械天使ディガンマが、同時に剣へと姿を変え、牙の一撃を止めたのだ。

「身の程を知らんな。この程度の腕で魔王に挑むか」

刃はそのまま、牙ごと頭部を切断した。頭蓋を割られ、自動人形が転倒する。

どこかで機銃が暴れ、グリゼルダに弾丸が降りそそいだ。

ステイグマを呼び寄せるまでもない。指先に魔力を収束させ、手当たりしだいに弾丸を弾く。その動きにイオネラは目を奪われた——はずなのに、彼女を見失った。

一瞬で消える。すべるような動きで、天井の鉄骨まで飛び上がっていた。

「すごい！ 完全統制振動を自分に！」

驚嘆したときには、潜んでいた敵が振り落とされている。

「術者への援用——理屈ではできると思ってたけど、本当にできるんだ……！」

「彼女は特別だ。あれも機巧戦闘の天才だからな」

キンバリーが苦笑混じりにつぶやく。それから、落ちてきた者を念動で受け止めた。

覆面で顔を隠しているが、まだ若者のようだ。気絶したらしく、動かない。

やがて、グリゼルダが戻ってくる。両手に一人ずつ、覆面の若者を抱えていた。

計三名。全員の覆面をはぎ取って見て——驚愕する。

「学院の生徒じゃないか！ おい起しろ！ なぜ私たちを狙った！」

ばしばしと強烈な平手を食らわせる。キンバリーはあわてて止めた。

「よせ。それでは殺してしまおう」

「エイミーちゃん、これって……どういうことなの？」

イオネラがたずねる。だが、キンバリーは黙り込んでしまった。

顔色が悪い。グリゼルダが焦れて、催促のように訊く。

「女史よ。護衛とはつまり、この連中を警戒してのことか？」

「……違う」

「なに？」

「違うと言ったんだ。イオネラの護衛は結社の再襲撃を警戒してのこと。いずれは連中を釣り出し、返り討ちにするための施策だ。こんな事態は……想定していない」

「学生が教授を狙うなど、考えられんぞ。何が起こっている？」

「少しは自分で考えたまえ。——まあ、このバカどもを締め上げればわかることだ」

「ねえ—— だけど、学院の方はどうなのかな？」

イオネラの言葉に、教授二人が顔を上げた。

「学院に何かが起こってる……ってこともあるよね？ 今すぐ戻った方がよくない？」

「一方で、おまえを狙った可能性もある。女史よ、身を隠すべきではないか？」

どちらの意見ももっともだ。キンバリーは二人の意見を吟味して、

「——戻ろう。教授会に報告し、学院長の指示を仰ぐ」

三人の教授はたちちに駅舎を出た。野次馬（やじうま）がたかり始めた駅前に連えの車が待っている。ディガンマ、ステイダマ、エヴァの三体が学生を車内に押し込んだとき、グリゼルダとキンバリーがいさなり振り返った。

通りをにらむ。ただならぬ様子に、イオネラは狼狽（うろたへ）した。

「えっ、なに？ 二人とも、どしたの？」

「……イオネラさま、頭を低くしてください。近くで戦國の気配がします」

エヴァがイオネラを背に隠す。グリゼルダはチツと大きく舌打ちした。

「——この波長、バカ弟子だ。敵はとんでもない怪物だぞ」

「え、雷真くんが近くにいろの？ どこどこっ？」

「夜々がいけない今、とても勝てる相手ではない。女史よ、すまんが私は救援に行く！」

「護衛はどうする。一人で要人警護は困難だ」

キンバリーはいい顔をしない。グリゼルダは苦しそうに肩を歪めた。

イオネラはきよんとんとして、

「護衛なら、気にしなくていいよ。私にはエヴァがいるし」

「そうはいかない。絶対王権が効かない敵もいる」

「よっぼどじゃなければ大丈夫だよ」

「その『よっぼど』を前にして言う台詞かね」

グリゼルダを不す。なるほど、彼女ほどの支配力があれば、絶対王権にも屈しない。

「自覚を持ちたまえ。君は今や、学院の切り札なんだ」

「うーん……でも切り札って言うなら、雷真くんもそうだと思うんだよね」

キンバリーとグリゼルダが、そろって目を丸くした。

「まわりが『絶対無理！』って言うこと、全然聞き入れないよね。それで結局、やり逃げ

ちゃって。そういうの、技術や知識以上に、強力な武器だと思うから」

教授二人が顔を見合わせ、苦笑いになる。キンバリーはうなずき、

「エヴァンジェリンと私で何とかしてみよう。ゼルダ、君は問題児を拾いに行け」

「ああ。デイガンマ、ステイグマ、ついてこい」

「イエス、マスター」
「命令に従います」

機械天使二体を連れ、すべるように飛んで行く。普段は能天気なイオネラも、さすがに胸騒ぎを禁じ得ない。

戻って早々、よくわからない事態に巻き込まれつつある。

イオネラの研究成果が狙われたとか、学生が教授への不満を爆発させたとか、そういうわかりやすい脅威であつてくれればいいのだけれど……。

エヴァがかけてくれた上着を、ぎゅっと握りしめる。ふさふさの襟に顔を埋めてみても、肌寒さは消えなかった。

2

駅のガラスドームが砕け散るさまを、雷真は愕然として見守った。

硬直していた紳士淑女が我に返り、悲鳴をあげて逃げ惑う。その狂騒をどこか他人事のように感じながら、雷真は顔に顔を戻した。

「俺を斬る——って、言ったのか？」

フレイが反射的に魔力を纏り、ラビは警戒を強め、低くうなった。

雲雀は細い目をさらに細め——直後、ふわっと表情をゆるめた。

「ま、冗談なんですけどね」

「冗談言ってる場合かよー」

……と、口では突っ込んでみたものの。

冷たい戦慄が消えず、冷や汗が引かない。

師の言葉はおどけているのに。顔はへらへらと笑っているのに。

たった今、師から発散された殺気は、間違ひなく本物だった。一般市民——戦士の素養を持たない者たちですら、肌で感じておののいたほどの、明確な殺意だ。

空気はまだざわめいていたが、通行人がそれぞれの歩みを再開し、駅前に平穏が戻ってくる。雲雀は雷真に無防備な背中を見せ、もの珍しそうに駅舎を見上げた。

「物騒ですねー。えげれすでは駅が爆発するものなんですか？」

「……そんなわけあるか。つまらない冗談はやめてくれ。こっちは必死なんだ。すぐにも硝子さんの居場所を割り出さねえと」

「それは私も同じです」

唐突な言葉。驚く雷真に、雲雀は当然という調子で言った。

「先ほどの君の質問ですが、私がこの国にきたのは、花柳斎殿を護衛するためです」

「護衛——それは本当か？」

「本当ですよ。はるばるやってきてみれば、護衛対象が行方不明とは、ウケますね」

「笑い事じゃねえー 行方不明ってどういうことだ？」

「手がかりなしということですね」

「……少将にわたりをつけてくれ。硝子さんのこと、詳しく訊きたい」

「それは無理です。少将は君とはお会いにならないでしょう」

ふと、雷真の脳裏に剣呑な思考が閃いた。

もしや、硝子の屋敷に踏み込んだのは——日本軍では？

この男は確かに雷真の師だ。だが、信用してもいいのだろうか？

「う……ライシン、これからどうするの？」

フレイに耳打ちされ、雷真は我に返った。そう、旧交を温めている場合ではない。

「一旦、学院に戻ろう。夜々の様子が心配だ。それから人手を集めて、駅周辺の聞き込みを始める。——師範はどうする？ 硝子さんを捜してくれるのか？」

「無論、捜します。ですが、私も学院に向かいますよ」

「え、何で？」

「うわあ……何で、とききましたか。つれないですねー、親も同然の私に……よよよ」

泣き真似をする。昔と変わらず、面倒くさい男だった。

「いいけど、学院は昨日の襲撃でズタボロだぜ？ 泊まるどころもない」

「どうぞおかまいなく。ときに娘さん、実に立派なものをお持ちですね」

「う？」

「さぞや肩が凝るでしょう。あ、私、按摩マッサージの覚えもあるのですが、どうです？」

「うう？」

日本語がわからないフレイは、愛想笑いを返すだけだ。それが幸いと、雲雀うんぐすくはさわやかな笑顔でとんでもないことを言っている。雷真はとりあえず師を無視して、駆け出そうとした。……したのだが。

ラビが耳をピンと立て、聴覚に集中した。

「うー この声！」

フレイも異変を察知する。ややあって、雷真の耳にも大の遠吠えとんぐえが届いた。

方角は前方——学院の方角だ。

フレイは切羽詰まった様子で、雷真を振り返った。

「急いで！ 学院で何かあった！」

「何かって、何だ？」

「わからない……。もう少し近付けば、視覚を共有できるけど……。ただ、みんな敵意に怯おそえてる……。これって戦闘かも——」

すべて聞き終える前に、雷真はもう駆け出していた。

心臓が痛いくらいに暴れている。嫌な予感で胸が裂けそうだ。魔術師とは因果なもので、この手の予感はずなにして的中する。

夜々の身に何かあったのか。それとも、仲間たちに脅威が迫っているのか。昨日のように、後手に回るのはもうごめんだ。

焦燥感に急かされるまま、雷真は全速力で走る。

学院正門へと続く大通りまできたとき、フレイがすっ頓狂な声を上げた。

「うー！ ゲートが閉門準備中！」

指を差す。通りの突き当たりで、確かに正門が閉まりつつあった。

この速度で駆け込めば、間に合わないこともないが……。

「何でゲートが——正門は常時開放のはずだろ？」

「原因は、あれではありませんか？」

緊張感のない声で、雷雀が反対方向を示す。

正門と向き合う方角に、整然と並ぶ影があった。

道路を封鎖し、隊列をなして、学院をにらんでいる。そろいの制服に身を包み、同じ型

の自動人影を随行させている。遠目に確認できるのは、風にはためく豪華な軍旗。因納は

獅子とユニコーン、剣と杖をかたどった紋章が描かれている。

「先ほどの爆発を調査しにきた……とは思えませんね」

それはそうだ。あれは警察官でも、消防隊員でもない。

「機巧師団だ！」

英国が誇る機巧戦闘の主戦力、最先端の機械化部隊。その行動範囲は陸、海を問わず、

総力は人機合わせて三師団三万六千を超す、帝国最強の軍――

「何でこんなところに……!?」

「彼らの目線を見る限り、学院を包囲するつもり――のようですね」

雲雀が十字路に立って、市街を見渡した。

確かに、東西の大通りを同種の部隊が移動している。目についただけでも数千規模。昨日の応援にしては、数が多すぎる。学院を包囲する理由もわからない。ぐちゃぐちゃに思考がからまって、雷真は立ちすくんだ。

わけがわからない。夜々が死の危機に瀕し、雷真はかつてないほど逼迫した状況にある。行方知れずの硝子を、一秒でも早く見つけ出さなくてはならないのに、駅では謎の爆発が起き、学院は機巧師団に包囲されつつある。

「う。ライシン、門がしまっちゃう……!」

フレイが弱々しい声で言う。学院の正門はもう、鉄扉で閉ざされようとしていた。

（どうする……!?）

夜々の様子を見に行きたいが、正門を閉ざすほどの事態なら、出入りは厳しく管理されるだろう。入ればしばらく出られない――出してもらえないことは明白だ。

雷真が夜々の側について、できることは何もない。

つまり――選択の余地はない。

雷真はフレイを振り向き、すがるような気持ちで言った。

「あんたは戻れ。でもって、伝言を頼まれてくれ」

「う……どうすればいいの？」

「小紫に駅までくるよう伝えて欲しい。それから、日輪にも声をかけてくれ。俺は一時、駅で待つ。落ち合えなかったら、一人で行く」

「行くって……どこに？」

「頼んだぞー 急いでくれー」

フレイの背を押し出す。フレイは困惑した表情で、しかし力強くうなずき、ラビの尻を軽く蹴って、ゲートに向かって疾走させた。

「へえー よく訓練されたお犬さまですねー」

事頭の深刻さがわかっていないのか、雲雀は軽い調子で言った。

「それで雷真、君はこれからどうするんです？」

「……いちかばちか、博打をかますことにした」

苦笑が浮かぶ。だが、自分らしいとも思う。

先ほど思いついた、「最後の手」を初手で指す。

吉と出るか凶と出るか——それは、賽を投げればわかることだ。

市街に展開する機巧師団の動きを、学院の中心から観察している者がいた。

学院長エドワード・ラザフォード。

壁の削れた学院長公邸、その執務室で、人頭大の水晶玉をのぞき込んでいる。

映し出されているのは市街の映像だ。学院を取り囲む城壁は見張りの望楼を兼ねていて、上部に設置された光学式魔具から、リアルタイムで情報が送られてくる。

「何とも壮観だな。第一機巧師団の勇士たちが揃い踏みだ」

「その余裕、一体どこからくるのだね？」

ラザフォードの腹心、パーシヴァルがあきれ顔でつぶやく。

パーシヴァルは長椅子に腰かけ、立てた杖に両手をのせていた。吹き込む冷気は老骨にこたえるはずだが、気にするふうもなく、仙人眉を片方だけ持ち上げる。

「おまえさんのお気に入り——（下から二番目）が人形を失ったぞ」

「まだ失ってはいない。失うと決まったわけでもない」

「もちはせぬよ。生体機巧は嫌と言うほど見てきた。寿命の近付いた器品はわかる。予見に誤われし（玉座）の（かたわら）は、あの日本人形かとも思ったが……」

ため息をつき、かぶりを振る。

「違うようだな。そして、かの狂犬も玉座に君臨すること叶わなんだ。やはり（玉座）は魔王の暗喩。夜会の頂点に立つ者が、神性機巧を導くということだ」

「さて。その判断は少々、勇み足というもの——」

「ごんごんつ、と壊れたドアを叩き、秘書官アヴリルが入ってきた。

ラザフォードは相好を崩し、両手を広げて迎え入れる。

「ご苦勞、アヴリルくん。君にも心配をかけたな」

「いえ、心配など露ほども。むしろ魔女にやられて死ねと思っております」

「アヴリルくん……」

情けない顔をする。アヴリルは視線をそらし、不機嫌な口調で言った。

「……再びこの部屋に戻ってくることになるとは。悪運だけはお強いようですね」

それは一応、祝辞を述べているのだろうか？

アヴリルは軽く咳払いをして、いつも通り不遜な顔になった。

「ですが早速、新たな難局にいらつしやるようで。日頃の行いが悪いからだ」

「残念ながら、そのようだ。彼らは何か言ってきたかね？」

「（妃殿下） 將軍からお招きを承けております」

「……それは何とも、光榮な話だ」

「午後の紅茶を一緒にしたいと。お鷹はあちらで用意されたそうです」

ラザフォードの手元、水晶玉を示す。包囲は完了し、機巧師団はバラけている。手薄と

言えば手薄だが、司令官の懐に飛び込めば、脱出は困難と思われた。

ラザフォードは少し考え、水晶玉を戸棚に戻した。

パーシヴァルがすぐに察して、学生の不注意をとがめるように言う。

「まさか、行くつもりではあるまい？」

「行くとも。ほかに選択肢がない」

「無理難題を吹っかけられるだけだぞ」

「しかし、学院はご覧の有様だ。第一機巧師団一万二千の蜂攻撃を受けて、持ちこたえられるとはとても思えん」

在籍している学生は各国選りすぐりの秀才たちだが、実戦経験に乏しく、人数もわずかな十分の一。警備は昨日の戦闘で大きく数を減じていて、再編を急いでいるところ。教授は一騎当千のつわものぞろいだが、正規軍と戦闘させるわけにはいかない。

つまり、戦端が開かれてしまえば、勝ち目がない。

「まずはあちらの言い分、要求を開かねばなるまい。存外、結社を撃退した我らに褒賞をくださるのかも知れんよ？」

「あれほどの兵を並べて、どんな褒賞を出そうと言うのだ。行けば、おまえさんが虜囚となるぞ。昨日のようにね」

「だろうな。しかし、今日は用意する余裕がある」

指先に魔力を込め、虚空中に円を描く。魔力の光が幾何学模様を描き、魔法陣を形成した。その中央から、一冊の分厚い書物がせり出してくる。

魔導書レメゲトン。伝説級自動人形の召喚記録だ。

ラザフォードは書を手に取り、バラバラと頁を繰って――苦笑した。

「ラザフォード？ どうした？」

「……これは痛恨の失策。なかなかどうして、知恵が回る男だよ、あの狂大は」

開いた頁をバーシヴァルに見せる。本来はびっしり書き込まれているはずの文字列が、綺麗に白紙となっていた。

「私がやったのと同じこと——持った瞬間に気取られぬ範囲で、いくつか抜いていたようだ。はてさて、何人を犠牲にしたのやら……」

「笑い事ではない。一体でも金蓄藏の手に渡れば、またぞろ厄介なことになる」

「さて。あの男ならば、魔女殿には隠していそうな気もするがね」

ラザフォードはあごひげを撫で、しばし黙考した。

十数秒かけて思考をまとめ、鷹揚にうなずく。それから、張り詰めた様子のアヴリルに、重々しく命令を告げた。

「全学生に通達、急ぎバリアトライアルを構築せよ。陣頭指揮は——そうだな、アスラ・オーエンくん任せよう。警備隊にディフェンス・コンディションCを発令。私に構わずゲートを封鎖、掩体を築いて外敵の侵入に備えよ」

アヴリルが復唱するのを待って、バーシヴァルを振り返る。

「バーシヴァル、君も茶会に付き合ってくれるかね？」

「茶番の間違いだろう？ 枯れた年寄りでも役に立てるかな？」

「無論だ。君がいてくれれば、死なずに済む」

「ならば、行かいでか。マグナスも出すべきと思うが――」

「（押の御子）はどうだね。」

「安定している。だが、光を浴びすぎたな。わずかながら、縮退反応が見られる」

「では、彼にはここにいてもらおう。切り札には切りどきがあるものだ」

「あのー 私も――」

アヴリルが何か言いかける。その肩にほんと手を置き、ラザフォードは言わせない。

「立場を自覚したまえ。――後のことはよろしく頼む」

それだけを告げ、パーシヴァルとともに部屋を出る。

アヴリルは唇を噛んでその背を見送り、忌まじまじげに執務机を叩いた。

4

駅前は騒然としていた。碎けたガラスを清掃員が片付け、警官が被害状況の検分をする。それを野次馬が見物し、淑女たちが噂話に花を咲かせている。

列車の通行に支障はないということで、もう運行が始まっている。良く言えば大らか、悪く言えば無用心な、時代を反映した措置だった。

その向かい――カファエのバルコニー席で、雷真と雲雀が小紫の到着を待っていた。

「……なるほど、そういうことでしたか」

雷真の話を聞き終えると、雲雀は珍しく笑みを引つ込め、真顔になった。

「おぼろげながら状況はわかりました。雷真、君の相棒だという娘さんは——」

「……ああ、やばいんだ」

「そんなときに、すみませんね。つくづく、私は聞が悪い」

自嘲気味に笑う。忘れかけていた郷愁が甦り、雷真の胸が詰まった。

「……いや、余えて、騙しかった」

道場で過ごした日々——とりわけ、生家を飛び出してからの数年間を思い出す。

流行らない道場には、門弟が少なかった。週に三日は、朝から晩まで二人きりだった。

破れた障子を二人で張り替え、ともに床を磨き、洗濯をした。

雲雀は万事にいい加減で、細かいことにこだわらない。楽天的で、あっけらかんとして

いる。この男の道場だからこそ、家を出ても寂しくなかった。

「聞が悪いのは確かだけどな。こんなときでなければ、もっとよかった」

「おお！ あっちの女給さん、あの影らみはもはや兵器ですねー」

雷真はずっこけた。

「緊張感ねえな—— あんた、硝子さんの護衛なんだろー」

「ええ、もちろん——」

「雷真——きたよー」

小紫がバルコニーに飛び上がってくる。泣き腫らした目が痛々しく、肌には憔悴の色が

見えた。それでも好奇心に満ちた目で、じつと雲雀を見る。

「この人……誰？」

「道中、話すよ。――師範、あんたはどうする？」

「それはこちらの台詞ですよ。どうしようと言うんです？」

ゆるんでいた緊張の糸が、一瞬で張り詰めた。

雲雀はうつすら眼を開き、雷真に厳しい視線を向けた。

「その娘さん、雪月花と見受けました。その子で何をしでかすつもりです？」

雷真は密かに魔力を高めながら、師の問いに答える。

「硝子さんを捜しに行く」

「あの方の行き先に、心当たりでも？」

「ない。……が、アテはある」

「それはどこです？」

「……それを言っちゃったら、たぶん、軍には止められる」

「であれば、私も行かせるわけにはいきません。今や、軍の食客身分ですからね」

いつものとほけた口調。だが、雲雀の眼はもう、笑っていない。

雲雀の刀が強烈に存在を主張し始める。黙って行かせてはくれないようだ。

のるか、そるか。雷真は遠退の末、路けに出た。

「バツキングダム宮殿だ」

その返答には、百戦錬磨の刺客も、目をむいた。

「……同盟国の元首さまがお住まいですよ？ そんなところへ何をしに？」

「どうやら国王が顔なじみらしくてね。茶を飲んで、世間話をする」

「何の話を？ そして、なぜ王さまでなければならぬのです？」

「硝子さんは結社の指輪を持っていた——つまり、結社に関係してる」

びくつ、と小紫の肩がはねた。どうやら、知らなかったようだ。くすぶっていた疑惑が少し暗れる。たぶん、姉妹たちも知らなかったのだ。

「硝子さんが結社の敵であれ、一味であれ、連中に訊けば一発でわかる。俺の知り合いで、連中に顔が利いて、居場所がはっきりしてる奴は、一人しかいない」

「それが王さまですか？ だから敵地に向かうと？」

「心配はいらない。あいつは俺が大好きなんだ。だから、必ず話を聞いてくれる」
雲雀は嘆息した。——結論から言えば、雷真の賭けは失敗だった。

「そんなさまで、よくも今日までクビにならなかつたものです。花柳商賈も、さそや手を焼かされたことでしょう。案外、君に愛想を尽かしたのではありませんか？」

「……それは、思い当たる節がありすぎるな」

言われたばかりだ。坊やにはうんざりだと。

だが、もしもそうなら、なおさら行かなければならない。

「雷真。君に私が倒せますか？」

「——え？」

「倒せるなら、止めはしません。ですが、私に勝てぬようなら、行つても大死にするだけ。同じことなら、私の手で終わらせる。それもまた師たる者の慈悲です」

「おい、待ってくれ！ 話が飛びすぎだ。全然、見えねえぞ！」

「実は私、昨晚、魔王ライコネンさまと仕合いましたね」

「——!?」

今度は、雷真が目をむく番だった。

昨晚ということは、雷真が撃退した後の話か。ライコネンにはまだ余力があったはず。だが、雲雀の体にはかすり傷ひとつ、火傷ひとつ見当たらない。

「倒した……のか？」

「討ち漏らしました。消滅し、部下を失い、疲労困憊の彼に、卑怯にも騙し討ちをかけ、必殺の間合いで剣を抜き、それでもなお、仕留めそこなつたんです。尋常に立ち合えば、こちらが死んでいたでしょう。いやあ、危ない話ですねー」

飄々とした口ぶり。自分の命が危なかったと言っているのに、何とも軽い。

この男はたぶん、くぐり抜けてきた死線の数が違うのだ。

「その私を倒せぬようなら、魔王さまや、そのお味方には勝てぬということ。だから、試してみませんか。君の今の実力を」

雲雀は二刀のうち、片方を雷真に放り投げた。

とつきに受け止める。ずしりとくる重量に、眠らせていた感情が目覚めそうになる。

「貸してあげます。抜きなさい」

「断る。こんなところで闘る気はねえし、俺はもう……剣を捨てた」

「捨てた？　なぜです？」

無言で見つめ返す。雲雀は怪訝そうにしたが、深くは追及しなかった。

「まあいいでしょう。ですが、抜かなければ——死にますよ？」

雲雀から凄まじい剣気が飛んだ。強烈な死の予感に膝が萎える。雲雀はまだ剣を抜いていないのに、数千人の暴徒に銃口を向けられたような脅威を感じた。

呼吸が詰まる。学院長やグリゼルダに感じるのと同種の威圧感だ。小紫が怯み、思わずと言ったふうに、腰の銀剣に手を伸ばした。

雷真は内心で計算を働かせた。抜かせる前に八重霞を用いれば、一介の武者など、手もなくひねることができる。だが——それは、やってしまつていいことか？

武芸一筋で生きてきた男を魔術で叩きのめすなど、あまりにもむごい仕打ちだ。まして、養い親と言つていい相手だ。できれば……戦いたくない。

雷真は刀を師に投げ返した。

「おや？　怖じ気づきましたか？」

「……言つたろ。俺はもう剣を捨てた」

「捨てた理由を聞きましょう」

「……俺が使つて、鉄が折れるわけでなし。夜々が本気で振り回せば、刀の方が折れちゃう。俺たちにはいらぬものだ。それに、剣では……何も護れなかった」

砂を噛んだような苦味が広がる。これを師に言うのは、あまりに不義理な気がした。だが、言葉は勝手にすべり出る。かつて炎の中で感じた絶望が、無力感が、雷真の舌を勝手に動かし、怨嗟の言葉を音にする。

「撫子を護れなかった。親父も、おふくろもだ。剣では……あいつに届かねえ」

「魔術なら、それができるといふのですか？」

「そうだ！ 俺が剣術なんかにつつつを抜かしてなけりや……赤羽の家で、ちゃんと傀儡の修行をしていれば……」

約束通り、撫子の側にいれば。

撫子は助かったかもしれない。少なくとも、かばって戦うことはできた。

「俺は間に合いもしなかった！ あいつを護ってやる、どころか……」

「いやあ、あされてものも言えませぬわ。何と幼稚な……子どもの理屈ですよ」

龍天氣な声でそう言われ、雷真は愕然とした。

信じられない思いで師を見上げる。

「おや、何です、その顔？ 慰めの言葉でも期待していましたか？」

雲雀は見違かしたように微笑み、そして、きっぱりと告げた。

「ご家族のことは、お気の毒でした。ですが、妹御を守れなかったのは、君が傀儡の修行

をしなかったからではありません。単に君が弱かったから、ですよ」

「……ああ、そうだろうさ。だから、俺は人形使いに」

「剣では何も護れなかった——まるで、剣を極めたような言いさまです。極めてなお、君がそれを口にしたなら、私は否定しませんが」

無造作に席を立ち、自然体で歩き出す。構えもへつたくれもなく、剣術の基本——すり足ですらない。雲雀はすたすたと歩きながら、

「ひよこのさえずりならば——度し難い」

野生動物なみの五感を持ち、研ぎ澄まされた第六感を身につけ、さらには天眼を体得した雷真にも、何が起ったのか、把握できなかった。

講談でよく聞くフレーズが廻る。「抜く手も見せぬ手練の早業」とは——

これだ。

5

「おまえは……生きよ！」

あのととき、父はそう叫び、雷真を炎の中から救い出した。

壊れかけの人形に抱えられ、雷真は庭先に転がり出た。

直後、焼けた梁が落ちてきて、父の姿を覆い隠してしまう。

魔力の供給が断たれ、人形は崩れ落ちた。はらわたのように破片をぶちまけ、動かなくなる。黒々とした煙にまかれ、灰が焼けつくのもかまわず、雷真は叫んだ。

「親父——っ！」

ごうごうとうなる火焔が、無雷真の声をかき消してしまふ。

「親父っ……撫子……くそったれ……っ！」

今しがた目撃した、がらんどうの亡骸が胴腹に焼きついていゝる。

妹だったものは、主要な生体部品を抜き取られ、無惨な姿をさらしていた。理由など考えるまでもない。雷真とて傀儡師の家に生まれた子ども、禁忌人形タブー人形の存在は知っている。撫子はたぶん、人形の材料にされたのだ。

（神を……造るため……だと……!?）

兄の言った言葉は、無意味な単語の羅列に聞こえた。

神？ 神とは何だ？ 武神のようなものか？ 神仏か？

兄を尊敬していた。信じていた。頼みに思っていた。それなのに——

ふと落とした視線の先、地面に刀が転がっていた。

人形が使う武装だろう。一度は炎を浴びたようで、鞘は炭化し、柄巻が焦げている。無意識のうちに拾い上げる。その途端、天啓のような思考が閃いた。

この剣で落とし前をつけるのだ。この手で、兄を……殺すのだ！

「そんな玩具で、何をしようと言うのだ？」

誰かの声。反射的に抜刀していた。鞘を投げ捨て、正眼に構える。

紅蓮の炎をかきわけて、声の主が歩いてくる。

「天兄……！」

兄だった。周囲には乙女が六人、兄を取り巻くように立っている。

明らかに傀儡だ。黒子の衣装をまとい、面覆いをつけている。

雷真の内側で、液滴のように、何かが荒れ狂った。

憤怒に衝き動かされ、無心で斬りかかる。

兄は、人形を使いましなかった。

鼓動だにしない。ただ刀身を一瞥した。それだけのことで、鍛鉄の刃が折れた。

衝撃で吹っ飛ばされる。雷真はなす術もなく地面を転がって、庭石に叩きつけられた。

したたかに背中を打ち、意識が遠くなる。

（今のは……急動か？ ただの……魔力の……集中……か？）

血の味を噛みしめながら、雷真はまぶたを閉じた。

一度は父に思い知らされ、二度目には兄に教えられた。

雷真が入れ込む剣術など、魔術の前では何の意味もない。

（撫子……ごめん……）

降りかかる火の粉を浴びながら、雷真は砂を噛み、涙した。

こんなにも弱い、自分自身を呪った。

6

斬られた前髪が数本、風に泳いで飛んで行く。

ベルトか、ナイフか――腹で何かが割れ、ふところから飛び出した。

確認している余裕はない。ずどんっ、と凄まじい衝撃音が響き、バルコニーの手すりが砕けた。衝撃波が生まれ、テーブルセットが宙に舞う。

空間が断ち切られたような一撃。

雷真は小紫ともども、バルコニーから放り出され、階下の通りに着地した。

着地して、気付く。師の衝撃はこの石畳にまで到達していた。ざっくりと亀裂が走り、文字通り大地が割れている。

刃風、太刀影と言うべきものが、建材を斬り、数メートル下の街路すら割った。こんな現象、雷雀のもとでは一度も見ることがない。

「雷真ー 大丈夫!」

小紫が顔面蒼白で寄ってくる。その視線は、雷真のひたいに向けられていた。

つー、と生温かいものが流れる。指で触れてみると、案の定、血だった。

ちようど薄紙一枚ぶん、雷真のひたいに切り傷ができている。

きわどい——いや、違う。これはまったく、きわどくない——

師は雷真が飛び退く方向を見越して、精確に薄皮一枚を斬ったのだ。

建物を斬り裂くような威力があるのに、薄皮一枚だけを斬ってみせた……。

師に勝てるという確信が揺らぐ。雪月花のひとつ、小紫がいるのに——

一瞬の静寂のあと、あたりは大騒ぎとなった。

大通りでサムライが刀を振り回しているのだから、トラブル慣れた機巧都市の市民と言えど、驚愕したに違いない。付近の警官が集まってきたが、逃げ惑う市民に道路を塞がれ、なかなかこちらに近付けない。

「ありや。大騒ぎになっちゃいましたねー」

飛びれたふうもなくそう言つて、雲雀もバルコニーから飛び降りた。

雷真はとつさに身構え、魔力を集中した。

「師範……この三年で何があつたんだ？　こんなの、魔術だろ……！」

「こちらの台詞です。この三年、君に何があつたのです？　それとも、本当に何もなかったのですか？　そのつむつた目を聞くようなことが、何も？」

（そうか——これは——逆だ！）

雲雀がこの三年で腕を上げたのでも、魔術師になつたのでもない。

かつての雷真が、師の力を見抜けなかっただけだ。

雷真はそれを知ろうともせず、雲雀は見せびらかそうとしなかっただけ。雷真や門下生

に本刀で稽古をつけるのに、こんな一撃を放つ必要はない。むしろ、汗國に使えば死者を出す。雷真が優れた魔術師であれば、秘めた魔性も見抜けただろうが……。

魔術師として経験を積んだ今ならわかる。

雷真が雷雀から学んだ〈氣息〉の極意は、魔力を五体に行き渡らせるためのもの。

練気は魔力を高める行為。丹田は魔力を集中させる部位。五感を研ぎ澄ますのは第六感を磨くため。剣術には本来不要な座禅や瞑想も、師は「大事な修行」と言っていた。つまり。

雷真が短期間で魔術を体得できたのは、この師のもとで基礎を学んだから――

「さて、今ので少しは目が醒めたでしょうか」

雷雀は雷真に切っ先を突きつけ、死刑宣告のように言った。

「君に卓越した剣腕があり、十分に思慮深ければ、妹御を護ることもできたのです」

――

「それを甘ったれた子どもが、己の弱さから目を背け、魔術に逃げた。……同じですね、

雷真。君が赤羽の家を飛び出したときと」

師の指摘は、師がふるう刃よりも鋭く、雷真の胸をえぐった。

その通りだ。俺は逃げた。俺は駄目だと決めつけて、剣に逃げ――

剣では駄目だと決めつけて、魔術の道へ再び逃げた。

「剣にうつつを抜かしていたから？ あされた逃げ口上です。君は己の弱さを、力の不足

を、敗北の原因を、剣に帰していただけ。あの日の弱い自分を思い出したくないから、剣を忌避しているだけ。呪っているだけ」

容赦のない言葉。雲雀はどこか楽しげに、やわらかな声で雷真をなぶる。

「その結果はどうです？ 君は日本一の自動人形に頼りきり、ずっと譲ってもらっていました。その戦いの果て、その人形はどうになりましたか？」

雷真のわがままにも、命令違反にも、夜々は二つ返事で付き合ってくれた。

その結果、夜々はどうなった？

「か——勝手なこと言わないで！」

へし折れかけた雷真の心を、小紫の声が支えてくれた。

「雷真の先生だからって、そんな言い方、ひどいよ！ 雷真はすごいんだから！ほんとに、ほんとにすごいんだから！ 夜々姉さまのことだって、きつと何とかしてくれる……いろいろ姉さまのことも、硝子も、絶対助けてくれるんだから！」

桜色の唇を噛み、涙をこぼさないよう我慢する。

その肩をつかみ、抱き寄せて、雷真は師を見上げた。

己の弱さは認めよう。逃げていたと言われたら、それを否定する言葉もない。

だが、俺が今しなければならぬのは、自分に失望することではない。

夜々を救う。いろいろを見つけ、硝子を連れ戻す！

雲雀が目を細め、面白そうに雷真を見た。

「……少しはましな面構えになりましたね。私を倒す覚悟はできましたか？」

「ああ。悪いが師範、あんたをぶっ飛ばしてでも、俺は行く」

「結構です。さあ、刀を取りなさい」

「それには及ばねえ。小紫——」

「うん——」

瞬間的に魔力を練り、小紫に送り込む。八重葎が発動し、二人の存在を透明にした。

八重葎（八段の闇）。視覚はもちろん、聴覚、嗅覚、味覚、触覚をも欺瞞する、完全な

隠形だ。たとえ天眼を用いたとしても、正確な位置は把握できない。

雲雀の視線が泳ぐ。小紫は素早く位置を変え、雲雀の左側から斬りかかった。

ステルス状態からの不意打ち。ライコネンですら対応が遅れた一撃だ。止められるはずはない——と思ったが、雲雀は銀剣をつかんで（！）止めた。

雷真は瞠目した。止めた？ 刀を？ 素手で？

いわゆる（真剣白刃取り）は、勢いの「死んだ」刃物をかすめ取るもの。斬撃を真正面から止められるものではない。だが今、雲雀は刃を正面からつかみ取った。

（念動防御——魔防と同じだ！）

小紫は必死に銀剣を引きはがそうとするが、師範の指は微動だにしない。雪月花の身体能力が、人間の握力に負けている……!?

やがて八重葎の効果が消え、小紫の姿があらわになった。

「微温いですね。また失くさなければ、気付きませんか？」

左手で銀剣を止めたまま、右手の剣を振りかぶる。

「剣を捨てろ！ 小紫——」

叫びながら紅翼陣の糸を飛ばす。雲雀の自由を奪えばいい、という発想で、それ自体は

悪くなかった。が——相手が悪かった。

糸はするりとすり抜けて、反対側に流された。

かわされたのだ。たやすく。

そして、振り下ろされた刀が、小紫の眉間を割る——寸前。

ざいんつ、と金属音が鳴り響き、雲雀の刀が軌道を変えた。

刃は地面をかすめ、ストリートの上を五メートルも裂く。

何かが横から軌道をそらした。——白く輝く機械の剣が。

「そのくらいにしてやれ」

大のしっぽのような黒髪を揺らし、迷宮の魔王グリゼルダが現れる。剣が宙をすべり、

グリゼルダのとなりで機械天使へと姿を変えた。

緊張から解放され、小紫がへたり込む。

「大丈夫か、（花）の娘。……少し下がっている。後は私がやる」



二体の機械天使を背後に従え、グリゼルダは雲雀をにらんだ。

「弟子の邪魔をするな。こいつは今、立て込んでいる」

「……難しい英語はわかりかねます。が、おっしゃることはよくわかる」

雲雀はくすりと笑い、愛想よく応えた。

「なので、答えは「ノー」です。私もこれが役目ですからね」

「遅く気はない……か、いいだろう。カタナとやらがどれほどのものか、試してみたいと思っていたところだ。——さっさと行け、バカ弟子。ここは」

「ごうっ、と魔力が噴き上がる。竜巻のような魔力を燃焼させ、グリゼルダは言った。

「魔王が化物と遊んでやろう」

師と師。畏怖すべき獣と獣の対峙に、あるいは天も怯えたか。震える大気が風を生み、

震動が大地に伝わった。



Chapter 3 白か、赤か



1

（……こいつは何者だ？ この私が……氣圧される）

知らず、肩に力が入る。

普通ならとくに仕掛けているところだが、グリゼルダは慎重に相手の出方を見た。謎のサムライもまた、びたりと動きを止めて、グリゼルダを見極めている。

「勇ましくも美しいによしそうですね。雷真、この方は？」

背後に聞く。弟子は明らかに警戒し、小紫をかばいつつ、答えた。

「……俺の魔術の師匠だ。今現在、世界で一番若い魔王さまだよ」

「『美しい』が抜けているぞ、バカ弟子。私にも説明しろ。その男は何者だ？」

「俺の……剣の師匠だ」

グリゼルダは男の武器に注目する。美しいカーブを描く、見事な長剣だ。

「カタナ使いで、貴様の師——なるほど、日本軍の人間兵器だな」

「あ？ いや、街中でボロい道場をやってる人だ」

「嘘をつけ。市井の人間に、こんな怪物がいてたまるか」

薄笑いでにらみつける。にらまれて居心地が悪かったのか、サムライは頬をかいた。

一触即発——のはずだが、緊張を感じさせない声で、雷真に助けを求める。

「えーと、によしようは何とおっしゃったのです？」

「あんたが怪物で、日本軍の人間兵器だと」

「何と！ オーウ、ワタシ紳士ヨ！。ジャパニーズ紳士、ユーシー？」

「何でなまるんだ！」

指をわきわき動かしながら、グリゼルダとの距離を詰めていく。紳士と言うより、変態的な仕草だ。当然と言うか何と言うか、グリゼルダは反応した。

肩から魔力が飛び、機械天使ディガンマが即応する。装甲板が噛み合い、一瞬で剣の姿に変貌。ディガンマは達人の一閃よろしく、宙を飛んで敵の喉笛を狙った。

うわあ、と情けない悲鳴をあげ、サムライが大げさに飛び退く。

——はた目には、グリゼルダがわざと外したように見えただろう。周囲の人ばかりが息をのみ、風圧にどよめいた。

「えげれすのによしようは怖いですねえ。雷真、この方を落ち着かせてください。無関係の方と断り合いたくはありません」

「……だとも、お師匠さま。この人、間が悪いのと空気読めないのが欠点なんだ」

「バカ弟子が。気付かんのか？ こいつはもう、とつくに殺る気だ」

サムライと視線がぶつかる。両者のあいだに、魔力の火花が散った。

（……滑稽こまじだな。冷や汗が出る）

先ほどの変態的な接近は、こちらの技量を試したのだろう。思惑通り、グリゼルダの体は勝手に反応した——否、させられた。

サムライは刀をつかみ、すり足で位置を変えながら、ささやくように言った。

「娘さん。先ほどからずっと、私たちを見ていましたね？」

「盗み聞きの話か？ まあ、日本語はろくにわからなかったがな」

「美しい方につきままとわれるのは悪い気がします。強者ならば——なおのこと」
ふっ、と男の姿が消えた。

——錯覚だ。純粋に速いのではなく、タイミングを外された。

雷真が何かを叫ぶ。警告だろうが、把握するより相手の方が速い。

すり足からの鋭い踏み込み。平凡な剣士ならば、もう首を飛ばされている。

ディガンマを当てて太刀筋をそらす。と同時に雷を向け、収束した魔力の糸を敵の体に撃ち込んだ。かわせる体勢ではなかったはずだが、敵は難なく回避した。

（何て反応だ！ こちらの呼吸を読んで——）

力んだ一瞬に、視線から退避した。これでは狙いをつけ直すこともできない。

手抜きで勝てる相手ではない。完全統制振動で自らも飛び、すべるように上へ。今度はこちらが相手の呼吸を外し、頭上を取った。

跳び越えながらの回転斬り。

人間は普通、左右方向よりも上下方向への対応が遅れる。そこらの兵士なら状況を認識する前に即死だが、敵も凡庸な腕前ではない。

しゃがむのでも、身をそらすのでもなく、前に出て弧から逃れる。よほどの覚悟がなければできない芸当だ。そうしてこちらの刃をかわし、氣を縛りながら振り向いて――

（ここで、（魔斬）か！）

たった数回剣を合わせただけで、グリゼルダは（カタナ）の本質を見抜いた。なるほど、これが極東の奇剣術。手品のタネは魔斬のスキルだ。

普通の鉄ならば、強すぎる魔力には耐えられない。だが、カタナの材質は魔鉱か何か。武器と言うより魔具に近く、魔力をよく伝導し、しかも強靱だ。西洋では聖剣や魔剣と呼ばれるレベルの品が、極東では一般に流通しているのか。

間合いの外から、不可視の斬撃を飛ばしてくる。刀身が赤く光って見えるほどの、猛烈な振りだ。剣で止めるのは不可能に思える。だが、決定打にはならない。

グリゼルダにはもう一体の人形――剣ではなく、盾がある。

白い盾がすべり込み、灼熱の斬撃を受け止めた。

力と力が衝突し、爆発が生じる。石畳に蜘蛛の巣状の亀裂が走った。

体重の軽い小紫が弾き飛ばされ、雷真がとっさにつかまえる。

爆風がおさまってみると、サムライのこめかみにも冷や汗が光っていた。

「（月影紅蓮）を止めますか……。驚きすぎて、腰を抜かしますよ」

「……ふん。腰を抜かすのはこちらだ」

「月影紅蓮だつて？ 今のが……!?」

雷真が割り込んでくる。すっぱり切れた地面を見下ろし、グリゼルダに訊いた。

「なあ、お師匠さま。この一撃は何なんだ？ これは、あんたの剣と同じ……?」

「……知らんのか。ま、貴様は天眼も知らなかったしな」

実際問題、知る必要もない。天眼を聞いたばかりで、到達できる境地ではない。

「これは（魔剣）だ。天眼のさらに上、魔術師の第七階梯——研ぎ澄まされた念動」

グリゼルダの一撃が岩を切り裂くのも、刀剣の長さ以上の距離にまで威力が及ぶのも、

斬撃が魔力——念動の刃をまもっているからだ。

「優れた武芸者の中には、念動力を知らぬまま、無自覚に魔剣や剛体、果ては（心眼）に

も達する者がいると聞く。大方、こいつもそういうクチだろう」

男は端正な顔をほころばせ、痛快そうに笑った。

「今のお話、よくはわかりませんが、むしろ私の方が驚いていると思いますよ。魔術師と

言えば、学問に勤しむばかりの、虚病な人種だと思っていました。貴女の強さはまるで鬼

か弁慶です。さすが、世界は広い！」

「……ふん、楽しそうだな。戦闘狂か」

「おや、馬鹿にされました？ ですが、貴女には私と同じ匂いを感じますよ」

「一緒にするな。私は戦いを悦んだことなど一度もない」

「でも、力比べはお好きでしょう？」

「む……」

「師範、もうやめてくれ！ あんたがやめてくれりゃ、死人が出ずに済む！」

雷真が男に訴える。男はちらりとグリゼルダを見た。

「不肖の弟子がお世話になったようですし、本来ならばお礼を申すべきところ……ですが、私も今は官仕えの身、軍の意向を無視する阿呆を見逃すわけにはいきません。というわけで、君が出発を思いとどまれば万事解決ですよ、雷真？」

「……それは、できない」

「では、無理ですねー」

「ふん。くだらん問答をしてないで、さっさと行け、バカ弟子」

「けどよ——」

「行け！ 夜々を救ってこい！」

雷真は意外そうにまばたきをして、確かめるように訊いた。

「俺の懸謀……あんたは止めないんだな？」

「馬鹿につける薬はない。言いたいことは二つだけだ。——死ぬな、生きて戻れ」

「……ああ。師範、お師匠さま、俺もこれだけ言っとくぞ」

雷真は小案の手を引き、駆け出しながら叫んだ。

「どっちも、死ぬな！」

小紫の魔術を使い、風景に溶けて消える。

二人の気配がなくなると、サムライは苦笑いを浮かべた。

「どっちも死ぬな、とききましたか。何とも甘ったれた台詞ですね」

「可笑しいか？」

「ええ、笑ってしまいます。戦いとは常に相克、いずれかが斃れるは必定です」

「同感だ。だが、あいつはそうやって生きてきたし、この先もそうやって生きていく」

「——そんな生き方で死なずに済んだのは、貴女のご指導の賜物ですか？」

「私が生かしたのかって？ 私力なんて、ほんの微力さ」

「微力……と言ったのですか？ 貴女が？」

「私が弱いのではない。あいつに力を貸してやろうと思う輩が多すぎる」

笑ってしまう。本当に、そうだ。相対的に、魔王の力も微力になる。

「誰もがあいつに巻き込まれていく。道に迷っていた者や、命運が尽きようとしていた者、死のうとしていた者、あきらめていた者——皆があいつに救われた。その借りを返したくて、みんなウズウズしてるんだよ。私もその一人だ」

我が弟子ながら、末恐ろしい男だ。魔王にそこまで言わせるとは……。

視線と視線が交差する。

ややあつて、サムライはくると手首を返し、刀を鞘に引っ込めた。

「……何だ？ やめるのか？」

「私はね、人を斬ることを何とも思いません。ですが、うら若い娘さん——まして弟子の恩人であれば、いささか気がとがめます」

「ほう……つまり、やれば勝てると言いたいのか？」

「あー、いえいえ、そうではなく、むしろ逆です。気がとがめて剣が鈍れば、こっちが殺されちゃいますので。ここは逃げの一手です」

「させるか！ デイガンマ！」

雷真を追わせるわけにはいかない。グリゼルダは剣を飛ばし、背後から斬りかかった。

落雷のごとき完全統制振動の一閃を、男は流すことなく受け止めた。

……いや、これは止めたのではない。

「深追いは、命を縮めますよ？」

口元をゆるめ、刀を振り抜く。

デイガンマの刀身に刃が食い込み、そのまま、真つ二つに断ち切った。

2

ラザフォードが呼び出された場所は、機巧師団のと真ん中——ではなく、市が運営する多目的ホールだった。

観劇や演奏会のみならず、討論会、会議などに使われる建物だ。

ステージに引き出されたラザフォードを、七十人を超す（委員）が客席から見下ろしている。彼らは全世界四八か国を代表する（賢者会議）の構成員。夜会執行部の上位機関であり、魔術師協会にも公認された、学院運営のご意見番だ。

何かしらの権力を持つわけではない。学院長の任命権は予算を牛耳る英国政府が握っているし、教授の選任やカリキュラムの決定権は学院の自治に任されている。

しかし、彼らの意向を無視していいかと言えば、そんなことはない。委員の協力がなければ、各国の若い才能を英国に集めることができない。今後も学院を存続させるためには、彼らの同意が不可欠だ。

英国は彼らをないがしろにはしない。ゆえに、ラザフォードもまた、彼らの不興を買ってはいけない。さすがのラザフォードも喉の渴きを感じる。

師団つきの楽隊がファンファーレを奏で、客席の最上段に指揮官が現れた。

美しい女だ。年齢は三十を超えているが、容色の衰えはない。切れ長の碧眼には豊かなまつ毛のカーテンが降り、ブロンドの髪はまばゆく輝いている。金モールで飾られた白い軍服をまとい、明らかに魔力を秘めた幅広いの剣を帯びていた。

彼女が何者か、ラザフォードもパーシヴァルも、よく知っている。

軍における階級は（General of the Machine Force）——通称、グローリア将軍。彼女が姓を呼ばれることは、普通ない。なぜなら……。

「グロリア妃殿下に、敬礼！」

儀仗兵の言葉で、兵も、委員も、人形すら、最敬礼で進んだ。

「よい。今は王妃としてではなく、指揮官としてここにいます」

よく通る声で、静かに告げる。三十そこその女とはとても思えない貫録だった。

グロリアは階段を降り、最前列の席に座った。必然的に、壇上を見上げる構図になる。王族に見上げられるのは、ラザフォードであつてもかなりの重圧だ。

「どうぞ、かけるがよい。ラザフォード学院長」

丁重に礼を述べ、パーシヴァルともども、壇上の席に腰を下ろす。

「火急のおり、呼び立ててすみませんね。もつと辞けた場を用意したかったのですが——
賢老がたが、我も我もと申すゆえ」

ご冗談を、という言葉が喉まで出なかった。

もとより周到に準備していたはずだ。何せ、委員全員を招集している。今期は留学生を出していない国の使節まで。少なくともひと月は前から準備していたはず……。

「久方ぶりにウインザーから出てみれば、世間は何とも騒がしい。帝国の權威に盾突く輩の多いこと——あけく、懸念の増上慢。実に恥ずかしく、嘆かわしきことです。そなたにも苦勞をかけますね」

「もったいなきお言葉にございます」

「学院もさぞや混乱していることでしょう。夜会の進行はつつがなく……」

「もちろんでございます」

恥ずかしげもなく言い切る。委員たちが気色ばんだ。

「何とみてぶてしい……」「恥を知らぬ」「厳しく責を問うべきだ」

殺した声が聞こえてくる。どうやら皆さま、とつくにお怒りのご様子だ。

——おかげで、吹っ切れた。

ラザフォードは堂々と胸を張り、委員の視線を真正面から受け止めた。

「では、順に委員の話を聞くとしましょう。——そちらから」

グローリアの指示を受け、委員たちは順にラザフォードへの批判を並べた。

「夜会の進行に問題がないはずがなからう。設備の大半を失っている」

「これほどトラブルが重なった夜会は前例がない。《魔術喰い》騒動すら、いまだ決着を

見ず——何人の行方不明者を放置している？」

「出だしからして、疑念があった。《下から二番目》、《下から一番目》はともに成績劣等

と聞くが、彼らの選出は適正だったのか？」

「まして徒党を組む者が多い。ここしばらくの《円卓戦争》とやらは目に余った。夜会は

最優等の魔術師をただ一人、選抜するものであろう？」

「今期の夜会はあまりに異例続き。正しく魔王を選抜できるとは到底思えぬ」

「然り。手袋持ちの選出からやり直すべきだ」

「その是非はともかく、第一夜から仕切り直す必要はあろうな」

「申し訳ありませんが——皆さまのお言葉、まるで煩囂に値しませんな」

ラザフォードの反撃に、客席は静まり返った。

委員たちが哑然とする。各国の代表者、大使を相手にしているも同然の場で、そのような口をさく学院長が、かつて存存しただろうか？

静まり返った講堂に、グロリアの聲が響いた。

「その言葉、会議への侮辱ではあるまい？ 賢老がたに申し開きをするがよい」

「御意に。まず——異例とおっしゃるなら、やり直しなど前例がありません」

それは既理屈であらう、と意見が飛んだが、ラザフォードは構わず続けた。

「（下から二番目）の選出は正しい判断でありました。それが証拠に、彼は今日まで勝ち残っております。魔王たるべき資格を持つ、確かな証左です」

委員の一人が手を挙げ、グロリアの許可を待たずに発言した。

「たびたび入退院を繰り返し、強敵との戦いをさせたのではないか？」

「彼が有利な条件で戦ったことはほとんどありません。むしろ余計な課外活動で、いらぬ手間、怪我、不安要素、不利益を増やしていたほどです」

委員たちを見上げ、淡々と述べる。

「徒党を組む是非も議題にのぼっておりますが、人望や計略もまた魔術師の才のひとつ。さらに言えば、連携は過去にも前例があり、異例ではありません」

「……では、度重なる不祥事について問おう。昨日の（金の槍団）と先日の（流星群）、

ともに君の「極秘研究」とやらが原因と見る向きがある」

痛いところを突かれる。地下のギユネスの存在は、翻られるほどに危険が増す。

だが、まだ決定的なボロは出していない。彼らも尻尾をつかんではいない。証拠があるなら、もっと直接的に切り込んでくるはずだ。

そして、彼らの一部は学院の（後援者）——味方もいる。

ラザフォードは眉一つ動かさず、知らん顔を決め込んだ。

「私が本気で極秘研究を試みたならば、そうそうたやすく気取られはしません。まして、そこらの市民団体に、どうして秘密を曝けましょうや？」

委員たちに苦笑が広がった。——腰に傷を持つ者同士、通じ合うものがある。

「夜会は国際的な催事、社会情勢と無縁ではられません。過去にもそうした事態はありました。リヴァプールはアイルランドと向かい合っておりま……」

取（き）えてデリケートな部分に踏み込み、ダロリーアに目配せする。

ダロリーアはふっと微笑（こゝろ）み、

「今期夜会に問題はないと、そなたはそう主張するのですね？」

「いかにも。何度やり直そうと、同じ面々が勝ち残ることになるでしょう。そして、物理的な制約もございます。（魔鱈の年）が終わってしまえば、また四年の時がいる」

答えに満足したのだろう。ダロリーアは立ち上がり、委員たちに向き直った。

「どうやらこの件、理は学院長にあるようです」

となりの席でパーシヴァルが息を吐く。彼ほどの魔術師でも緊張はするらしい。一方、ラザフォードは危険な臭いを嗅ぎ取っていた。

違う。この殺取り、この展開——これはグロリアの望み通りだ。

夜会を止めるつもりなど、この女にはない。委員たちに不満を吐き出させ、彼らの顔を立てた上で、自分の目的を推し進めようとしている。

そして、それはおそらく、委員たちにとつても利のあること——

「では次の議題。（下から二番目）」と彼の登録人形を、帝国軍に引き渡したさい」不意を突かれた。だが、動揺はおくびにも出さず、しれっとして答える。

「ずいぶんと唐突でございますな。それは何ゆえでしょうや？」

「我が帝国軍が誇る俊英、ライコネン中將を死に至らしめた罪ゆえに」

——初耳だ。ライコネンが死んだ？ 本当に？

カマかけだったのか、グロリアはこちらの表情を読み取り、目を細めた。

「知らないようで何より、正しくは（消息不明）です。昨日、本隊に帰還しませんでした。（下から二番目）」ライシン・アカバネと戦ったのでしょう？」

「……封峙したのは事実です。しかし」

「ならば、彼に事情を訊かねばなるまい。——ああ、逮捕状が必要ですか？」

幕僚に合図を送る。幕僚は古式ゆかしい羊皮紙を広げ、こちらに掲げて見せた。逮捕状だ。軍に捜査を一任する、という警察署長の署名もある。

「……いきなり逮捕したのでは、同盟国日本とのあいだに摩擦を生みます。学院の調査を待っていたくわけには？」

「このダローリア、社交界では四つの形容で知られています。若く、麗しく、情熱的で、何より気短である——とね」

「……存じております。へ人形の女王」

ダローリアは悠然と客席の段を上がっていく。中ほどまで到達すると、コートの手すを払い、剣の柄——「ストラトキヤスター」の銘を見せつけた。

「学院自治の伝統に最大限配慮し、二時間の猶予を与えましょう」

「……この老体には、いささか酷な条件ですな」

「一九世紀最強の魔術師にかかれば、易きこと。身柄が差し出されぬ場合は、我が師団が強制的に確保します」

「……たかが学生一人のために、踏み込まれると？」

「たかが学生一人に殺された——やもしれぬ、大事な魔王のためですよ」
麗しい微笑。明らかに事実と違ふ。

これは口実だ。学生一人のために機巧師団を動かすわけではない。言いがかりをつけて、学院を占拠するつもりなのだ。

だが、ラザフォードには、雷真を差し出す選択肢がない。

昨日、魔王を退けたことで、ほとんど確信が生まれている。

赤羽雷真とマグナスは、神性機巧誕生の鍵となる存在だ。マグナスはもちろん、雷真も手放すわけにはいかない。せつかく実った果実を、その価値もわからぬ速中に、収穫目前で奪われるなど……あつてはならない。

それに、だ。

ラザフォードが諾と言つても、雷真の周囲の者が納得するとは思えない。

「……学院は優秀な学生と教授陣に支えられております。独立独歩の氣風が強く、まして前日の一件で氣が立っている。侵略を受ければ、必ずや団結し、抵抗しましょう」

「はて、そうでしょうか？」

グローリアは艶然と微笑み、小さな水晶玉を取り出した。

そこに映し出された画像に目を凝らし——ラザフォードは瞠目する。

「このグローリアには、とても一枚岩には見えないけれど」

黒煙が噴き上がり、魔力の爆発が起きる。

硬く閉ざされた城壁の向こうで、学生たちが互いを攻撃し合っていた。

3

その少し前、アンリはシグムントと二人、仮設の病室に閉じこもっていた。ガラスケースに似た結界の中に、夜々が積たわっている。

白い顔は死に化粧のようで、生気がまるで感じられない。パーシヴァルに匙を投げられ、まともな治療はなされていない。この結界にしても、ほとんど気休めで、多少の殺菌効果と、断熱効果があるだけだという。

アンリはベッドに座り、たまらない気分で夜々を見つめた。

「夜々さん、心配だね……」

無力感に苛まれながら、肩の上のシグムントにきさやく。

「私、夜々さんに助けてもらったのに……。情けないな……。何にもできない」

「氣に病むな。君も足を折っている。今は養生すべきだ」

「ねえ、私……今からでも、人形使いを目指すのは無理かな？」

シグムントが口を閉ざす。アンリはぱたぱたと手を振り、急いで打ち消した。

「無理だよね！ ごめんね、変なこと訊いて！」

「いや、無理ではない」

慎重に言葉を選びながら、シグムントはつぶやいた。

「君の才はときに凡庸と言われる。だが、それは『平均的な水準にある』ということだ。言い換えれば、君より才に恵まれない魔術師が、世界にはごまんといる」

「――」

「幼き日に神童と呼ばれた者が、成人後に凡庸となることもある。一方で、魔術は歳月を経て磨かれていく。雷真を見るがいい。一族では無才の烙印を押されていたと言うが、今

や学院でも際立つた存在だ。つまり、生まれ持った才覚よりも……」

「努力が大事？」

「……そうだ。こう言つては何だが、君はまだ才能をとにかく言う段階にない」

シダムントがなぜ答えをためらつたのか、ようやくわかつた。

アンリはまだ、努力で何とでもなる位置にいる。つまり、今のアンリが弱いのは、才能のせいではなく、単純に努力が、あるいは工夫が足りていないということだ。

それは酷な現実だ。才能がないと言われた方が、どんなにか楽だつただらう。すべてを才能のせいにして、あきらめることができていたら。

「だが、魔術師になることが、本当に君の望みなのか？」

「……え？」

「君はシャルとは違う。シャルと同じ道を行く必要はない。君には君の魅力があるのだ。君は弱い者の痛みを知っている。常に、傷ついた者に寄り添ってきた。たとえば、フレイが己の無力を嘆みしめていたときも——」

フレイはアンリを友達だと言つてくれる。雷真は以前、「他人って気がしねえ」とまで言つてくれた。それはたぶん……。

（私にも、私の道がある……のかな？）

それが何かは、まだわからないけれど。

胸がぽかぽかと温まり、アンリは自然と微笑んでいた。



「ありがとう、シグムント。何だか……元氣、出てきちゃった」

「うむ。君はそうして、いつも笑っているのがいい」

「——ちよっと、いい？」

ふと、部屋の入りに人の氣配が立った。

いつの間に入ってきたのか、真珠色の髪（パールカラー）の学生が立っている。

（約束された子ども——？）

ロキやフレイと印象が似ている。色素が薄く、瞳は紅い。

少年か、少女か、判断に迷う。ショートの髪はボーイッシュで、ロキより少し長い程度。上はパーカー、下は足の付け根ぎりぎりまで切り詰められたスカート。その下には七分丈のレギンスがのぞき、スカートがめくれても何の問題もない服装だ。

反りのある刀剣を携えている。黒塗りの鞘が異彩を放ち、剣呑な雰囲気だ。

少女はアンリをじっと見て、無表情で問いかけた。

「あなたは白？ それとも赤？」

——意味がわからない。アンリは小首を傾げた。

まともに答えられなかったのに、少女は嬉しそうな顔をした。

「よかった。まだ、どっちにも染まっていない。……なら、私と一緒にきて」

アンリに近付いてくる。その前にシグムントが首を突き出し、翼を広げて威嚇した。

「まずは素性を言うがいい。君は何者で、何が目的だ？」

「——私はハイゼル」

ハイゼルは控えめな胸に手を当て、儼然（げんぜん）そうに自己紹介した。

「ブリュウの妹に用がある。貴女（あなた）を誘（さそ）いに来た」

アンリはきよとんとした。私を？ お姉さまじゃなく？

ハイゼルは親しげに微笑（ほくそ）んだ。一見は友好的とも言える態度だが、その笑顔は作りものめいていて、アンリの不安をかき立てる。

「迎えに来たの。仲間になつて」

「……え？ え？ えっ？」

「私を信じて。協力してくれるなら、貴女（あなた）の願いも叶（かな）えてあげる」

「ま、待ってください。意味がよく……」

「力が欲しいんでしょう？ 今の話、聞こえていた」

「——」

「詳しく説明している時間はない。もう始まつているから。でも、私といえば安全は保障する。だから、行こう」

手をつかまれる。恐怖を感じ、アンリは反射的に振りほどこうとした。

「いい、いや——」

シグムントが牙をむいた。食い破るほどではないが、あごが手首を挟む。ハイゼルは顔をしかめ、噛まれた腕を引つ込めた。

「落ち着くがいい。君の言動は常軌を逸しているぞ」

「……邪魔をするの？ うるさい童——父なる王の声を聞け」

何かの呪文を唱える。真珠色の髪が逆立ち、魔力が盛り上がった。

「アンリ、魔力を——」

「え？ う、うん！」

何だかわからないまま、シダムントの背に魔力を送り込む。

シダムントのあごから光が漏れ、発射態勢に入った。しかし、ウスターカノンが撃たれる前に、ヘイゼルは黒刀を抜き放ち、こんなことを言った。

「魔剣の竜は狙いを外す！」

言葉通り、ウスターカノンはヘイゼルを外し、背後の扉を消し飛ばした。

爆風がアンリに殺到する。折れている足に刺すような痛みが走った。

こらえているあいだに、ヘイゼルは間合いを詰め、黒刀を振りかぶっていた。

「父なる王の声を聞け——この一撃は魔竜を殺す」

漆黒の刀身に青い炎が走る。遠端に刃が激みを増し、アンリの脳裏に破壊的なビジョンが浮かんだ。直感でわかる。あれが当たれば、シダムントは死ぬ！

かわしたい、と思ったが、できなかった。

もとより歩けないし、背後で夜々が眠っているのだ！

逃げるわけにはいかない。私は何の役にも立たないけれど——

（せめて、盾にならなきゃ……！）

アンリは歯を食いしばり、とつさにシグムントを抱きかかえ、死の訪れを待った。

——攻撃は、こなかった。

怪訝（けげん）に思つて目を開ける。ヘイゼルは黒刀を振り上げたまま、不愉快そうにアンリを見下ろしていた。理由はわからないが……躊躇（ちゅうちゆ）している。

「風よ！」

ヘイゼルの背後から烈風が吹き込み、彼女を壁に叩（たた）きつけた。

「上手いぞ、シャル！」

シグムントの声が弾む。アンリの姉——シャルが廊下に仁王立ちして、美しい顔を憤怒で紅潮させていた。長い金髪が魔力を帯び、浮き上がっている。

「何のつもりよ、（断黒絶刀）ヘイゼル・ヘイムゲル！」

さすが、姉の情報収集にぬかりはない。シャルはきつちり、相手の正体を把握しているようだ。当然、魔術特性に因しても予備知識があるだろう。

相手もそれを警戒したらしい。大胆にもシャルの眼前を素通りして、部屋を出て行く。シャルは殺気をたぎらせたが、迂闊（うくわん）な攻撃はせず、そのまま見逃した。

出がけ、ヘイゼルは一度だけ振り返り、

「……アンリエット、私のことを覚えておいて。後でまた、迎えにくる」

そう言い残し、立ち去った。

緊張から解放され、がくつとアンリの力が抜ける。

だが——これで終わりではなかったのだ。

「ちよつと……何よ、あれ」

シャルが窓に駆け寄る。アンリも背伸びして、そちらをのぞいた。

眼下の庭園、ストリートで、学生たちが小競り合いを繰り広げている。

髪を引つ張って引き倒し、追い回して蹴りを入れる。直接殴るのはまだいい方で、中には自動人形を持ち出し、攻撃魔術を使う者もいた。

「……何の騒ぎ？ 何をやってるの？」

情報通の姉にも事態が把握できていない。しばし、姉妹はわけがわからぬまま、彼らのいきかきを見守った。

それほど長くはかからず、十数分ほどで沈静化する。和解が成ったのか、屈服したのか、劣勢だった学生が、優勢だった側に連れられて、どこかへ行ってしまう。

姉妹が呆けていると、廊下を無数の足音が駆けてきた。

ざくつとして身構える。足音の主は暴徒ではなく、フレイとガルム大だった。

「シャルー アンリー 避難して！」

「避難……って、何があつたのよ？ 下の騒ぎは何？」

「う……早く、夜々ちゃんを隠さないと……っ」

彼我の温度差に、フレイは焦れる。あうあうとあわてるばかりで言葉にならない。

「ちょ……はつきりしなさいよ！ 何がまずいの？ 結社？ 結社なの？」

「ライシンと夜々ちゃん、指名手配された……」

全然、違う方向からボールがくる。シャルは「——は？」と首を傾げた。

「魔王殺し」の容疑で、指名手配された！」

シャルはまじまじとフレイを見つめ、「ひゅくっ」としゃっくりをした。

4

斬り飛ばされたダイガンマの半身は、バラバラと部品単位で散らばった。

ダイガンマはケルビムよりも、人型時の機能性を重視して設計されている。変形機構も複雑で、剣の中心に手足が集まるよう再レイアウトされる。刀身の半分を斬り飛ばされた結果、両手両足を中ほどから失い、立ち上がることもできなくなっていた。

心臓は無事だが、血液に相当する魔力伝導媒体（魔髄オイル）を大量に失った。もう、戦闘稼働は不可能だ。

完全制御振動を、正面から撃ち碎かれた。

（剣で負けた……？ 私か？）

——魔力が尽きかけているのだ。

今の一撃。敵の技量もさることながら、こちらの魔力減退が決定的だ。

サムライもグリゼルダの疲労を察したらしい。隙ありと見て、一目散に逃げ出した。報復を恐れたようにも見える。グリゼルダはぼかんとして、そして腹を立てた。

「何だ、あいつは——とどめを刺せばいいものを……不愉快な奴め——」

腹の底が読めない。東洋人は感情が読めないと聞くが、それ以前の問題に思える。

ステイグマが小さな顔を寄せ、抑えたボリウムで耳打ちした。

「得体の知れない男ですわ。お姉さまはこのざまですが、追うべきと考えます」

「確かに。しかし——む？」

ステイグマの損傷に気付く。スカート状に広がった六枚の装甲パーツ、盾の前面を形成する部分に、深い溝が走っていた。

「これは、先刻の『赤い』一撃でこうなったのか？」

「はい。構造的ダメージをカウントしています。次は破損するおそれがあるかと」

小さな傷ひとつでも、強度が大きく損なわれることがある。実戦経験豊富なグリゼルダは、そのことをよく理解していた。魔力が底を尽きかけている今、迂闊に追撃をかければ、ステイグマまで失うかもしれない。

「……イオネラのもとへ戻る。まずは、おまえたちを修理してもらおう」

そう言つて、学院の方に向き直ったところで、立ちのぼる黒煙に気付いた。

「あちらでも戦闘が——キンバリー女史の方か——」

先ほど学生に襲われたことを思い出す。グリゼルダはディガンマを抱き上げ、殺到して

くる警官隊を跳び超えて、学院へと飛翔した。

その途中、軍の大部隊に出くわした。

〔混成部隊——自動人形は新型だな。あの型はまだ全軍に行き渡っていないはず……〕
軍事に明るいうグリゼルダは、指揮官が誰か、装備で見抜く。

〔第一機巧師団だな。金蓄藏に続き……でしゃばり女どもめ！〕

思い出したくもない顔だ。戦場で顔を合わせて、殺さずにいる自信がない。

ともあれ、急ぎ学院に戻らねば。

なけなしの魔力をしばらく、完全統制振動でダートを飛び超え、敷地に戻る。

そして——絶句した。

至るところで、学生が争っている。

水道管や建材で武装し、自動人形まで持ち出して。

とつくに流血沙汰。ただの喧嘩ではない。

ひととき大きな魔力を感じ、吸い寄せられるように大講堂の方へ向かう。ここが黒煙の

発生源で、天井の穴から火柱が噴き出していた。

（おい、待て……中で襲われているのは、教授じゃないか！）

宙を飛んで突入。状況を見極める前に、まずは学生を一喝する。

「何をしている！ うつけども！」

空気がびりびりと震え、学生の手が止まった。

襲われていたのは、教授副代サンジェルマンと、ほか数名の教職員だった。彼らの背後には、負傷した学生の姿もある。

察するに、襲われていた学生を、教授がかばったようだ。

「一体、何の騒ぎだ！ 教授に暴行を加えるなど……！」

先ほど駅舎でグリゼルダを襲ったのも、こいつらだろうか。グリゼルダは手近な学生に襲いかかり、首をつかんで吊り上げた。

喉を握りつぶしながら、冷ややかに諷く。

「答えろ。何が目的だ？」

「体制の暴力になど……屈するものか……っ」

「ほう。早死にしたいようだな？」

ひとにらみ。それだけで学生は真っ青になり、あつさりゲロった。

「か、改革のためなんれしゅー」

「改革？」

「離してやってくれ、ミス。どうも彼らね、自治権闘争の真っ最中らしい」

とほけた調子でサンジェルマンが言う。グリゼルダはあきれ、学生を放り出した。

深く息を吸い、吐き、それでも怒りがおさまらず、思い切り怒鳴る。

「そ・ん・な、場合かつー」

攻撃側の学生たちが震え上がる。グリゼルダの気性は広く知られるところだ。蜘蛛の子

を散らすように逃げ去り、講堂に静けさが戻ってきた。

「助かったよ、ミス・ウェストン。怒りを鎮めてくれたまん」

サンジェルマンが笑顔でねぎらう。それから頭に手をやり、苦痛に顔を歪めた。

白髪の後頭部が、べつとりと血に汚れていた。

「先生!? お怪我を……されているのかっ?」

「出会いた頭が……つんとやられてね。きょうびの学生はヤンチャが過ぎる」

「ヤンチャで済む話ではないぞ……!」なぜ皆、されるがままになっている!」

つい、言葉がきつくなる。教授たちは苦笑して、互いに顔を見合わせた。

「いやあ、そう簡単にはいかんよ。腐っても機巧学院の生徒たちだ。四回生の魔術防御を

貫いて、気絶させるような魔術を使えば――」

「一回生ではしのぎされず、即死の危険がある。逆は無効だしねえ、うん」

「やむを得ず、魔力切れを待っていたのだ」

なるほど――グリゼルダは己の不明を恥じ、同時に歯がゆく思った。

自分が教授でさえなければ、あんな連中、片っ端から斬り伏せてやるものを。

とは言え、腕の中のアイガンマは半壊状態。背後のスティグマもダメージを負っている。

戦闘になれば、学生相手とは言え、相応の危険がある。

ひとまず、負傷した学生に顔を近付け、問いたです。

「おまえはなぜ、連中に襲われたんだ?」

「わ……わからない……なんです」

怯えの走った瞳が小刻みに揺れた。顔には青あざができている。

「い、意味不明なんです！ 連中、「白か、赤か」って……」

「白？ 赤？ 確かに意味不明だな。何だ、それは」

「学院の現体制を打倒するとか言い出して……興味がなくて言ったら、国賊だ、無思想だと騒いで、いきなり……ほ、暴力をつ」

グリゼルダは困惑し、助けを求めるようにサンジェルマンを見た。

「どういうことだ？ そんなアジテーションで、良家の子女が革命ごっこもないだろう。

いかにも若者が集まりやすいとは言え……」

「君も十分若いがね。露国では知識人主導の運動もあったと聞くが、この学院に短時間で革命思想が根を下ろすとも思えない。だが、現実には動かされている」

講堂の外では断続的に怒声が飛び交い、不自然な熱狂が満ちていた。

「つまり、扇動者——中心となって動いている者が、いるのか？」

教授全員が、はっとした顔になった。

まず最初に、統制された暴力集団が動きを見せたとする。目の前でリンチを見せつけられ、従った方が利口——と考える者は出るだろう。良家の子女は協調性が豊か……保身に走りがちで、長いものに巻かれることを厭わない。

外の騒ぎはしだいに敵発的になり、争いが沈静化していく。問題が消えたのではなく、

どうも多数派に取り込まれ——事態が悪い方向に転がっているらしい。

誰が学生を煽動しているか、考えるまでもない。

昨日今日の話ではなく、もつと前から学生を組織していた者。オルガが学外にいる以上、学生に組織的な行動を起こさせ得るほど、信望のある者は一人しかない。

「……止めよう。黙って見ている方はない。市街には機巧師団が展開していた。どう見ても連中、難癖をつけて踏み込んでくる」

「難癖ならば、もうきたよ。(下から二番目)とその自動人形を差し出せ、とね」

「——17」

「伝令は『魔王ライコネンを殺傷した罪』と言っていた。二時間以内に身柄を引き渡せ、さもなければ師団が踏み込んでくる——そうだ」

「バカ弟子は学外だ！ こんな状態で踏み込まれては……とても勝負にならん」
「もとより、機巧師団相手に勝ち目はないよ。学院が制圧されて終わりだろう」

「学院長は何をしている……！ 今こそ、あの狂の方が必要だと言うのに！」
「ラザフォードを責めては気の毒だ。彼はしばらく、バビロン捕囚だからね」

「居場所をご存知なのか？ どこだ？」

「偉大なるドロリア妃殿下將軍のお手元」

それは第一機巧師団の司令官。

グリゼルダのあごが外れた。つまり、ラザフォードは敵の手中——

「長老会議に引き出され、我らの代表として叱責を受けているところだ」

「……妃殿下の目的は何だ？」

「さて……夜会のやり直しだの、教授会の刷新だの、容疑者の確保だの、いろいろとあるようだけど、本音は『学院を手に入れたい』じゃないかな？」

「無茶苦茶だ……！」

「無茶苦茶がずっと続いていたのが大元の問題だよ。キングスフォートが失脚し、独国、仏国とは險悪になり、初夏には王子が叛逆者となり、先日は帝都ロンドンに流星群が降りそそぎ、昨日は結社に占拠された」

指折り数える。飄々とした口ぶりが、かえって事態の深刻さを伝えてくれる。

「夜会にここまでケチがついたことは、過去二百年なかったことだよ。貴族院のお歴々も、銀行頭取も、ブクメーカーもワリを食っている。上がるのは失業率ばかりで、英国には何ひとつ利益がない。学院を掌握でもしなければ、収まらないさ」

「……それでも夜会を止めるわけにはいかないだろう。この第四九回夜会は、過去のどの夜会とも重みが違う。教父の子見が——神性機巧誕生の子見がなされた夜会なんだ。神性機巧を人類が手にすると思えばこそ、皆、傍観してきたはずだ」

「逆に言えばだよ、ミス。脱藩した連中は、神性機巧を確実に手にできない」

「独、仏、伊あたりはもう、腹に据えかねているだろうね」

「自分が勝てないからゲームをやり直す……？　まるっきり子どもの理屈だ！」

「その通り。しかして幼児の理屈を大人の言葉で飾るのが善い政治家というもの。そして、ウォルター・キングスフォート卿は素晴らしい政治手腕の持ち主だ」

グリゼルダは頭を抱えたくなった。

夜会が終盤に差しかった今、終盤なればこそその問題が浮上した。必死の努力で体裁を取り繕い、危ういバランスで維持してきた正当性に、異議を突きつけられるとは。

おまけに、世界中が敵とも言える。英、独、仏、伊——いずれも列強国。この世界大戦前夜に、皮肉にも反学院で一致しているとは、笑い話にもならない。

そして、何よりもまずいことに――

不意に首の皮が突っ張り、ぶちぶちっ、と傷口が開いた。

どつと熱いものが抜けていく。グリゼルダはとっさに首を押さえたが、直立していられず、前のめりに倒れた。素早くサンジェルマンが抱き止める。

「ミス、どうした？　君も怪我をしているのか？」

「くそっ……こんなときに……！」

早朝、パーシヴァルに警告されたことが、今さら脳裏に甦った。

血が足りず、視界が暗くなる。舌がしびれ、思考が麻痺してきた。

「ミスー　気を確かに！　すぐに輸血する！」

サンジェルマンに体をあずけ、天井の穴越しに、染まり始めた空を見上げる。

破壊として、思考がまとまらない。魔王ともあろう者が、情けない。ディガンマを破壊され、とるべき方策もわからない。

敵は機巧師団。学生たちは乱れ、弟子の人形が死の窮地――

見えない。この国が、世界が、自分たちが、どこへ向かおうとしているのか。

（すまん、バカ弟子……少し……休……）

弟子のことを思った瞬間、世界が闇に沈んだ。

5

その半時ほど前、工学部跡地にて。

昨日、融合爆発を食らって崩れた校舎は、瓦礫と鉄クズの山と化していた。

理学部と並ぶ機巧魔術の殿堂、数々の機巧装置を生み出してきた建物が、もはや原形をとどめていない。その跡地に座り込み、イオネラは打ちひしがれた。

「わたしの研究室が――」

髪を振り乱し、絶望の叫びをあげる。後ろには気の毒そうに見ているエヴァと、周囲を警戒中のキンバリーがいる。

「だから言っただろう。絶望的だと」

「ここまでとは思ってなかったよ……。稼働中の自動人形はなかったから、そこだけ不幸

中の幸いだけと……試作したフレームやら設計図が全部バー」

「データはバックアップしてあるんだろう？」

「そんなのないよ。もう全部ここ」

とんとん、と自分の頭を突つく。キンバリーは軽く笑って、

「君のそこにあるならば、案に復旧できるとも」

「自信がないよ。全然、別のものになっちゃいそう」

「天才ならではの悩みだな」

あきらめきれず、イオネラは瓦礫をかきわけ始めた。だが、図面や書物は大部分が焼けてしまっている、キンバリーはイオネラの肩に手を置き、引き戻した。

「納得したなら、行こう。学院全体に妙な空気が満ちている」

「そう言えば、さっき駅で襲ってきた子たち、どうしたの？」

「警備に預けた。今頃は学院長の秘書官殿が尋問していることだろう。どうも、学生間に対立感情が芽生えているようだ。ヘイトクライムか、あるいは……」

「何だか、色々おかしいね。学院に何が起こってるのかな？」

「説明した通り、昨日は結社の襲撃があったのだ。学院長交替にかこつけてな」

「教授が抵抗できなかった——んだっけ？」

「そうだ。ライコネン氏に拘束された上、君の（絶対王権）に邪魔された」
エヴァが身を硬くする。彼女が秘めた魔術回路こそ、（絶対王権）だ。

「うう……それは責任感じちゃうな」

「ああ、君は少し感じた方がいい」

「ひどい！ 私、これでけっこう責任感強いからね！」

両手を振り上げて怒る。だが、怒りは持続しない。イオネラは手を下ろし、

「ラディのことも……忘れてないよ」

「……君だけの責任ではない。ラドクリフ教授のダミーがうろついていたのに、名立たる教授陣全員が見抜けなかった。昨日の襲撃もそう。事前に手を打っていれば、ここまでの被害は受けなかった。後手に回ったのは学院全体の責任だよ」

「キンバリーさまのおっしゃる通りです。今は務めを果たしましょう」

エヴァがそつと膝を折り、イオネラを抱き起こす。イオネラはようやく表情をゆるめ、涙を拭って立ち上がった。

「……そうだね。魔術師は、前にしか歩けないものだからね」

探究や進歩が、必ずしも人類に幸福をもたらすとは限らない。

それでも、昨日より今日、今日より明日と、進み続けずにはいられない――

魔術師とは、そういう宿命を帯びた生き物だ。

二人と一体はストリートを横切り、ひとまず学院長公邸を目指した。帰還の報告をしなければならぬ。ただし――このとき既に、学院長は不在だったのだが。

「雷真くん、早く戻ってこないかな」

イオネラは落ち着かず、ゲートの方をしきりに気にしている。

「また彼に人形をねだるのかね？ それとも、愛を囁きたいのかな？」

「どっちも魅力的だけど、どうしても確かめたいことがあるの。査問を受けてるあいだ、昔の本を読み返しててね、変だなりってなってる」

離しい顔で空を見上げ、イオネラはこんなことを口にした。

「ねえ、エイミーちゃん。夜々ちゃんを遣ったのは、本当に花柳斎先生なのかな？」

「——なんだと？」

唐突すぎる質問に、さすがのキンバリーも意表を突かれた。

「疑いようもないだろう。彼女の技術は私も直に見た。あの三姉妹も、日本軍の驍勇士も、彼女以外の誰に遣れると言っただね？」

「……そうだよ。うん。まあ、そのはずなんだけど」

イオネラは首をひねっていたが、すぐに気分を切り替え、ほがらかに言った。

「まあいいや。雷真くんは後回しにして、先にあっちの方を片付けよう」

キンバリーはにやりとした。

「例の玩具か」

「芸術でしょ？ 頼んでおいた通りに、ちゃんとできてる？」

「君の正気を疑ったが、図面通りにはなっているよ。それこそゼルダほどの技量が必要は、まともに動かせるとも思えんが」

「そこは腕の見せどころ、つてことで。学院長に挨拶したら、すぐにラガへ案内してね。最終調整に入りたいの。……何だか嫌な予感がするんだ。もし昨日みたいなことになったら、武器はひとつでも多い方がいいでしょう？」

「その通りだ。実は私も先刻から、嫌に胸がざわめいて——」

「聲の同僚よ」

突然、背後から呼び止められた。

声をかける寸前まで、何の気配も悟らせない。見事なまでの隠密行動だ。

キンバリーは意地悪く笑って、嫌みったらしく声をかけた。

「これはこれは、ずいぶんお久しぶりですね。山崎の同僚よ」

「……すまぬ。静養してもらいたかったのだが、急遽、人手が必要になった」

「私に拒否権はありません。戦場でも地獄でも、どうぞ追いやってください」

男は蟻酸を舐めさせられたような顔をした。キンバリーは気分をよくして、

「獲物は何です？　ラザフォード？　それとも金薔薇？　まさか機巧師団ですか？」

「黒太子だ」

「——それは昨夜、（白）の勢力が打倒したと」

はつと息をのむ。頭の中にはもう、状況がぼんやり見えていた。

「……きていると、おっしゃるのですか？」

男はかぶりを振り、金色の瞳でキンバリーを見つめた。

「いや。去ろうとしているのだ」

二人の会話についていけず、イオネラとエヴァは同じ顔で見つめ合った。

6

「おい、ヘイゼル！ 何を勝手なことしてんだよ！」

焼け焦げた木立ちの中に、男子学生の声が響く。

夜会前期の交戦フィールド、学部闘広場にほど近い林。広場の方では学生が集まり、石灰などの資材、スコップなどの用具を手に、大規模な魔法円を構築している。

そちらの様子をうかがいながら、二十人ほどの集団が少女を取り囲んでいた。

囲まれているのは、白い髪の子学生——ヘイゼルだ。うるさそうにそっぽを向いて、片膝を抱え、大きな切り株に腰掛けている。

「連中は最後って言っただろーが！ あいつら、絶対からんでくるんだよ！」

「勝手に突っ走ってんな！ 仲間の足を引っ張りたいのか！」

「逸ヒナってんじゃねえよ！ 盟主の方針に従え！」

口々に責められる。が、ヘイゼルは無視を決め込み、視線も合わせない。

「おい……聞いてんのか？」

たまらず一人が肩をつかむ。ヘイゼルはびくつとして――

次の瞬間、紅い瞳に殺氣がみなぎった。

「私に触るな」

「ああ？」

「触るな！」

親指が鯉口を切り、即座に抜刀——しかけた腕を、誰かがつかんで止めた。

いつの間に関合いを詰めたのか、浅黒い肌的青年がハイゼルの手首を握っている。

夜会第二位アスラ・オーエン。学生の最大派閥（新機関）の主権者。

凛々しい眉の下、黒い双眸がとがめるようにハイゼルを見ている。アスラの凄みに気圧

され、仲間たちの興奮が一気に醒めた。

「愚かなふるまいだ、ハイゼル。——皆も、そのくらいにしてくれ。彼女なりに、よかれ

と思つてしたことだ。それに、逸つたと言うのなら、先ほど市街で迷宮の魔王を襲つた件

も僕は賛同していない」

一同は叱られた子どものように大人しくなった。アスラはハイゼルの手を離し、彼女の

正面に立って、淡々と言つた。

「僕は合議と合意を重んじたい。君の行動は合議から逸脱していた。改めてくれ」

「……数の暴力」

「おい！ 盟主の寛大な言葉を——」

「従う。暴力は嫌いだ」

小馬鹿にしたような返答。ふてくされているようにも聞こえる。

アスラは特に腹も立てず、普段通りの口調で訊いた。

「なぜ、アンリエット・ブリエーを狙ったんだ？ 彼女は学生ですらない」

「……虫をおびき寄せるには、花の蜜がいる」

「虫？」

「知ってる？ 蜂が恐ろしいのは群れをなしているから」

どこか虚無的な、荒んだ笑みを頬に張りつける。

「一匹ずつ潰すぶんには、何匹いようと、ただの虫ケラ。それに——あの娘は味方になるかも知れない」

「……彼女は暴竜の妹だ。こちらにつくとは、とても」

「貴方にはわからない。……私には、わかる」

切り株から飛び降り、フードを目深にして、広場とは逆の方へと歩き始める。

「待て。どこへ行くんだ」

「好きにさせてもらおう。そういう契約」

「……標的をしぼり、無駄な人死には出さないと約束してくれ」

「する」

落ち葉を踏んで、すたすたと去って行く。小さな背中が見えなくなると、同志の一人がうんざりした様子で言った。

「謎だな、あいつ。わけわかんねー。頭おかしいぜ」

「陰口はよせ。彼女は優秀だ。知性も高い」

「アスラ、何であいつをかばう。そのうち足手まといになるぞ」

「使いどころを間違えなければ、彼女は武器になる。(新機関)に必要な人材だ」

「……って言うかよお」

体格のいい学生が一人、アスラの肩を乱暴に叩いた。

「俺たちは聞いてないぜ、アスラー」

「——何の話だい？」

「昨日のアレだ。あんたの魔術！」

学生たちの輪の外、甲冑姿の自動人形インドラを示す。

「術者の体を雷に変成できるなんざ初耳だ。あんなことができるんなら、(下から二番目)や(剣帝)を仕留めるチャンス、いくらでもあっただろー」

言っているうちに興奮してきたのか、学生の目尻が釣り上がった。

「何で俺たちに黙ってた？ まさか、そのうち俺たちもあの技で——」

「やめろバカー！ 言いすぎだー」

「いや、責められても仕方がない。——すまなかつた」

素直に頭を下げる。責めていた者も、止めた者も、聞いていた者も、皆が鼻白んだ。矛を収めざるを得ない、そんな空気があたりに満ちる。アスラはそのタイミングを逃さ

ず、控えめに言葉を足した。

「何度も使えるものではないんだ。僕の——血族の魔性に頼る力だね。失敗のリスクも高く、最悪、命の危険もある。できれば、あれを頼みにするような戦術は取りたくなくて……打ち明けることができなかった」

「わ、悪い。そういうことなら、俺たちで何とかするさ」

「おう、そうだ。そのために大勢仲間がいるんだからな。そうだろ、みんな？」

「そうだー 盟主を支えろー」『新機関のために！』

仲間たちが氣勢を上げ、鼓舞し合って士気を高める。

アスラは堂々とした態度に戻り、彼らに向かってはつきり言った。

「ありがとう。では、バリアトライアルの構築を急ごう。学院長の命だ」

「学院長の命……ね」

仲間たちに笑いが広がる。どの顔にも、皮肉と謝意（やいばあ）が浮かんでいた。

「せいぜい、速くてやるとしようぜ。学院の権威ってやつを」

「ああ。カビも生えない、古臭い伝統をな！」

きびきびとした動きで広場に向かう。彼らの興奮に包まれながら、アスラは人知れず、奥歯を噛みしめていた。

自分が正しい道を進んでいるのか、確証が持てない。

やらなければならぬ——その使命感だけが、確かだった。



Chapter 4 無謀に賭ける



1

冬めいた日差しが傾き、影が長く伸び始める。

マンチェスター方面に続くレールの上を、ロンドン行き旅客車が走行している。その客車、四人がけの側室に、雷真と小紫が収まっていた。

「あ、また……」

小紫が不安げに窓の外を見る。風圧が窓を叩き、装甲列車がすり抜けて行った。

「……兵隊さん、街にいったいいたよね？ 何かあるのかな？」

「昨日のアレだ。結社を警戒してゐるんだろ」

——そうあって欲しいという願望だ。それが実態とは異なるだろうことは、もう察しがついている。

胸騒ぎがして、落ち着かない。何か大変なことが、これから起こる……気がする。となりの小紫が無言で身を寄せてきた。不安にさせてしまったようだ。

「心配すんな。夜々のことは俺に任せろ」

小さな頭を抱え込む。小紫は仔猫こねこのように身を丸め、されるがままになった。

「グリゼルダさん、大丈夫かな？」

「俺が師匠と呼ぶ人だぞ。大丈夫に決まってる」

「でも、あの男の人も、雷真の先生なんでしょ？」

「まあ……な。師範の方も怪物だった。俺が思ってた以上に」

雲雀うんすけの剣技は雷真の想定をはるかに超越していた。しかし――

「それでも、お師匠さまの方に分がある……と思う」

「ねえ。雷真のケンドーの先生、すごく怖いね？」

「そんなことは……なかったんだがな」

気のいい男だった。つかみどころがなくて、いい加減で、いつも冗談を飛ばしていた。だが、ときどき黙りがちになる癖があり――そんなときは、怖かった気もする。

「結局、どういう人なの？ 硝子しよこの知り合い？」

「それがわからねえ。筋金入りの剣術馬鹿で、諸国漫遊、武者修行してたって」

「何て言うか……時代劇みたいな人だね」

「そのはずなんだ。けどさっき、硝子さんの護衛だ……って言ったら」

おかしい話だ。近くに情報部の軍人があるのに、わざわざ日本から呼び寄せるとは。

硝子が個人的に雇ったのだろうか。しかし、つながりがわからない。

黙り込んでいると、ふと、床に黒い水たまりが広がった。

——本ではなく、機嫌の塊だ。家の定、中から見知った少女が飛び出して来る。

「お、お、お待たせいたしましたー 雷真さまー」
 待姿の女子学生、日輪だ。

日輪は丁寧に頭を下げ、それから、まぶしい笑顔を見せた。

「ああ、これは夢でしょうか。雷真さまの方からお誘いくださるなんてー」
 「現実だ。あんまりいい夢でもない」

「——あー 私、飲みもの買ってくるね！」

氣を利かせたのか、小紫がコンバートメントを飛び出していく。

日輪は少しためらったが、やがて意を決し、空いた座席に収まった。
 お互いに言葉もなく、気配だけでとなりを探る。

ずいぶん、久しぶりに思えた。こんなふうには、日輪と二人でいるのは。
 「ず……ずいぶん、久しぶりに思えますね？」

「あつ？ ああ、そうだな……」

「ど、どうなさったのですかっ？」

二人して挙動不審になる。雷真は鼻の頭を指でかき、正直に答えた。

「ちょうど俺も、同じことを考えててさ」

「ま、まあ……っ」

そろって赤面する。意図せずして、甘い空気が漂った。

だが、一瞬のことだ。目輪は居住まいを正し、正面の壁を見つめて言った。

「呼んでくださったのは、決して陸み合うためではないと、心得ているつもりです」

「……悪い」

「謝らないでくださいませ。それに——」

くすり、と可憐な笑みをこぼす。

「夜々さんがあのような状態なのに、ほかの女と楽しく過ごせるような方なら、こうまでお悪いしておりません」

どこまでも雷真を信じきった声。まっすぐな言葉が、胸に染みだした。

「花柳斎先生の行方ですが、わたくしも占を行いました」

「硝子さんの居場所？ 探ってくれたのか」

「はい。ですが、目星もつかず——それゆえ、ひとつ手がかりをつかみました」

「ありがたい。教えてくれ」

「明らかに、何者かの連環——探査妨害を受けております」

目輪が断言した以上、それは事実なのだろう。雷真の胸にも落ちる。

電話越しの様子とも一致する。硝子は自ら姿を消した。急いでいたから、身支度を整えている暇もなかった。つまり、誰かに追われている。屋敷で見つけた大勢の足跡も、昨日感じた硝子の臭いも、その考えと矛盾しない。

硝子は窮地に立たされているのだ。きっと、雷真をその危険から遠ざけようとしている。

そうでなければ、あんな冷淡な言葉を、硝子しょうしが口にするはずがない。

「ありがとよ、日輪ひりん。おかげで腹が決まったぜ。これで、心置きなく出発できる」

「どちらに？ この列車、ロンドン行きでは？」

「そうだ、俺は倫敦ロンドンに行く。出発前に、おまえにだけは伝えておきたかった」

「わたくしにだけ——!?」きゅーんっ♡

日輪の頬ほが染まる。……實際はグリゼルダも知っているのだが、雷真らいしんは日輪のときめき

に水を差すことはせず、この旅行の目的を告げた。

雷真の考えを聞くうちに、串かった日輪の頬は、どんどん青ざめていった。

「賛同いたしかねますー！ それは無謀……無茶ですー」

「今さらだな。毎度のことだ」

「そうですけれどー！ せめて、シャルロットさまや、フレイさまのお力を借りましょう。

人を護すのですから、お二人の魔術がきつと助けになります」

「駄目だ。あいつらも疲れてる。魔力が全然、回復してねえだろうし……」

機巧師団の動きを見た今、学院に何も起こらないとは思えなかった。シャルやフレイに

は、自分たちの身を護まもつてもらわなくては。

日輪はもどかしそうに身をよじった。

「ではせめて、キンバリー先生にご相談を！」

「駄目だ。言えば絶対、止められる。協会に阻止されるかも知れない」

そのくらい、政治的にも危険な賭けだ。狂王子に面会するなど……。

「かくなる上は、わたくしがこのまま、お供いたします！」

「それは絶対に駄目だ」

「わたくしと一緒に……そんなにも……お嬢でございますかっ？」うるるっ。

「違う！ そうじゃなくて、おまえには背負って立つべき一門があるだろ。おまえの連れ、^{すまゐり}品や六連^{ろくぞう}だって無防備になる」

「あの二人は己の身を己で護ります。不遜ながら、こたびの道行き、わたくしより役立つ者はおりません！」

「けどよ……おまえは華族のお嬢さまだぞ？」

「そこがミソでございます。口軽^{くちやう}つたいのですが、わたくしは同盟国の貴人でございますので、王子さまも表面上、丁寧にもてなす必要があるはずです」

なるほど。門前払いや、いきなり戦闘になるリスクを減らせる。敵の懐に入ってから、目輪は頼れる戦力となるだろう。

「……それでも、駄目だ。あのバカ王子がどんな手に訴えるかわからない。あいつは頭の本ジがどうにかたってんだ。それに、これは俺たちの問題だ。俺と夜々の」

「……ついてくるなどおっしゃるなら、どうしてわたくしにその話をしたのですか」
声から温度が消える。目輪ははっと我に返り、あわてて口を押さえた。

「す、すみません、責めるようなことを……っ」

——わかつてゐる。なじりたくなるくらい、雷真の身を案じてくれている。

雷真は日輪の涙を指でぬぐい、そのまま、彼女の頬に手を当てた。

「おまえには言つてきたかつたんだ。約束、果たせなくなるかも知れないから」
もし雷真が戻らなければ、結婚の約束など果たしようがない。

今回ばかりは、無事に戻れる気がしない。何せ、向かう先は敵の本拠地だ。

「俺は本当に最低の戦野郎だな……。約束が果たせないかもしれないのに、こうしてわがままを言う——同郷のよしみで、俺がいないあいだ、夜々を護ってくれ」

一瞬、日輪は痛みをこらえるような顔をした。

だが、すぐに自分を取り戻す。日輪は目元を引き締め、涙と涼やかに応えた。

「かしこまりました。土門日輪、命に代えても、夜々さんをお護りいたします」

「あ、いや、命までは……」

「では、手抜きでよろしいのですか？」

「手抜きは……困る」

「ではやはり、この身を捧げるつもりで励みます」

「……すまない。この恩は、いつか必ず返す」

「生きて戻ってくださると？」

「当たり前だ」

日輪の表情が明るくなる。日輪は席を立ち、正面から雷真を抱きすくめた。ふわっと花

の香りが雷真を包み、やわらかな体を通して、彼女の体温が伝わってくる。

「ひ、日輪？ おい！」

「我は是、天帝が百鍊刀を執りて希う。一下せば何ぞ惡鬼の奔らざるや。天為我父、地為我母、御身護らせ給え——急々如律令」

雷真の背中に回した手で印を結び、祭文を唱える。日輪の体内で魔力の炎が燃え上がり、濁流のごとく押し寄せてきた。

体が強張り、息が詰まる。しかし、不快ではない。ずっと前——物心つくより前、父母に抱かれたときに感じたような、懐かしい安心感を覚えた。

やがて魔力の放出がやみ、日輪は名残惜しそうに身を離れた。

「身固めにございます。雷真さまの身を、天がお護りくださいますように」
微笑んで告げる。その笑顔には、疲労の色がにじんでいた。一体、どれほどの魔力を込めてくれたのか。やつれたようにも見える。

雷真が何か言う前に、日輪は懇切つばく笑って、かぶせるように言った。

「恩は返すとおっしゃいましたね？ 無理なお願ひでも聞いてくださいますか？」

「ああ——って、待て——結婚しろとかはナシだぞ？」

「そこまでは申しません。脅迫して夫婦となっても、愛してもらえません」

「そうか……なら何でも言ってくれ。常識的な範囲で」

「こ、こんなことを申したからといって、はしたない女と思わないでくださいね？」

「待て待てー その前フリから飛び出す台詞は、大概ロクでもないぞー」
 日輪は恥じらいながら、しかし必死に、極めてきわどい頼みを告げた。

2

柱のような光が落ちる、きらびやかな大伽藍。

いろりは光に目を細め、壮麗なフレスコ画を見上げた。

後陣は無数の正方形で切り分けられ、幾何学模様となっている。そのすべてのスペースを緻密な宗教画が埋め、まるで曼荼羅のようだ。

見事な聖堂だった。神を神とも思わないのが魔術師だが、表向きは神にかしずき、ときには權威を利用して、上手く折り合いをつけてきた。その歴史を反映しているのだろうか。こんな聖堂を、自分たちの隠れ家に設けるとは……

いろりはため息を隠して、目の前の青中にささやいた。

「主……」

聖堂の中央、大円卓の席に、硝子が座っている。

硝子は返事もせず、振り向いてもくれない。いろりはたまらない気持ちになった。

「夜々はもう、回復したでしょうか？」

「……………」

「答えてください、主——」

「何度も言わせないで。夜々のことなら心配ないわ」

冷やかな声が飛ぶ。いろりは怯んだが、それでも食い下がった。

「それは「助かる」という意味ですか？ 私には、まるで主が……」

「くどい。おまえ、私が夜々を見捨てると思うの？」

「いえ……めっそうも……」

口では否定したものの、目を伏せてしまう。

確信が揺らいでいる。生まれて初めて、主を信じられなくなっている。

（貴女を信じてよいのか……私にはもう……わからぬのです……！）

何せ、ここには——

「そろそろ、よいかの。頃合いじゃ」

円卓の向こう側で、金髪の乙女がつぶやく。

蜂蜜色の金髪、黄金の瞳を持ち、どす黒い強気を帯びている。その美しさは猛毒を持つ

花のようで、いろりの恐怖心を否認なしにかきたてる。

金薔薇アストリッド・セト。

肌は磁器のように白いが、左腕のみ漆黒に染まり、金属的光沢を放っていた。

昨日の戦いで腕を失い、復元中だそうだ。人体を複製する魔術など、いろりは見るのも

初めてだ。禁忌の技法なのは間違いない。

列席しているのは、彼女を含め八人の（薔薇）たち。

いずれも十分に齡を重ね、恐るべき魔性を手にした魔女。ただし、おとぎ話に出てくるような、三角帽子に黒いローブ、鷲鼻といった風体ではない。

全員が十代から二十代といった容姿で、髪の色は金、銀、黒、赤と色とりどり。服装も同じくらい奇抜で、互いに美を競うように、派手な露出を愉しんでいる。全員が薔薇のレリーフが施された指輪——（薔薇の印章）を持ち、ある者は耳飾りとし、ある者は首から下げて、お互いの目につくようにしていた。

その中でもひと際目立つ貴婦人が、軍服をまとった淑女。

優美な装飾が施された、幅広い剣を抱いている。金モールの肩飾りがいかにも貴族然としていて、さぞ身分の高い女性だろうと思われる。

給仕専門のメイドが二人、配膳台で紅茶を運んでくる。ティーセットはわずかに二人分のメイドはアストリッドと硝子の前にのみ、紅茶を置いた。

——ほかの魔女は、ここにはいないのだ。幻術ともテレパスとも違う、正体不明の魔術効果で、あたかもここにいるかのようにふるまっている。

いろりの心は千々に乱れた。

なぜ、主がこのような場所にいるのか。彼女たちと同じ薔薇の指輪をはめて。

硝子の背中がひどく遠く思える。硝子は考えの読めない女だ。自分の考えも、過去も、積極的には語らない。今までは、それでいいと思っていた。いつか主が語りたいと思った

ときに、語ってくればよいと。

だが、今となつてはもう、そんなふうに身を委ねることができない。生まれて初めて、主のなされることを、理解できない自分がいた。

昨日、硝子は何者かに命を狙われた。

いろりは雷真の寮にいたので、正確な事情はわからない。詳細を知っているのは小紫だけだが、硝子は硬く口止めし、姉妹で話し合うことすら禁じた。

もちろん、硝子に直接たずねても、答えてくれない。

硝子を狙ったのは誰だろう。それは、どのような意図でなされたことなのだろう。わからない。何もわからない。わからないことだらけだ。

（雷真殿……私は一体、どうすれば……？）

学院に残してきた妹たちを思うと、胸が張り裂けるような気がした。

気楽に見えて、小紫は気が弱い。きつと不安に怯えているだろう。

夜々は重傷のはず。硝子は心配ないと言うが、いろりの目には瀕死に見えた。マダナスの戦隊に叩きのめされた体で、魔王相手に無茶をした。結果、魔素回路が砕け、心臓に穴があいたのだ。いろりが同じ目に遭えば、半日ももたない……。

「茶の用意はよいかな？ では、善哉の茶会を始めるわえ」

アストリッドの呼びかけに、魔女たちがうなずいて賛意を示した。

「ではまず、新たな善哉のお披露目じゃー！」

硝子は背筋を伸ばし、うやうやしく礼をした。

魔女たちに頭を下げる主の姿が、いろりの視界で、ぼやけて、にじんだ。

3

式神の転移で日輪が去ると、雷真は赤い顔でドアを開けた。

もたれていた小紫が転がり込んでくる。――やはり、盗み聞きをしていたか。

小紫はえへへと笑って、それから、脅かすように言った。

「今の、夜々姉さまが知ったら、何て言うかな？」

「やめてくれよ!? 俺マジで殺されるからな!」

「……金剛力が戻れば、だけどね」

「戻るさ。これから、俺たちで取り戻すんだ」

しよげ返る小紫の肩を叩き、何とか励まそうとする。

「長い夜になりそうだ。今のうちに、少し眠っておこう――」

ずがんつ、と突き上げるような揺れがきた。

車体が大きく傾く。レールと車輪が激しくこすれ、甲高く鳴いた。

「な……んだ……!?」

幸い、脱線は免れたようだ。多少のガタつきの後、列車は再びレールに戻る。

車内にざわめきが広がる。その動揺を引き裂いて、今度は爆発音が響いた。一発二発ではなく、連射だ。となりの車両でガラスが砕け、魔術の雷撃が窓の外を無数に走る。

あれはライトニングボルト——高位の攻撃魔術で、キンバリーの得意技だ。

（まさか、魔術師協会か……!?）

一瞬、はたらく黒コートが見えた気もする。いずれにせよ、あちらの車両では魔術師が争っている。ドアの隙間からキナ臭い煙が漏れてきた。

「雷真——私たち、行かなくていいのっ？」

「ああ、行かなくていいぜ」

——それは、雷真の返事ではなかった。

先ほどまで雷真がいた個室に、黒衣の貴公子が座っている。

我が物顔で座席を占拠し、足を組んでふんぞり返る。向かいの席には、若い装甲の自動人形イカロスが、狭そうに体を縮めて腰かけていた。

いつの間に……いや、「いつ」かは問題ではない。

「何で、てめえがここに……!?」

「よう、ライシン。運命を感じる再会だな？」

人を喰ったような笑みを浮かべ、黒太子エドモンドがそう言った。

雷真は信じられない思いで、因縁の相手を凝視した。

こんな展開は想定していない。道中で出くわすなど……。

服装はいつも通り黒ずくめ。だが、いつもの洒落っ気が感じられない。服も、肌も、髪も乱れ、薄汚れている。昨夜から一睡もしていないようだ。

となりの車両では、まだ銃弾や火炎魔術の応酬が続いている。雷真はコンバートメントに入り、小紫を引き入れて、後ろ手にドアを閉めた。

エドマンドはにやりとして、世間話のように言った。

「学院を抜け出して鉄道旅行とは恐れ入るぜ。どこまで行くんだい？」

「てめえに……会いに行くところだ」

何がおかしいのか、エドマンドは噴き出した。

「何だ、使いを送ってやると言ったのに、おまえの方からさちまったのか。——おっと、

用件の察しはついてるぜ。格代の人形師、花柳章を捜してる、だろ？」

「……話が早いな。おまけに手間が省けた。これで倫敦まで行かずに済む」

小紫が腰の銀剣に手を伸ばす。雷真も密かに魔力を練った。

「硝子さんの居場所を言え。俺もちよいと焦っててね、今なら拷問も辞さない」

「拷問なんざしなくても教えてやるよ。だが、『手間』は増えたな、確実に」

「——どういう意味だ？」

「わからないのか？ 俺がここにいて、議会の連中が暴れてる理由を考えてみるよ。俺が

どうなりや、そんな状況になる？」

「……バツキングムから、逃げてきた？」

「五〇点の答えだな」

「……配点間違いでなけりや、何が足りないってんだ？」

エドマンドは芝居がかった仕草で、我が身の不幸を嘆くように天を仰いだ。

「ああ非道なり、不忠なる貴族どもー この俺に国王殺し、王位篡奪者の汚名を着せて、あまつさえバツキングムを占拠しやがるとは！」

雷真は絶句した。そんな大事になっているのか！

「俺はこれから、玉座を取り戻しに行く。そのためには戦力、武器がいる。そこで、自ら財宝を回収にきたってわけさ。俺の親友がラザフォードから奪ったものをな」

「……ライコネン……近くにいろのか？」

「潮死だ。おかしいな野郎に斬られちまって——これがまた実に傑作なんだが」

エドマンドの言葉をさえぎって、猛烈な殺気がきた。

猛禽のごとき、天からの強襲。屋根が焼け、細妻の雨が降る。

エドマンドが座っていた席が、一瞬で炭化した。

続いて、キンバリーが降りてくる。

キンバリーは雷真をにらみ、びきびきと頬を引きつらせた。

「あきれろぞ、（下から二番目）。なぜ、こんな男と談笑している」

「談笑……までは、してなかっただろ」

「雷真！ 囲まれてるよ！」

小案が鋭く警告する。前後の車両の扉が開き、灰十字の戦士たちが次々に姿を見せた。窓の外や、屋根の上にも気配がある。

代わりに、後部の車両が静かになっていた。そちらの戦闘は終わったらしい。

この状況、雷真はどう対応するのが正解なのだろうか？

悩んでいると、となりの個室との仕切りが、紙のように破けた。

べろん、と側面の壁まではがれ、列車の外へ落ちて行く。外気が吹き込み、室温が一気に下がった。——イカロスの（空間歪曲）を応用した、切断攻撃だ。

崩れた仕切りの向こうには、エドマンドが悠然と立っている。最初の雷撃、彼にはかすりもしなかったようだ。空間歪曲を使い、となりの部屋に逃げていたらしい。

キンバリーは拳銃を抜き、エドマンドの眉間に照準を合わせた。

「謀反人エドマンド。その身柄、拘束させてもらう」

「不敬も極まるね。俺はこの国の皇太子だぜ？ そんなことが誰にできる？」

「我らが教父（時の翁）の意志ゆえに」

魔術師協会の指導者は、バチカンの威光が届く範囲において、王侯貴族に対しても十分な権威を持つ。もっとも、中世における（破門）ほどの威力はない。

他人事のように眺めていると、エドマンドがこちらに笑みを向けた。

「ぼさつと見てていいのか？ 俺は花柳寮の居場所を知ってるんだぜ？」

「耳を貸すなよ、（下から二番目）。私はバカが嫌いだ」

キンバリーが釘を刺す。エドマンドはさらに、

「なあ、ライシン。花柳斎は一体誰から逃げてるんだろうな？」

「……なに？」

「こいつらを信用していいのか？ 昨日、花柳斎に発砲したのは――」

「耳を貸すな！」

「こいつらだよ！」

エドマンドは両手を広げ、嬉々として叫んだ。

「何せ、花柳斎は俺たちの――」

ガンガンつと発砲音が耳朶を打ち、エドマンドの言葉をかき消した。

だが、雷真と小紫の耳には、聞き取れてしまっていた。

花柳斎は俺たちの同僚――

結社の善後なんだぜ、とエドマンドは言った。

4

「まずは新顔の紹介と行こう。推薦人は黒書機じゃったか？ ぬしが紹介せよ」
ちぎったスコーンを口に放り込み、金書機がテーブルに足を投げ出した。

自分の右となり、黒髪の乙女に視線をやる。

そちらには白い肌、黒い髪の乙女が座っている。小柄で細身、遠目には東洋人のように見えたが、れっきとした白人だ。豊かなまつ毛、濃い目に塗ったアイシャドウのせいで、アンティークドールを思わせる顔立ちだった。

乙女は露骨に顔を潜め、不愉快そうに金薔薇をにらんだ。

「しきらないでくださいまし——と言いますか、まずはその下品な態度をやめていただけませんか。テーブルに足をのせるなど、はしたないにもほどがあります」

「ふん。いらぬ小言が増えるのう、婆あになると」

「なに？ 年齢ならそちらが七つも上でしてよ、貴ババア——」

机を叩いて立ち上がる。にらみ合う二人を見て、薔薇たちから失笑が漏れた。

二人がにらみつけると、薔薇たちは笑いを引つ込め、素知らぬ顔でそっぽを向いた。

——どうやら、金薔薇と黒薔薇、この二人が強い発言力を有しているらしい。

「さっさと紹介するがよい。セトの呪いはぬしの城まで届くわえ？」

「やりやがったらその部屋に黄泉の入り口を開けますわよ？ ともあれ、わたくしも務めは果たしましょう。そちらの御仁——」

白手袋をはめた手で、優雅に硝子を示す。

「ご存知の薔薇も多いでしょう。バイオニクス・ドールの第一人者にして、日本軍増長の立役者、カリニートサイですわ。彼女の席——紅薔薇の座と薔薇株八千はわたくし黒薔薇、

セフィラ・バルゼル・アブラクサスの提供です」

堂々と名乗る。古代の呪文のようなその響きに、いろりは聞き覚えがあった。

詳細不明とされる〈薔薇の師団〉の中で、たった二人、本名が割れている者がいるという。それが、金薔薇アストリッドと、黒薔薇セフィラ……。

彼女の推薦ということは、黒薔薇は硝子の知己なのだろうか。

だが、いろりは黒薔薇を知らない。会ったこともないし、見たこともない。

個仕えのいろりの知らないところで、秘密裏に交渉していたのか……？

胸をえぐられるような気がする。いろりは心臓に手を当て、きゅっと指を握った。

「（生き人形）を得章とし、本物の人間を造ったと言われる人形師……かえ」

金薔薇の瞳が、再びいろりをとらえる。

彼女だけではない。硝子のをのぞく全員の視線が刺さる。明らかに監視され、体内を見透かされている。解剖される恐怖と羞恥で、いろりは畏縮した。

「ふうむ……見事な人形じゃ。ニダースほど注文したいわ」

（ニダース……！）

いろりは反発を覚えた。十把一絡げ、完全に量産品扱いだ。ここまで軽い扱いを受けたことは、かつてない。当然、主も怒ってくれるものと思ったが――

「光栄ですわ、金薔薇さま。ですが、商談はまた後ほど」

「主――!?」

「黙りなさい、いろり。主人に意見するつもり？」

冷たく叱られ、いろりは二の句が續げなくなつた。

にじむ涙をまばたきでこらえ、どうにか引き下がる。

いろりの感情など、誰も氣に留めていない。卓上の會話はむしろ和やかに進む。

金善藏はテーブルに肘をつき、試すように硝子を見た。

「花柳斎と言えば、日本軍の虎の子じゃ。存在価値は十二分。見てくれも申し分なし——

ときに、どのくらい歳の歳月、その姿をたもつておる？」

「ご想像にお任せするわ。年齢なんて思い出したくもないでしょう、お互い」

「違いないの」

声をあげて笑う。ほかの善藏たちも苦笑した。

「わしは氣に入つた。この者を紅善藏として歓迎したいが？」

「異議なし」「賛成」「同意します」

善藏たちがテーブルを叩き、賛同の意を示す。かくして、硝子は結社の幹部として認め

られてしまった。いろりの目の前が真っ暗になる。

だが——そんな氣持ちになるのは、まだ早かつた。

「ふふ……善藏もすっかり戦争好きばかりになつたの。挨拶が済んだところで、本題に入

ろうか。古來、結末を決めずに戦争を始めるのは真逆のやることよ」

長い爪でクツキーをつまみながら、金善藏が話を進める。

とさんつ、といろりの心臓が跳ねた。結末？ 戦争？ 何の話だ？

どこと戦うつもりだ？ 英国に仕掛けるのか。あるいは日本——
違う。アストリッドは、いろりがもつとも怖れていたことを口にした。

「人類史上、空前絶後の大戦争じゃ。滋味を味わい尽くさねば、もったいないからの♡」
空前絶後の大戦争——世界大戦！

「しかし、皆には申し訳ないの」

べろつと少女つばく指を舐め、金薔薇は一回を見回した。

「シナリオについて、ゆるりと語らいたかったが。今日は要点だけじゃ。銀薔薇は難しい務めの最中じゃし、わしと紅薔薇も厄介な状況にある」

「聞いてましてよ。灰十字が目前に迫っているそうで。鈍臭いことこの上なしですわ」
黒薔薇セフィラが嘲笑う。アストリッドはにやりとして、

「ロートシルトの隠し口座を凍結されるような、鈍臭い女に言われとうないわ」

「なっ？ なぜ、それを……まさか、このババアが——」

「灰十字とは一戦まじえることになるじゃろうが、死にはすまいよ。ぬしらには残念じゃろうがの。わしと紅薔薇はここを切り抜け、大陸に渡る」

軍服の貴婦人——銀薔薇か——が豊かなまつ毛を上げ、静かに言った。

「立場、脱出の手助けはできませんが。向かう先はどこです？」

「欧州の火薬庫」

魔女が一斉に息をのむ。アストリッドは満足げに唇をゆがめた。

「汎スラブの動きに水を差す。圧と熱をもつと高めるために。そしてもうひとつ。新顔の紅薔薇にも、早くなじんでもらいたいからの」

言外に含んだ意味を、硝子は鋭く察した。

「どんな任務を達成すれば、お仲間に入れていただけるのかしら？」

「火薬庫に火種を投げ入れてもらおうか」

硝子は眉も動かさなかった。だが、口元に緊張が走ったのを、いろりは見逃さない。

「まあ、そんな大役をお任せくださるの？」

「難しいことはない。ハブスブルクの若者を一人、消してもらうだけよ」

硝子は袖に手を差し入れ、煙草を探すような仕草をした。

だが、あいにく、煙管も煙草も持ち合わせていない。今朝方、魔敷に戻った際、日本軍に踏み込まれて、置いてきてしまっている。

金薔薇は粘るような視線を硝子にからめ、言葉だけはさりと続けた。

「オーストリアは不幸続きでの。皇后最愛の息子が謎の死を遂げ、皇后も暴漢に刺されて死んだ——が、いずれも開戦には至らず、国内の（事件）として処理された。ヨーゼフはなかなか賢い男よ。世界大戦を幾度もかわした」

金薔薇のとなりで、黒薔薇の顔色が変わった。

「まさか……リリイは貴女が……やったのではないでしょうね……貴ババア……」

「まさか。あやつの死を世界でもっとも悲しんだのはこのわし。ぬしも當々言っておつたろうが。あやつを倒せるほどの力はわしにはない——そうじゃろ、ん？」

端が破れるほど強く、黒薔薇は唇を噛んだ。この場にはいないはずなのに、殺氣と魔力がいりりのもとまで飛んでくる。金薔薇は意にも介さず、

「しかし、甥まで消されては体面にもかかわろう。上手くすれば、アルザスのあたりまでは戦場になると見たが、どうか？」

銀薔薇に視線をやる。銀薔薇はあごに手を添え、すつとうなずいた。

「……確度の高い推測ですね。シュリーフェンプランは聞き及んでいます。少なくとも、ドイツは国境に踏み切るでしょう」

「さすれば、ぬしも出てこざるを得ぬの？」

「……そうですね。貴女に動かされるのは嫌ですけれど」

苦笑で応じる。はたから見れば、冗談を言い合っているようにしか見えない。

いりりは朦朧とする頭を動かし、主の横顔を盗み見た。硝子は微笑み、相槌を打ちながら、魔女たちの言葉に耳を傾けている。

夜々が死ぬかもしれない、この大変なときに——

硝子は結社に与し、暗殺に手を染めて、世界大戦を引き起こそうと言うのか。

（私は……夢を見ているのだろうか？）

ひどい悪夢を見ているのか。それなら、わかる。ライコネンとの戦いで倒れ、それから

ずっと夢を見ているのだ。もしもそうなら、それは何て幸せな悪夢だろう。

夜々の身が心配で、心配で、たまらなくて、涙がこぼれそうになる。

昨日は光明を見た。夜々や小紫とともに戦い、雷真の成長を実感した。結妹の力が合わされば、赤羽天全にも勝てるのではないかと、そう思った矢先の急転直下。

硝子が信じられないのなら、いろりはこの先、誰を信じればいい？

——わかつている。脳裏に浮かぶのは後の顔だ。

果たして彼は、今どうしているのだろう。

（雷真殿……！）

きつくまぶたを閉じた瞬間、ついに氷の涙がこぼれ出て、ころりと床に転がった。

5

キンバリーが撃った弾丸は、真空の電番を生み出した。

ひき肉にされてもおかしくない威力だが、エドマンドには当たらない。イカロスが空間を歪め、弾丸はエドマンドの表面に沿って軌道を変え、車外へと抜けていく。

「警告なしに発砲とは、アメリカ人みたいな連中だ。なあ、ライシン。こんな野蠻人どもに花柳寮の居場所が割れたら、どうなる？」

普段なら一笑に付すべき台詞だが、今の雷真には無視することができなかった。

硝子がこれまでに造ってきた、禁忌人形の数々が脳裏をよぎる。

硝子は魔王ではない。禁忌の研究など、認められてはいない。フレイとロキを育てた男、Dワークス社長はどうなった？ 禁忌抵触の罪を問われ、極刑に処されたのでは？

硝子もまた、禁忌を犯した疑いがある。協会は硝子を拘束できる――

もし今、硝子が協会に捕まれば――夜々の修復も不可能。

雷真は思わずキンバリーを振り向いた。キンバリーは視線を合わせず、

「バカな考えを起こすなよ？ 我々は花柳斎殿を悪いようにはしない」

「……硝子さんを捜してるのは、本当なんだな？」

キンバリーは「しまった」という顔で舌打ちした。

「信じられないかもしれないが、それは私も把握していなかったことだ。そして、詳しく説明している時間もない。今は私を信じて言うことを聞け。君はライコネン中将の行方を知る人物として――実質（魔王殺し）の容疑で指名手配された」

雷真はぼかんとした。何を言われたのか、とっさに理解できない。

数秒後、一気に思考がつかった。

先ほど雷雀が言っていたことだ。ライコネンと仕合って、討ち漏らしたと……

「待て！ あれは俺じゃない！」

「わかってる！ だが、正式な逮捕状が出ているんだ！」

キンバリーはいら立ちをあらわにして、珍しく感情的に言った。

「申し聞きは英國の法廷でしなければならぬ。王子ともども、我々とこい」

「……そんな暇はねえ。夜々がやばいつてのは、あんたも知ってるだろ。それとも、協會が何とかしてくれるのか？」

一連の望みをかけた問いだった。

だが、キンバリーは唇を引き結んだだけで、答えてはくれなかった。

煩悶する二人を見て、エドマンドはますます調子づいた。

「俺は口が軽いぜ？ 拷問されたら、花柳商の居場所を吐いちゃう。魔術師としても二流だぜ？ 白白刑でも、魔術でも、簡単にバラしちゃうだろうなあ！」

偷笑の笑みを頬に刻み、最後通牒のように言う。

「さあ、ライシン。こいつらに俺を渡して——いいのか？」

「執行開始！ 黙らせろ！」

キンバリーの号令で、黒コート of 魔術師たちが一斉に魔力を発揮した。

足もとに魔法円が浮かび上がり、ルーンの呪式が円周上を走る。さすがは灰十字の戦士たち。会話に付き合ったのは、捕縛の結界を準備するためだ。

貨車全体が結界に包まれる。魔力をこっそり削られ、呼吸が苦しくなった。

体内の魔力循環を阻害されている。イカロスが無効化するつもりだ。予想通り、動きの鈍ったイカロスに、背後から黒コートが襲いかかった。

それが、致命的な失策だった。

エドマンドから膨大な魔力があふれ出て、イカロスの魔術回路に流れ込む。

（この力——例の薬——）

空間のつながりが断ち切られ、貨車が分解される。線路もぐちゃぐちゃに乱れ、迷路のようになった。線路周辺の鉄骨やら電信柱やらが巻き込まれ、パズルのように組み替えられて——唐突にもとに戻る。

下手に動いた魔術師は、空間の断裂に巻き込まれてしまう。黒コート of の切れ端が飛び、列車の屋根が吹き飛んだ。

恐るべき支配力。とても人間が出せる魔力ではない。

イオネラの研究を応用した、魔力増幅薬の効果だ。あらかじめ服用していたか。それを直前まで悟らせないとはい実に周到、かつ狡知——

（こいつ……迂闊な性格だと思ってたのに……！）

エドマンドは空間の切断と接続を繰り返し、次々に黒コートたちを振り落としていく。だが、灰十字の戦士もまた、学生とは段違いの実力を持っている。乱れた空間のつながりを一人が強引につなぎ止め、別の一人が若い宝石を投げた。宝石から雷電が飛び、高電圧の矢——ライトニングボルトがエドマンドを襲う。

（あいつら、自動人形もなしに魔術を使う……！）

キンバリーと同じ戦闘スタイルだ。人形に魔術制御を依存しなくても、魔具や魔石だけで、彼らは十分戦えるのだ。

車両から投げ出されたはずの魔術師が、一人、二人と戻ってくる。形勢は一気にあちらに傾いた。だが、エドマンドの表情に動揺はない。焦りすら、ない。

エドマンドはもう敵を見ず、雷真を見つめていた。

黒い瞳が試いている。どうするんだ、ライシン？ おまえは、どうするんだ？

雷真は葛藤した。

あいつは最悪の大罪人。イオネラの理想を踏みにじり、多くの命を奪った男。シャルや日輪を苦しめた結社の一員だ。だが、硝子の居場所を知っている！

明日までに硝子が戻らなければ、夜々は金剛力を失う。協会に事情を話せば……いや、彼らの判断は無情なほど合理的。酌量してくれるとしても、時間がかかる。イオネラは何か月、拘束された？

駄目だ。頭が働かない。計算が追いつかない。わからない。俺は一体――

「さあ、ライシン！ どうする！」

「その汚い口をつぐめ！」

死角からキンバリーが飛び出し、発砲した。エドマンドは上体をそらして回避したが、そのせいで体勢が崩れ、決定的な隙が生じた。

キンバリーの手にはもうダガーがある。切っ先がエドマンドの頸動脈をとらえ――

――なかった。

「今度という今度は……あきれ果てたぞ」

キンバリーの首筋に、雷真の右手から、魔力の糸が流れ込んでいた。

「知っているはずだがね……私はバカが嫌いだ。後先考えないバカは……特にな」

「……悪いな、先生」

冷たい汗があごを伝う。雷真はほかにどうすることもできず、薄く笑った。

「俺が、そのバカだ」

「ははは！ いいぜ、最高だ！ マジで協会に盾突いちまうとはな！」

エドマンドが天を仰ぎ、哄笑をあげた。

キンバリーのダガーを蹴飛ばし、イカロスに莫大な魔力を送り込む。

正真正銘、全力全開。その気になれば、ここに巨大な断層を生み出せるほどの魔力だ。

黒コートの一人がキンバリーを救い出し、急いで後退する。

次の瞬間、壊滅的な破壊現象が起きた。

空間がひしゃげ、裂け、つながりが乱れる。歪みが線路を荒らし、枕木を折り、レール

を鉄くずに変え、後部車両を切り離す。

雷真の胸で小案が震える。雷真もまた、寒さを感じないほど、心が凍えていた。

大変なことをしたという自覚がある。キンバリーを裏切ってしまった……。

黒コートたちはひとり残らず姿を消した。死んだかどうかはともかく、一時退却したのは間違いない。追ってくる気配もない。

血の氣を失くす雷真とは対照的に、エドマンドは喜色満面だった。



「つくづく、天才と紙一重のバカだ。俺はますますおまえが気に入ったよ」

「……俺はますます、てめえが嫌いになった」

「実に小気味いい台詞だが、あいにく、俺は嫌われた方が燃える」

「……硝子さんの居場所を教えろ」

言わなければ、殺す。その覚悟を殺気に変え、エドマンドに叩きつける。

エドマンドは上機嫌で、はるか進行方向をあごで示した。

この線路の向かう先にあるもの。それは、帝都ロンドンだ。

「……バッキンガム？」

エドマンドが首肯する。雷真の理性が危うくなった。

わけがわからねえ！ そう叫んで、暴れ回りたい。

だが、そうしても無意味なことは、かろうじて理解できている。

雷真は深呼吸を繰り返し、必死に心を落ち着けた。

「てめえ、さっさと……王宮を追い出されたって言ったよな？ 貴族たちの手で」

「ああ、俺が親父殿を暗殺しちまったのがバレたみたいでね。ライコネンの留守を狙って、首を獲りにきやがった。首謀者は（白）の勢力——キングスフォートだ」

白の勢力。その響き、アリスに聞いた『白か、赤か』と一致する。

おまけに、キングスフォートときた。

雷真の動揺などおかまいなしで、エドマンドは思案顔で続けた。

「ややこしいことに連中、俺の懸母上を担ぎ出した。あの女、本音は俺を殺したいだろうから、味方とは言い切れず——孤立無援の状況だ。結社の増援もアテにはならない。俺が王宮を奪還しなけりゃ、金匱匱の嬰さまも、花柳斎も、協会の手に落ちる」

「……暇わない選択肢もあるだろ。こつそり忍び込んで、硝子さんを連れ出せば」

「ロイヤルパレスの警線結界をすり抜けることができるなら、な。(活殺結界)と呼ばれた男——エドガー・ブリューなら、できるかもしれない」

警線結界や探知結界をかわすのは、人間の五感をごまかすのとは難度が違う。忍び込むのが無理ならば——取れる方策はひとつ。

「……てめえと組んで、バッキンガムを襲撃しろ……ってか？」

「ご名答。だから、『手帳が増えた』と言ったのさ」

「こりやもう……犯罪者どころの騒ぎじゃねえ……な」

「そそるだろ？」

エドマンドが笑う。殴り飛ばしたい衝動に駆られたが、雷真はこらえた。

今の雷真には、謎の後ろ盾もない。日本軍の制止を聞かず、魔術師協会に唾した。

夜々を救うには硝子の助けがいる。硝子はバッキンガムにいる。宮殿は反エドマンドの良心的な正規軍に占拠されている。そして、彼らの側には魔術師協会がついている。協会が硝子の身柄を抑えたら——雷真は詰む。

この状況で、宮殿に乗り込み、硝子を撃破しなければならぬ。精確な居場所を知っているのはエドマンド、戦力になりそうなのもエドマンドだ。

「……てめえの味方になるなんぞ、死んでもごめんだ」

「ほう。それで？」

これが断腸の想いというやつか。雷真は腸がねじ切れるような痛みに耐え、しほり出すような声で、意志を告げた。

「だが……バツキングまでは……同行する」

エドマンドの顔に笑みが浮かぶ。それは狂喜でも陶酔でもなく、知性と野心に満ちた、どこか気高さを感ぜさせる笑みだった。

「俺たちが城を陥とすのが先か、灰十字の侵入が先か。ずいぶんなロングオフズだが——ひとつ、勝負といこうじゃないか」

耳障りな笑い声に怯え、小紫が雷真にしがみつく。

ほかにどうしてやることもできず、雷真はただ、小紫を抱きしめた。



Chapter 5 魔竜と巨人



1

ラファエル男子寮の近く、ひと気のない林の中にロキはいた。

夕暮れに染まる木立ち。ここはそれほど荒らされていない。せいぜい、自動人形の破片が落ちていたり、落ち葉に灰が降り積もっている程度だ。

つい先ほどまで、ロキは工学部長に呼び出され、材料工学の地下実験室にいた。

「イオネラ・エリアード教授が到着しだい、彼女の〈最終調整〉に協力せよ」

という指示だ。じきにイオネラがやってきて、調整とやらの趣旨を説明されたのだが、

ロキは聞かされた話、見せられたものを一蹴した。

「お断りだ。オレには必要ないし、興味もない」

「——じゃあ、気が変わったら、教えてね？」

イオネラはしつこく言わず、雑な〈仕様書〉を手渡しただけで、ロキを解放した。

地上に出てみると、学内はざわついていて、大講堂は黒煙を噴いていたし、魔術でやり合った痕跡もあった。だが、昨日の襲撃に比べれば、規模も威力も可愛いものだ。学生間

のいさかいだろうとあたりをつけて、ロキは我聞せずを貫き――

こうして今、煤けたベンチに腰掛けて、流された書類をめくっている。

大雑把な図、グラフや表、無数の注意書きを見ているうちに、怒りが込み上げた。

「……ふざけるな」

無意識に力が入り、ぐしゃっと書類がつぶれた。

「ふざけるな！ オレにこんなものを使えと言うのかー」

激昂し、ベンチに叩きつける。

剣形銀のケルビムが、光点のような目を大きくした。

樹木に立てかけられた姿は、剣と呼ぶにはみすばらしい。魔女アストリッドに腕をもぎ取られ、ブレードの半分を失い、シルエットが崩れてしまっている。

ロキはしばし相棒を見つめ、理不尽なことを言った。

「……おまえも怒れ」

「Heum-Yee」

「イオネラ、エリアーデは天才だが、人間の心がない。冷血女だ」

「Heum-Yee」

ケルビムは怪訝そうだったが、素直に従う。ロキは可笑しくなり、噴き出した。

ほんの少し、気がまぎれる。ケルビムの言語能力は低いが、それゆえに気楽な面もある。

雪月花のように高度な会話が可能だったら、うるさく感じたかもしれない。

（雪月花……か）

夜々の魔術回路が失われた件は、ロキも聞き及んでいる。あのうるさい乙女が使えなくなったら、雪真はどうするのだろうか？

この先の夜会も、復讐も、夜々なしで完遂できるのか。

ケルビムの視線に気付き、ロキは言い訳がましく言った。

「心配しているわけじゃない。誰が脱落しようが、オレには無関係だ」

「ズレ」

「……簡単に言うんじゃない。あいつが消えれば、（暴竜）も（魔）姫）も好き勝手に動き始める。アスラ一派はまだ健在——オレと姉貴だけでは少々手こずる」

「ズレ」

「何だとき？ オレたちが苦戦すると言いたいのか？」

光点のような目が、わずかに収縮する。困っているようだ。

ロキは自嘲して、ベンチにもたれた。

「……おまえ相手に、何を言ってるんだろうな、オレは」

天を仰ぐ。ほんのり赤みを帯びた青空を、雲が流れていく。

——静かだ。ほんの半年前、ここはもっと騒がしかった気がするのに。

レポートを天にかざし、複数並んだ文言のひとつに目を留める。

（魔術回路（完全統制振動）——原子固定・防衛性能特化タイプ）

それが誰の魔術回路をベースにしているか、容易に想像できてしまう。

（ソフィア……）

ロキが自ら手にかけて、自動人形の乙女。

見るともなしに、あたりを眺める。この場所で、あの日、彼女は泣いていた。季節は変わった。輝いて見えた初夏の風景は、もうどこにもない。

だが、目を閉じれば、あのとき嗅いだ風の香りを思い出す。

はかなげな微笑みが脳裏に浮かび、理由のわからない苦痛が胸を苛む。

それが後悔という感情だと、今さらロキは理解した。

（バカな……何て弱さだ、オレは！）

自分自身にあきれ果てる。今になって、後悔しているのか。

彼女は死を望んだ。殺してくれと言った。それはまぎれもない事実だ。

ロキはそれを叶えたただけだ。約束を果たしてやった。だが――

それは本当に、彼女の望みだったのか？

死にたいと口にする者が、必ずしも命を捨てたいと思っているわけではない。今のまま生きていくのがつらいと、そう言っているだけなら。

本当は、救いを求めているのなら。

（本当は……助けてやれた、のか――？）

足もとの地面が崩れ落ち、どこまでも落ちて行くような気がした。

ローゼンベルクから彼女を強奪し、自由にしてやればよかった。そうすれば、あるいは雪月花ゆげがのように生まられたかもしれない。

そんな義理はなかったと思う気持ちと、なぜそうしなかったのかと思う気持ちが、胸の中で吊り合った。

答えが出ない。あのとき、どう行動すればよかったのか、わからない。

「思い詰めた顔をしているね。悩み事かい？」

反射的に振り向く。背後、一メートルの距離に、アストラが立っていた。

ロキは自分自身を殴り飛ばしたくなかった。こんな距離まで気付かないとは！

「……忍び足で距離を詰めてくるとは、ご立派な趣味だな。人違いかと思ったぞ」

「僕も人違いかと思ったよ。背中がガラ空きだったから」

羞恥心を刺激され、ロキは顔を背けた。

アストラはロキのとなりに腰を下ろし、決意を秘めた声で、こんなことを言った。

「君に問おう。君は白？ それとも、赤？」

「……そのくだらない白赤問答、あんたがやらせているのか？」

「ああ、そうだ。この活動、僕の同志たちが進めている」

「何の意味がある。オレを威嚇してきたバカは、にらんだけで逃げ去った」

「——内容は知らないのか。学生には周知してきたつもりだったけど……思えば、君たちは独立愚連隊どくりつぐれんたい。ほかの学生と交流がなかったね」

雷真をはじめ、シヤル、フレイ、ロキ、日輪と、いずれも浮いている。夜会が激闘争の様相を呈した（円卓戦争）以後、ほかの学生との接点も失われていた。

「白は改革を是とする立場、赤は否とする立場の合言葉だよ」

「改革……とは何だ？」

「学院が魔術師協会から離脱して、英国政府に帰属する——という改革だ」

ロキは目をむいた。それは実質、学院の国際色を捨てるということ！

改革と言えば聞こえはいいが、時代に逆行する、内向きの方針転換だ。

「……それが本当に改革だと、あんたは本気で思っているのか？」

アスラは青くさい（平等）の理想論を掲げ、新機関を組織した。進歩的な思想の持ち主だと思っただけに、これを改革と呼ぶ彼には違和感がある。

だが、アスラは迷いのない眼をして、うなずいた。

「そうだよ。僕はこの改革を断行する」

「ふざけるな。あんたは世界大戦を回避するために——学生の国際的な連携が平和に寄与すると思えばこそ、同志とやらを募ったんだろう」

「そうだよ。だからこそ、現（魔術師協会）を否定する」

アスラはすらすらと、よどみなく語った。

「世界は変革を迫られている。旧体制は現用に堪えない。協会とて例外ではない。彼らに世界大戦は止められない。その証拠が、この惨状だ」

一面の焼け野原、瓦礫の山を示す。

「結社の暗躍を今日まで放置した、そのツケが回ってきたんだ。いずれ、世界中がもっと凄惨な光景に変わる。協会の傍觀主義、パチカンに対する服従の姿勢は、中世においては有効だったのかもしれない。だけど、帝国主義のはびこる現代では——」

「もういい。もう黙れ」

ひどく苦い気分で、ロキは唇の端をねじ曲げた。

「いつまでもあんたに喋らせていては、説得されてしまう」

そんな悔れを抱くほど、ロキはアスラを評価している。

「……〈劍帝〉、僕は君を味方になりたい。僕の同志になって欲しいんだ」

「なら、馬鹿げた詩大妄想を捨てろ。学生の本分は学業だ。政治に首を突っ込むな」

アスラは表情を重め、息苦しそうに答えた。

「なぜ、わかってくれない。現代に生きる者として、その態度は無責任だろう？」

「おかしいのはあんたの方だ。何をそんなに焦っている。心配性の学者でさえ、そこまでの危機感を持つてない。それとも、あんたには危機の前兆が見えているのか？ 学生に過ぎないあんたが、どうして——」

言葉の途中で、ロキの脳裏に閃くものがあった。

「あんたの実家は……インド總督府高官……オーエン家」

英国政府の重戦にある家柄だ。当然、国際情勢にも通じている。

「まさか、養父に何か、吹き込まれて——」

「それは違う。これは僕の意志だ。僕には、祖国を護る義務がある」

アスラは氣迫のこもった眼差しを向け、力強く言い放った。

「僕は大戦の勃発を阻止する。君も力を貸してくれ」

「断る」

大嫌いな男の口癖が、思わず口を突いて出た。

「あいにく、オレはあんたほど高潔な人間じゃない。世界大戦などどうでもいい。オレは魔王になる——それだけのために戦う」

「……この変化は不可逆だ。学院はもう元通りにはならない。夜会も止まる」

「何も変わらない。夜会が終わるまでは」

「こちらにつけ——禁忌の研究なら、ほかにやりようもある——」

「他人の権威に尾を振れば、だろろう？ そんな生き方はごめんだ」

「その権威でなければ、救えない者もいる。（下から二番目）」と、その相棒のように」

「何だと？ それはどういう意味だ？」

アスラは意外そうに眉をひそめた。

「……まだ聞いていないのか。あの二人を差し出さなければ——いや、説明は不要だな。

ここはどのみち、武力で制圧される」

「意味不明だが——いいことを聞いた。はっきりしたよ、己の立場が」

ロキは意識を研ぎ澄まし、全身に魔力をみなぎらせた。

「白か、赤かと訊いたな。答えてやるよ——あんたの逆だ！」

ケルビムに魔力を飛ばす。相棒は瞬時に反応し、宙に浮き上がった。

アスラもただちに反応し、自分の自動人形——インドラを呼び寄せる。

だが、インドラより先に、別の影がすべり込んできて、アスラを護った。

黒塗りの刀を構えた、小柄な少女。

目深にしたフードから、ロキと同じ真珠色の髪がのぞいている。

「……気は済んだでしょう、アスラ。最初から説得の通じる相手じゃない」

「待つんだ、ヘイゼル。もう少し——」

「これ以上、おあずけはなし。契約通り、私がここでやらせてもらう」

しゃらりと黒刀を抜く。それだけで、ロキの肌が凍立った。

凄腕だ。剣を合わせるまでもなく、それがわかる。

このときになってようやく、ロキは彼女の名前を思い出した。

ヘイゼル・ハイムダル。〈十三人〉の一人にして、国籍不明の一回生。

ためらっているアスラを、ヘイゼルは小さな尻で押しやった。

「行って。貴方には教授を肅清する仕事があるはず」

「……わかった」

「待て！」

思わず声を荒らげてしまう。ロキは信じられない想いで、アスラをにらんだ。

「蘭清……とは、何の比喩だ？」

「……残念だけど、比喩じゃないよ」

感情の失せた声。冷え切った瞳でロキを見やり、アスラは言った。

「悲願の意を示さない者は、先に消しておく。特に教授は、侮れない敵となる」

「馬鹿なことを……！」

怒りで視界が赤く染まった。信頼が芽生えていただけに、この妄言が許せない。

ケルビムの柄をつかみ、直接斬りかかろうとする。

その通路を、ハイゼルが塞いだ。

「貴方の相手は私」

「どけー」

容赦なく刃を浴びせる。だが、相手の剣さばきも巧みだ。初太刀でケリをつけられず、

二撃、三撃と重なるうちに、横から強烈な光が飛んできた。

二人そろって距離を取り、そちらを振り向く。

学部間広場のあたりで光芒が散っている。何かの儀式魔術が起動したようだ。

天空に紋様が浮かび上がる。ロキが読み取ったところでは、それは防衛結界の一種に見えた。強いて言うなら、バリアトリアルにそっくり——

（違う——その逆——カウンタースベル——）

真逆の効力を持つ呪式、バリアトリアルルの対抗魔術だ！

地響きが轟き、城壁から天に向かつて、半透明のオーロラが伸びた。

学院の敷地は対魔術用の遮蔽シールドに覆られている。それが今、肉眼で見えるほどに強く輝き——ひび割れ、フラクタル状に分解されていく！

やがてガラスが砕け散るように、シールドが破れた。

魔術効果が逆流し、シールドの発生源——城壁にまで破壊が及ぶ。石造りの堅固な城壁が、膨大な魔力の侵食を受け、一斉に崩れ落ちた。

あたかも、巨大な砂の瀑布。

城壁が上から粉砕されて、凄まじい量の砂塵が舞った。

やがて学院の囲みは取り払われ、市街地との仕切りが消える。

消えた城壁の向こうには、おびただしい数の兵がいた。

総数一万二千。その半数が自動人形という機巧魔術の大部隊——

大英帝国の精鋭部隊、〈機巧師団〉だった。

2

激しい震動が大地を揺るがす。

二百年の自治と独立を支えた城壁が、砂の城のように崩れていく。その終末的な光景を、

アンリはただ見守ることしかできなかった。

市街に無数の人影が見える。自動人形を運れた魔術師が、学院を包囲している――

「第一機巧師団長、グロリーアである」

敷地の外から、拡大された音声が届んできた。

フレイはきょとん、としたが、シャルとアンリは飛び上がった。

「グロリーア妃殿下將軍!? 王妃さまじゃない――」

「学院の教職員に告ぐ。既に申し渡したように、新学院長として赴任したライコネン中將が帰還せず、昨日より消息不明である。この件に関し、何らかの事情を知っているものと見て、我らは学生一名と、その登録人形の提出を求めた」

王妃の言葉が大音量で拡散する。教授や警備、学院生に言っているだけではない。近隣区画の市民たちに、自分たちの正当性を訴えている。

「その学生とは、二回生ライシン・アカバネ」

名指しで言う。フレイが言った通り、これは確かに指名手配だ。

「既に二時間、学院の返答を待った。残念ながら、協力は得られず――是より一〇分の後、強制捜索を執行する。学生は可能な限り集合し、武装を解除して待て。以上」

一方的に通告しただけで、対話の意志は見せない。

アンリは震えた。先ほどフレイが言ったのは、つまりこのこと。

雷真と夜々が（魔王殺し）の容疑で指名手配された――本当に！

……いつか、こんな日がくるんじゃないかと思っていた。

雷真は本当に滅茶苦茶だから。プリユ―姉妹を救うために、キングスフォートの名誉と権威を徹底的に失墜させた。貴族たちに恨まれてるのは、間違いない。

「ちよっとー ライコネンさまは歩いて学院を出た——って聞いたわよー それをあいづが殺したことにするなんて、無理があるわー」

シャルは髪を振り乱して怒った。

「そもそも日本は同盟国よ！ こんな……絶対こじれるわー」

「う。とにかく、夜々ちゃんを避難させよう？」

フレイが控えめに提言する。シャルもうなずきかけた——が。

「でも、移すって……どうやって？ それに……どこに？」

少女三人の視線が夜々に向く。夜々は結界の中で、死んだように眠っている。

損傷しているのは心臓だ。動かしていいものだろうか？

フレイは弱気な顔をしたが、すぐに気持ちを立て直し、すつくと立ち上がった。

「私、外で見張る。近付いてくる人がいたら、教えるから！」

ぽよんと胸を叩き、ラビにまたがって飛び出していく。

以前とはまるで違う。頼もしさすら感じる。

一方、シャルはシグムントを抱き上げ、不安げな顔をした。

「ねえ、指名手配ってどういうこと？ そんなの、警察の仕事よね？」

「おそらく、口実だ。この機に軍を駐屯させ、学院をかすめ取る腹づもりだろう。やぐざ者の世界では『因縁をつける』と言う」

「因縁……ただの言いがかりなら、ライシンは大丈夫ってことよね？」

「いや。言いがかりを言いがかりのままにしておくことはできん。大々的に発布した以上、彼らは雷真を『正当な』裁判にかけ、『正当に』処分しようとするだろう。もう、学院には戻れまい。最悪の場合、学園も抹消される」

「そんな——」

「確かに、雷真さまのお立場は、かなり厳しくなりました……」

背後から別の声が割り込む。いつの間にか、床に黒い水たまりができていた。

式神（間土里）だ。思った通り、そこから目輪が飛び出してきた。

「ヒノワ！ 朝からいなかっただね？ どこ行ってたの？ おともの二人は平気？ 体調はもういいの？ 今のどういうこと？」

「シャル、一度に訊きすぎだ」

シグムントがたしなめ、視線で目輪をうながす。

うながされて、目輪は言いにくそうに語り出した。

「英国から雷真さまを保護できるのは、魔術師協会くらいだと思うのですが……」

「そう……よね。それで、あいつはどこにいるわけ？」

「花柳斎先生の行方を追ひ、ロンドンに向かわれました。その途上、協会が列車を強襲し

まして、雷真さまは叛逆の王子と手を結ばれました」

日輪の報告は、あまりにも飛躍して聞こえた。

無数の疑問符を頭上に飛ばし、シャルはしきりに首を傾げた。

「え？ 強襲？ 協会が？ どうして？ あいつ、どうなったの？」

「わたくしの式も振り切られてしまいましたので、詳細はわかりません。ですが、つまりそのう、協会の方々とそのう、敵対関係ということに……」

「嘘よ！ あいつが黒太子と協力なんて——」

するはずがない、とは言えない。英雄的行動が目につくが、一方で雷真は手を汚すこともためらわない。シャルの夜会参加資格を力尽くで奪おうとしたこともある。

どちらの行動も、根っこは同じ。

雷真は自分が傷つくこと、疑められることを何とも思わない。世間の非難を浴びようと、それで目的が果たされるなら、平気で実行する。

そして今、雷真がエドマンドに味方したのなら、それはたぶん——

「……ほんつつつとに、バカな男。バカ世界のバカ創造主ね」

シャルの口調は、アンリも驚くくらい、優しいものだった。

こんな状況だと言うのに、笑っている。姉にはもう、雷真がなぜそんな行動に訴えたのか、わかっているらしい。

雷真は力をつけた。今の彼なら、金剛力にこだわらずとも、マグナスと戦う手段はある

だろう。それでも、彼は断固として、夜々をあきらめない。

宿敵エドマンドと組んでまで——世界を敵に回してまで、取り戻しに行くのだ。

シャルは夜々を振り向き、まぶしそうに目を細めた。

姉の気持ちが、アンリにもわかった。雷真と夜々、不器用な二人を愛しく思う気持ちと、ちよつとのやつかみ。日輪も同じ気持ちなのか、切なげに微笑んで、

「雷真さまったら、ひどいんですよ。わたくしと夜々さんは不倶敵天の宿敵——なのに、夜々さんを「護つてくれ」だなんて」

「あいつって、そういうやつよね。でも、そんなところが、私は好——」

「え!? シャルロットさま、今何と!?」

「ななな何でもないわよ!? とまかくっ!」

便利な言葉でごまかして、シャルは宣言した。

「そういうことなら、夜々は絶対譲らなくちゃ。まずはフレイの言う通り、移送先を決めましょう。どこか、隠しておけるところにかくまうの」

突然、夜々の胸がびくつと動いた。

全員の視線が夜々に集まる。夜々の肌から、かすかに魔力が漏出していた。

「今……動いたわよね? 目を覚ますんじゃない?」

シャルが結界に張りつき、様子をうかがう。その眼は期待に輝いている。アンリも両手を合わせ、天に祈るような気持ちで夜々を見つめた。

目が醒めてくれれば、命が助かるかも知れない。それどころか、かつて登場したという秘めた力が解放され、危機を救ってくれるかも……。

だが、その期待は、まったくの空振りだった。

ぶしゅつ、と血しぶきが飛び、胸の縫合が破れた。

夜々の体がかくかくと跳ねる。金属プレートが弾け飛び、床の上に転がった。

シグムントが血相を変え、結界の上に飛び移る。

「いかん……これは急変——重篤だ！」

「ど……どうすればいいのよっ？　そ、そうだわ、魔力を——」

「いけません！」

目輪がシャルの手を払い、魔力の流れを遮断する。一部、間に合わずに魔力が流れ——

夜々の傷が癒えるどころか、どぼつと血があふれた。

「金剛力が砕けたせいで、心臓に穴が空いています。穴を埋めずに圧力を加えれば、中身

が漏れるのは道理……！」

目輪が魔力を高め、念動で穴を塞ごうとする。だが、ボディの内側は夜々の領域内で、

念動の効きも悪い。ロキやグリゼルダほどの突出した念動技術がなければ……。

「くっ……どうにかしませんと……誰か、お医者さまを——」

「バーシヴァル先生に叱を投げられたのよっ？　もう誰もいないわ！」

声が裏返る。シャルはシグムントを抱きしめ、叫んだ。

「誰か、いないの!? どうして誰にもできないの!? 学院にはあんなに技師が——お医者さまだって、たくさんいるのに!」

「夜々は人間でもなく、人形でもないからだ」

おし殺した声で、シグムントがつぶやく。

「そのどちらでもなく、どちらでもある。製作者でなければ、誰にも——」

「だったら、私がやるよ!」

廊下から乙女が二人、駆け込んできた。

「イオネラ——エリアーデ先生!」

と、エヴァだ。イオネラは白衣が汚れるのもかまわず、夜々に密着した。魔具らしき片眼鏡を取り出して、夜々の体内を透視する。

「何これ……心臓が破けてる! それに、ほとんど処置してないじゃない!」

「仕方がなかったのだ。パーシヴァル教授にも、どうにもならんと言われてな」

シグムントが説明する。それから、慎重な声でたずねた。

「貴女は花柳斎女史の研究に詳しいと聞くが——対処法がわかるのか?」

「治すのは、無理かも……。だけど、雷真くんが戻るまで、もたせてみる!」

アンリは息をのんだ。常識的に考えれば、それは無謀な宣言だ。機巧医学の權威が投げ出すような案件に、十代の少女が挑もうというのか?

シグムントはあくまでも冷静に、イオネラの覚悟を問う。

「夜々はそのらの自動人形とは違う。記憶媒体や思考回路も、大脳相当部分に格納されているようだ。人体と同じなら、血流停止は脳死を意味する。手術に失敗すれば、データはすべて消失……。その前に、移し替えた方がよいのでは？」

「シグムントくんは、雷真くんがそれを望むと思う？」

質問で返される。シグムントはそれ以上、何も言わなかった。

「死なせるなんて冗談じゃないよ。夜々ちゃんの花柳齋先生の最高傑作なんだから。すぐにオペレーションを——設備はある？」

シャルに訊く。シャルは戸惑いながらも、記憶を掘り返した。

「ええと、二階に臨時の手術室が設えてある……らしいわ。でも、市街の病院の方が絶対いいわよ。清潔だし、器具もそろつてるはずだし」

「市街の病院でしたら、わたくしが転移で移送します！」

日輪が手をあげる。だが、イオネラは難しい顔でかぶりを振った。

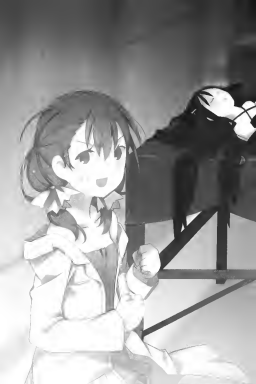
「転移と移動を同時には無理だよ。貴女はそのまま押さえてて。ここで——やる」

「……正気？　ここは今から戦場になるのよ？」

「いざとなれば、エヴァで食い止めるよ」

「……ここで絶対王権を使ったら、貴女は本当に、大英帝国の敵だわ」

何せ、エヴァの絶対王権は、半年前、この機巧都市を大混乱に陥れたのだ。王記車いる機巧師団に使つてしまえば、二度と娯楽の空気を吸わせてはもらえないだろう。



だが、イオネラは微笑^{こゝろ}んで、力強く言った。

「私が今こうしていられるのは、夜々^{やや}ちゃんのおかげだからね」

「――」

「エリアーデ教授の判断で緊急手続！ ただちに術式を始めます！」

高らかに宣言する。シャルは感じ入ったようにイオネラを見つめ――

そして、立ち上がった。

「いらつしやい、シグムント。正門前に向かうわよ」

「うむ」

「え？ シャルロットさま？ どちらへ……？」

不安げな目輪^{めわ}の間に、シャルは冷や汗を光らせながら、笑って応えた。

「夜々を護^{まも}ると言っただでしょう。――機巧師団、私が食い止めるわ」

3

廊下の窓から飛び降りて、シャルは正門の方へ向かう。

城壁が崩れ落ちたせいで、砂ぼこりがひどい。ひりひりするような緊張感が漂っていて、昨日以上に危険な臭^{くさ}いがした。

城壁は消えていたが、そこだけ壊し忘れたように、ゲートの枠組みが残っている。どこ

かの宗教園にあつたような、非現実的な光景だ。

「あれ、日本で言うところの〈トリイ〉みたいじゃない？」

強がつて軽口を叩く。シダムントは笑い出した。

「君はずいぶん、日本に詳しくなった」

「そろそんなことないわよっ？ このくらい一般教養よっ？」

「図書館に行くたび、写真集を借りていたな」

「べ、別におかしくないわ。ジャボニスムは流行したもの」

「君が生まれる前にな。——行ってみたいのか？」

「……そうね。いつか」

彼が生まれた国を、見てみたいと思っていた。

しだいに早足になり、やがて駆け足になって〈トリイ〉に急ぐ。

その途中、崩壊した図書館の陰から、四つの影が飛び出してきた。

機巧師団の隊員が既に入っていたのかと思つたが、そうではない。

騎士甲冑をまとい、槍を構えた自動人形が二つ。使い手は久しく見ていなかった顔で、

互いによく似ている。並べると左右対称、童顔の双子姉妹だ。

二人はシャルを見るなり、びくうっ、と飛び上がった。

「つきやー、シャルロット・ブリューー！」

「(君臨せし暴虐)——暴れん坊！ 上げ底女！」

「最後のは違——わないけど、何よ！ 死にたいの!」

思わず突っ込んでしまう。女子学生二人は完全に肝をつぶし、震え上がった。

「こ、怖いね!」「相変わらず野蛮だね!」

「貴女たち、ヴァイツゼッカー姉妹ね。まだ学院にいたの?」

「いたよ!」

泣き声のような返事が綺麗にシンクロする。

シャルは二人の腕、風紀委の腕章に目を留めた。

「あー、夜会を追い出されちゃったから、今は風紀委で点数稼ぎをしてるわけ?」

「すっごい上から言った!」「とことん嫌な女だね!」

二人はシャルに詰め寄り、きんきんと囁みつくように言った。

「わたしたち、つらい立場なんだよ!」「そうだよ! 暴竜のせいだよ!」

「じ、自分たちの責任でしょうが! 他人の自動人形を撃おうとするような、汚い連中に

かける慈悲なんてないわ!」

「暴竜だって時計塔を壊したくせに!」「おとがめなしなんて、ずるい!」

「ぐ!? だだだって、あれは仕方なくだもの! それに謝ったじゃない!」

「わたしたちだって仕方なかったもん!」「祖国の命令だったもん!」

「そ、それは、そうなの……かしら?」

二人がかりで責められて、シャルの自信がぐらついた。実際問題、シャルの行動は不問

に処されているし、この姉妹は従犯にすぎず、比較的無害だった……気がする。

そもそも、彼女たちが本物の悪党とは思えない。勉強はできるのかもしれないが、悪事が働けるほど賢いようには――

「あー 何か失礼なこと考えてる」「金髪だからってー 上げ底のくせにー」

「金髪も上げ底も関係ないでしょっ。ああもう、じゃあねー 私は急いでるのー」

すり抜けようとするシャルの進路を、そろって塞ぐ。二人は互いにうなずき合い、それまでの怯えが嘘のように、堂々とシャルに訊いた。

「貴女は白?」「それとも赤?」

シャルとシグムントは互いに顔を見合わせ――笑い出した。

「まだやってるの、それ……。貴女たちこそ、どっちなのよ?」

「えっ?」

「気をつけなさいよ。私と違う方だったら、ラスト・カノンで黒コゲよ」

「ひーっ」

怯えて逃げ去る。その後ろに、騎士甲冑（カウチウ）がついていく。かつてシャルが倒した人形だが、既に修復は完了しているようだ。

「――あ、ちよつと待ちなさい」

双子はびくつとして立ち止まり、こわごわ振り返った。

「な、なに?」

「元気でね」

微笑みかける。二人は「え」という口をして、立ち尽くした。

きびすを返し、再びゲートへ。視線の先にはもう、鋼鉄の大部隊が見えている。

シャルの肩に揺られながら、シグムントがくくつと笑った。

「ちよつと、何がおかしいのよ。全然、笑うところじゃないわよ？」

「エレインもオズワルドもイライザも、それはもう無茶な魔術師だった。エドガーはそうでもなかったが——やはり血は争えんな」

シャルは視線を落としたり。

本当は——足が震えている。

だが、立ち止まるつもりも、逃げるつもりもない。

「……あのね。私、『ここ』じゃないかと思つたの」

「ここ？」

「前にも話したわよね。私、すごく幸せだった。手に入らないと思つてたもの、たくさん手に入れたわ。友達とか、友達とか……友達とか——」

「友達ばかりだな」

「いい、いいでしょう！　だって、本当に……嬉しかったんだもの」

自然と口元がほころぶ。春先からこちらのドタバタを思い返すと、胸が温かくなる。

「これって、ライシンと夜々のおかげよね？」



「そうだな」

「なら、ちよつとくらい、二人の役に立ちたいじゃない？」

「同感だ」

だから、命を賭すところはここ——今、このときだ。

ゲート手前で足を止める。シャルは魔力を集中し、風の精霊を呼び寄せた。

風で竜巻を起こし、自分の体を舞い上げて、〈トリイ〉の上へ。

そこから、縦列で布陣した人形使いの一段が見える。

「ここは譲らないわ。絶対に——」

「——いや、せめて半分、譲ってもらうよ」

すいっと風を切って、男女が宙を飛んできた。執事然とした服装の男と、彼に抱えられた銀髪の乙女の組み合わせ。もちろん、どちらも知っている顔だ。

「アリス——」

アリスはシャルのとなりに降り立ち、からかうように言った。

「つくづく、頭の悪い女だね。正規軍相手に何をしでかそうって言うんだい？」

「何よ——馬鹿にしにきたの？」

「大技の〈タメ〉も作れないだろう。君、人じやさ」

「——」

言われた意味は、すぐにわかった。

アリスは学院の周囲をぐるりと見渡し、普段通りの意地悪な口調で言う。

「こんな目立つところに陣取って、いい的じゃないか。おまけに学院は全周七キロ。城壁を失った今、一人でカバーできるわけがない。考えたらわかるだろう？」

「文句ばかり言ってくれるわね。お得意の悪知恵でもあるの？」

「あるよ。君が標的になればいい」

シャルははっとした。なるほど、陽動か……。

「この際、もっと目立つしかないだろう。目障りな存在になれば、連中もまずは君を狙う。暴れるドラゴンを放置して、占領できるわけもないからね。連中はまだ戦術目標——ライシンと夜々の位置も把握していない様子だ」

「……ありがと、参考になったわ。ついでに生き残るアイディアも教えてくれる？」

アリスが口をつぐむ。シャルはその顔を横からのぞき込み、やり返した。

「何か考えがあるのよね？ そうなんでしょう？ 貴女、意地悪なものね？」

「そんな頼り方があるかい。ご期待に添えなくて悪いけど、答えは否だ」

ふてくされたようにそっぽを向き、くさくさした調子で言う。

「うちのダメ親父はまたしても敵の虜囚だよ。昨日の騒ぎで学院は戦力不足。学生は英国になびく方へ一致団結。挙げ句の果てに、自ら城壁を壊しちゃう始末だ。こんなの、どうしようもないだろう？ 切り札どころか、手札がないよ」

「じゃあ貴女、悪知恵もなしに、ここにきちゃったの？」

「そうなるね」

「……なら、貴女も馬鹿じゃない？」

「さすがはお嬢さま！ 敗れて反撃の糸口を与える懐の深さ、感服いたします！」

「OK、シン。後で懐をかつさばいて、深底鍋みたいにしてやるからね」

アリスは肩をすくめ、どこか投げやりに答えた。

「悪党には悪党の仁義があるのさ。借りは返さなくちゃならない」

「奇遇ね。貴族にも貴族の流儀があるの。受けた恩には報いるべきだわ」

視線がからむ。二人は噴き出し、互いの肩を小突き合った。

ひとしきり笑い合い――並び立つ。

「さてくれて、ありがとう。貴女のこと、誇りに思うわ」

「ブリュウの誇りも安いもんだね。だけど――光栄だ」

師団が号砲を撃ち、前列から進軍が始まった。正面の部隊もこちらに向かってくる。

シャルは右手を伸ばし、シグムントを彼らに向けた。

「さあシグムント。派手に暴れるわよ！」

「心得た」

腕を通して魔力を渡す。シグムントの体から濃密な闇が噴き出し、傾いた日差しを吸い上げる。光と滅元素が反応し、ほとんど質量に変換された。

全長三十メートルを超す竜が、四本の足で大地を踏みしめる。

咆哮をあげ、魔力を収束させる。銅色のうろこがきらめいて――

「ラスターカノン」

竜のあざとが大きく開き、まばゆい閃光が夕闇を裂いた。

4

遠ざかるアスラの背中を眺めながら、ロキは虚脱感を覚えていた。自分を支配するこの痛み、失望の正体が理解できない。

ほんの二四時間前、ロキはアスラに命を救われている。あのとき握った手の熱は、互いにまだ忘れていない。そのはずだ。それなのに――

(……いや、あきらめるな)

後悔するのは、もうたくさんだ。

後悔したくないのなら、止めるしかない。

教授を肅清するなど、馬鹿げた世迷言を言う阿呆は、殴ってでも止めてやる――だが今、ロキの前には、黒刀を持つ少女ヘイゼルが立ちふさがっている。

ヘイゼルはロキのとなり、ケルビムに視線を移した。

「その装甲、ルシファアの流用……」

「――なぜ、その名を知っている？」

ルシアアーはケルビムの兄弟機。義父ブロンソンが自分専用に進造した機体だ。ともに戦った雷真はともかく、一般の学生が知っているはずはない。

「……まあ、どうでもいいな。どけ、オレは女相手でも容赦はしない」

「容赦しないのは私の方」

ヘイゼルは黒刀を構え、詩吟のようにささやいた。

「父なる王の声を聞け——剣天使は主を狙う」

「I'm ready」

ケルビムが返事をする。驚くロキの鼻先に、ケルビムのブレードが降ってきた。

熱風操作をのせた重い一撃。さわどくかわし、魔力を送って制御しようとする。だが、

ケルビムは言うことをきかず、さらに踏み込んできた。

完全に制御不能。コントロールを奪われた！

ロキはさらに魔力を高め、支配權を奪い返そうとする。それでケルビムは止まったが、

ヘイゼルに後ろを取られていた。

背後から鋭い突きが繰り出される。切っ先がロキの頸動脈を傷つける——前に、威力を

しほった（音の弾丸）が飛んできて、黒刀を弾いた。

一歩間違えばロキに当たっていただろうが、彼女はもう、そんなヘマをしない。

「う、ロキー 平気？」

オオカミ夫の背に乗って、姉のフレイが駆けってくる。ガラム夫の群れも一緒だ。

「姉貴……すまない。助かった」

「うー」

姉は有頂天になった。対照的に、ロキは不機嫌になる。たやすく背後を取られたばかりか、護るべき姉に命を救われるとは……。

フレイはヘイゼルの面相、とりわけ髪の色を見て、声を潜めた。

「う、この子……？」

「ああ。あの顔、ホームにいたか？」

「わからない。けど……きつと、私たちの（きょうだい）」

フレイには確信があるようだ。

だとしたら、〈ヘイムダル〉がコードネームか。北欧神話になぞらえたコードは、長期の生存が見込まれた優秀な個体に与えられる。

だが、顔を知らない。別の工房に置かれていた個体が……？

「おまえのその髪、その瞳、生まれつきのものか？」

ヘイゼルは無視して、ちやきり、と刀の柄を握り直した。

「ねえ剣帝^{けんてい}。貴方^{あなた}、女でも容赦しないと云ったけど」

「それがどうした」

「容赦する女も、いるでしょう？」

直観的に危険を察する。これはまずい！

「父なる王の声を聞け——大どもは剣帝を喰らう！」

呪文めいた言葉と同時に、強烈な魔力が黒刀から飛んだ。

（あの黒刀、魔術回路を内蔵している……！）

わかってても、どうしようもない。大たちの眼の色が変わり、うなり声をあげた。当然、殺気はロキに向けられている。

がうがうとやかましく、大たちが囁みついてくる。ロキはかわし、あるいは念動で阻み、蹴飛ばして威嚇しながら、ガルムの群れをいなした。

「だめー みんなー めっー」

姉がガルムを叱る。大たちの攻撃意志がわずかにゆるんだ——が、そのときにはもう、先ほどと同じように、ヘイゼルの刃がロキに迫っていた。

地面に身を投げてかわす。ロキの頭上をかすめた刃は、離れた樹木を切断した。

（魔剣……！）

研ぎ澄まされた念動の刃。学生レベルの技ではなく、ロキですら普段は満足に扱えない。学院であれを連発しているのは、グリゼルダぐらいのものだ。

ロキが基礎をかじっているのは、念動の達人——養父の指導によるものだ。

「……あの男の手ほどきか。どこまでも腐った野郎だ！」

カッ、とヘイゼルの目に激情が閃いた。

おや、と思つて、ロキは敢えて挑発した。

「タズ中のタズだな。オレや姉貴を焚きつける一方、おまえという保険もかけていたのか。殺しや誘拐に加えて、詐欺まで働いてたってわけだ。タズの万国博覧会——」

「黙れ！」

黒刀で首を刈りにくる。ロキはケルビムを剣に変え、自ら柄を握って、真正面から受けて立った。敢えて鋼鐵り合いに持ち込み、相手の動きを封じる。

ヘイゼルは憎悪に満ちた瞳で、至近距離からロキをにらんだ。

「ロキ、おまえは……お父さまを殺したな……！」

「——死んだのか？」

「ご存命だ！ けれど、もう執行まで時間がない……おまえが殺したも同然……！」

「まだ生きているのか。それは都合がいい。この手で始末をつけたいと思っていた」

さらに挑発すると、ヘイゼルは激怒して、がむしゃらに突っ込んできた。

こちらの剣を跳ね上げ、小手を落とすにくる。ロキは大剣を盾にして受け、反撃の短剣を飛ばした。ヘイゼルは短剣を左右に払い、瞬間的に魔力を練る。

「父なる王の声を聞け——」

「姉貴！」

「うん！」

敵の言葉——魔術のトリガーが作動する前に、周辺から音が消えた。

音の干渉で作る無音領域。魔術を阻害され、ヘイゼルの顔が弛張った。

すべて、計算通り。ガルフ夫はとつくにヘイゼルを包囲し、いつでもこれができるよう、準備を進めていたのだ。

（頭に血がのぼったな。ガルフの動きを見逃したのが敗因だ）

ロキはケルビムを振りかぶり、勝負を決めにいく。

だが、ここでヘイゼルが予想外の行動に出た。

ケルビムを黒刀で流し、まさかの頭突きを繰り出した。ロキの眼の奥で火花が散る。その隙に、ヘイゼルはロキの頭を抱え、ひたいにひたいを押しつけた。

「おまえは姉を斬り捨てろ——」

（骨伝導……!?）

空気を媒介とせず、直接伝えてきた！

魔術が精神を侵食する。ロキは抗いがたい欲望に支配された。

命令された通り、姉に剣を向ける。フレイの身体能力は壊滅的——かわせるはずがない。

ソフィアを買った瞬間の鈍い手ごたえが甦り、ロキは一瞬、我を忘れた。

（姉貴——かわしてくれ——）

だが、ロキが思っている以上に、フレイは強くなっていた。

ラビが音の砲弾を放ち、横から剣を弾いてくれる。

ロキは安堵したが——その背後を、みたび、ヘイゼルが取っていた。

きやうんつ、と悲痛な叫びを上げて、コリー犬が吹っ飛んだ。

「リビエラっ!?」

フレイの悲鳴とともに無音領域が消える。おびただしい血をまいて、コリーが大地を転がった。肉片とも装甲ともつかないものが千切れ飛び、がさつと茂みに落下する。

「まず、一匹」

倒れ伏す犬を見て、ハイゼルは満足げにつぶやいた。

一方のロキは立ち尽くした。

ロキをかばって、姉の（家族）が一頭、やられた。

激しい動悸でめまいがする。大量の汗が出て、まるで通り雨に遭ったようだ。コリーはもう立ち上がらない。非情を旨とするロキも、この展開には膝が震えた。

（オレは……取り返しのつかない失敗を……した……!）

しかし――

「ロキ、行つて」

「な……んだと?」

取り乱していると思った。泣き喚いて、ロキを責めると思った。

だが、違った。姉は気丈に敵を見据え、

「この子の相手は、私がする。ロキはアスラを追つて」

「……バカを言うな。戦力を分散させるなど、下策だ」

「二人でいたら、同士討ちになる」

——その通りだ。現に今、ロキが操られたばかりに、ガラム大が斬られた。

「この子は、私がやる。私たちの方が、相性がいいから」

それも、その通りだ。音を操るガラム大ならば、ハイゼルの弱点を突ける。

しかし。

「う、行つて。大丈夫。作戦、あるから」

「……では、その作戦とやらを二人でやろう。その方が確実だ」

「だめ。ロキがいると、使えない」

「……何をやる気なんだ」

「それを言ったら、相手にもバレちゃうでしょ？」

にこ、と笑う。

——弟を安心させようとする、「お姉ちゃん」の顔だ。

「大丈夫だから。早く終わらせて、みんなでまた、夜会頑張ろ？」

かつてのロキならば、絶対に姉を一人にはしなかっただろう。

姉さえ無事なら、それで十分だった。姉が、ロキのすべてだった。だが……。

荒れ果てた学院が、折れたアンリの足が、傷つき倒れた夜々が、ここにはいない雷真が

——ロキに別の結論を与える。



アスラを止めなければならぬ。一刻も早く。圖に合ううちに。

「……わかった。無茶な真似だけは……しないでくれ」

「う。約束」

ロキは大剣を宙に浮かせ、その上に飛び乗った。

熱風操作の噴射を使い、ヘイゼルへと突進する。もちろんヘイゼルはかわす。そのままヘイゼルをやり過ぎ、ロキはアスラの後を追った。

姉の無事を祈りながら。姉の言う未来があると、信じながら――

5

巨竜の暴れっぷりは、歴戦の軍人であっても、慄然とするものがあつた。

先行した小隊がひとつ、尾のひと振りであつた。飛べられる。

迂回しようとした部隊には、柱のごとき光の槍が降りそそいだ。

小銃の弾では竜のうろこに傷もつけない。巨大なボディは堅固な装甲に等しく、操者を

覆る壁として機能していた。と同時に、兵を威圧する効果もある。何せ、ブリュウの武勇、

魔剣の名声は英国全土に轟いているのだ。

竜は身軽に宙を飛び、突出する部隊を牽制しては、光の大砲をぶつ放した。

道路が紙め融かされ、川のような溝が走る。前線から反撃のファイアボールが飛んだが、

キラキラと輝く気流に阻まれ、消散してしまった。

ラスト・シエル——金薔薇の孫、オルガが得意とした防衛技術。

その輝きに、兵士たちも理解する。魔竜の性能のみの脅威なのではない。

魔竜の性能を引き出せるだけの、使い手の技量こそが脅威——

「ラスト・セイバー・ヘレディアント——」

魔竜からのびた光が、空中の一点でバツと広がる。それは途中で枝分かれを繰り返して、系統樹のように複雑化して、多数の標的を一度に射抜いた。

小銃や砲、自動人形の手足をやられ、新兵に動揺が広がった。

その様子を、師団長グローリアが、水晶玉越しに眺めていた。

「ふふ……見事なこと」

いい感覚だ。シャルロット・プリューには天賦の才がある。

本職の軍人に比べれば、知識も経験も不足している。だが、本人の魔力や人形の性能は一般兵に勝るところ。その強みを生かし、上手く立ち回っている。

「さすがはイライザの孫——よい魔術師です」

「恐れながら、妃殿下に申し上げます」

幕僚の一人が進み出て、グローリアにこうべを垂れた。

「殺傷許可をいただきたい。あれは、邪魔に過ぎます」

「なりません」

もらえるものと思つていたか、幕僚は面食らった顔をした。

ダローリアは水晶玉を見つめたまま、そつけなく告げる。

「この一戦には世間の耳目が集まっています。たかが学生一人を相手に、大人が数を頼んで殺しにかかるなど、失笑を買います」

「ですが、たかが学生一人に苦戦しているのも、外聞がよろしくないかと……」

「何か妙案がありますか？」

「（水槽）が動きます。城壁破壊に備えておりましたので」

「……きたるべき日の切り札ですよ？ 賢者たちの目が気になります。せつかくオーエンの子が上手くやつてくれたものを」

「ですが、あれならば、魔剣を生け捕りにできます」

ダローリアは髪をかき上げ、思案した。

水晶玉の中では、魔竜が大暴れしている。かつて（戦地に君臨せし暴虐）とまで謳われた圧倒的な力——あれは英國の財産だ。潰してしまいたくはない。

水晶玉の映像を切り替え、上空から市街を俯瞰する。

「……許可します。隊列を入れ替え、（水槽運搬係）を前へ」

「了解。遊撃中隊はレイをエスコート——特務分隊、魔竜を鹵獲せよ！」

幕僚の指示で信号弾が飛び、隊列変更の命令が伝わった。ただちに前線部隊が下がり、

後援部隊に道を譲る。そこを、突撃に近い速度で直進してくる部隊があった。

遊撃中隊。全員が黒一色の特別な戦闘服を身につけている。

ほかの隊とは動きが違ふ。魔術の腕のみならず、十分な肉体的鍛錬を積んでいる。

「魔障霧散布！ スモークを焚け！」

遊撃中隊が発煙筒に点火する。海からの風が空気をかき混ぜ、煙を広めた。視界が急速に悪くなり、夕闇の濃さが増す。

月のない深夜のような暗さ。その闇の中、線路上の貨物列車がそろりと動く。貨車にかぶせられた覆い（かぶせ）が解かれ、巨大な人影が起き上がった。

シグムントと戦場を飛び回りながら、シャルは不思議な感情に包まれていた。

初夏の頃、シャルはたった十人の学生相手にすら、後れを取った。

単純な魔力のみの比較なら、あの頃とさして変わっていない。それなのに、数十、数百の魔術師を相手に、大立ち回りを演じている。

あのとき、シャルは自分がひとりぼっちだと思っていた。

だが、今はロツテがいて、精霊がいて、背中を預けられる友がいる。

魔力がわき上がってくる。何としても、夜々の治療が終わるまで時間を稼ぐ。そうすれば、何かが変わる——その希望がある——

決意を秘めて敵をにらむ。その瞳が、戦場の異変をとらえた。

正門から延びるストリートが、黒い煙で塗りつぶされていく。

「あれは何？ 煙幕？」

「……ただの煙幕ではないな。わずかだが、魔力の減衰を感じる」

シグムントが慎重な声で言う。確かに、精霊との知覚共有が乱れ、感覚が狂い始めた。空を飛んでいては危険だ。シャルは正門前に降り立ち、霧に目を凝らした。

「監視が効かないわ。向こうが見通せない……。撤退してくれるのかしら？」

「いや——くる！」

眼前の霧を割り、巨体が突っ込んできた。

「ゴーレム？ 大きいっ！」

学院のヘイムガーダーは大型でも三メートル程度。だが、これはその三倍近くある。

金属製の機械人形だ。前傾姿勢で、上半身が大きく、密林の大型類人猿を思わせる体軀。装甲は丸みを帯び、発達した筋肉のように見えた。

あの腕の太さ——接近されては危険だと、シャルの本能が警告した。

「ラスターカノン！」

反射的に撃つ。だが、巨人はかわそうともしなかった。

装甲が青白く輝き、光の大砲を受け止める。

えっ、と思ったときには、もう肉迫されていた。

強烈な体当たり。衝撃でシャルが振り落とされそうになる。

地響きを響かせ、後続が現れる。三体がかりのタックルで、シグムントの片足が浮いた。こちらはあちらの二倍以上の体格なのに、力負けする――

「何この力……!? それに、この国体で、どうしてこんな速度っ」

硝煙と排気ガスが臭って、馬鹿力の正体を悟った。内燃機関を搭載している。

魔力と動力の複合。ついでに火薬の爆発で、怪力を発揮するようだ。

「魔術師を捜して! 魔力の供給を断てば、勝機はあるわ!」

発見する前に、こぶしがくる。とっさにシグムントを後退させ、距離を取る。かわしたはずなのに、空気が裂けて、シグムントのボディが割れた。

鮮血とともに閃光が飛ぶ――増やした質量が逃げていく――

三体は巨体に見合わぬ運動性能を発揮して、シグムントに肉弾戦を仕掛けてきた。次々と繰り出されるこぶしで、たちまちシグムントが血だるまになる。

「ら、ラスターシエル!」

光の粒子をまき、甲殻を形成する。

接近を阻む意図だ。この領域に侵入すれば、消滅する――

はずだったが、巨人は装甲をきらめかせながら、シエルをかきわけ、じわじわと距離を詰めてきた。致命傷を与えるところか、装甲に傷もつけられない――

「早く捜して! 魔術師は――使い手はどこ!?」

「捜しても無駄だよ。連中、外から操ってるわけじゃない」

背後、崩れたゲートの上でアリスが言った。

「これは人形と言うより甲冑——ヴエイロンのスレイブニルと同じ設計思想だ」

シャルも魔力の流れを見極める。確かに、どこからも魔力が飛んでいない。

有人兵器か。アリスは舌打ちした。

「内蔵魔術は（魔防）だね。あんな原始的な魔術回路……だけど、こうして現物を見せられると、すべてが理に適ってる。こんなやり方があったのか……」

「一人で納得しないで—— どういうことよっ？」

「頭を使いなよ。魔防は（強度）そのものだ。それを回路にして、ヘボな魔術師でも使えるようにしたってことはさ——」

第一に、強度を高められる。敵の魔術攻撃にも、自分の超重量にも耐えられる。

積載量が飛躍的に増える。すると、巨大な発動機を搭載できる。本体の重量はそのまま鉄拳や体当たりの威力につながっている。

そうして生まれるものは、はたして何か？

世界大戦という言葉が脳裏をよぎり、シャルの心が凍りついた。

魔術師であっても銃弾が当たれば死ぬ……ゆえに、近代の戦場では、塹壕やバリケードに隠れながらの撃ち合いになる。魔術師同士の戦いもまた、そうした持久戦になりがちだ。その膠着状況を打破できる兵器こそ、時代が本当に求めているもの。

塹壕や鉄条網をものともしない走破性、小火器や通常魔術で破壊されない防御力、敵の

自動人形を叩きのめせる攻撃性能——そのすべてを兼ね備えた武器。

……こんなものができたからと言って、自分たち学生に、ただちに關係することは無い。夜会に持ち出すものがいたとしても、それはまだずっと先の話だろう。

だが、アリスの顔には、破滅的な未来を憂うような、深い翳りが落ちていた。

「ひと握りの大魔術師——魔王がちややほやされる時代は、終わったのかも知れないね」
そう、かつて自動人形が魔術の歴史を塗り替えたように——

以後の戦史を塗り替えるかもしれない兵器が、目の前にあった。

巨人三体の突撃で、魔竜の優位が崩れた。

地上での格闘戦では明らかに巨人が有利だ。たまらず飛躍して逃げようとしたところに、スモークにまぎれて遊撃中隊が仕掛けた。

大型自動人形の口から、鋼線つきの鉄杭が射出される。

無数の魔抗ワイヤーに絡め取られ、魔竜は浮力を失った。

落下地点では既に巨人が回り込んでいる。実に手際がいい。これで勝負が決まった……
と思われたとき、黒服の男がすべり込んできて、大型自動人形を粉砕した。

ドイツの機巧兵士だ。段違いの運動性能を発揮して、つむじ風のごとく暴れ回る。

——強い。魔剣のような派手さはないが、堅固で俊敏、かつ怪力だ。

遊撃中隊に優先配備された、高コストの人形が次々とスタラップにされる。経理担当者

が見たら辛倒しそうな光景だった。

（ふふ……手こずらせる。ですが、ジャガーノートを選けるには至りません）

ワイヤーの大半を断ち切ったところで、巨人の鉄拳が男にめり込む。

男は石畳を叩き割りながら、二十メートルも吹っ飛ばされた。左肩を押さえ、うめき声をあげる。左肩が無惨に砕け、腕が死んでいた。

（欲めましたね。あるいは過信しましたか）

完全統制振動は鉄壁だが、魔防の本質は「魔術を防ぐ」もの。接触すれば干渉を受け、魔術の効きが悪くなる。そこを、超重量の鉄拳で打たれれば、当然あななる。

機巧兵士の動きが止まり、邪魔する者がいなくなった。今度こそ、決着――

「殿下！ 天をご覧ください！」

暮僚が天空を示す。厚い霧の向こう、夕暮れの空に、光の帯が広がっていた。

天の川……ではない。

滅元素の消滅光だ。大量の粒子が都市上空を包み込むように回転している。

上手い――こちらが焚いたスモークに隠し、天に滅元素を蓄えていた！

魔竜が地を蹴り、光のリングをくぐる。まるでサーカスの火の輪くぐり。輪のあちら側に陣取って、巨大なあごを開いた。

光線がいくつも輪を横切り、幾何学模様を描く。

流星群騒動の日、遠くロンドンからも輝きが観測できた――あの大技。

その威力はメテオストライクすら上回る。現時点で、英国最大の攻撃魔術だろう。

ドロリアはその美しさにため息をついた。

「惜しい……。あれが量産できれば、世界帝国も夢ではないのに」

魔剣の竜だけならば、いずれ複製できる可能性はある。だが、この技を繰り出せるほど優れた魔術師をそろえるのは容易ではない。

（Dワークスの思想はよいところまでいつていたのですが……誠に残念です）

さすがにあれを浴びては、魔防の巨人も無事では済まない。操者が超一流の魔術師ならともかく、今あれを運用しているのは魔術技官、つまり技師だ。

「妃殿下、いかがされる!?」「どうか、退避命令を——」

幕僚たちが口々に言った。怯懦ではなく、冷静な判断だ。

しかし、ドロリアは無慈悲とも言える命令を下した。

「ジャガーノートを前列に。ほかは、動くな」

「——は？ しかし、それでは」

「動くな。撃てはしません」

悠然と微笑む。幕僚の一人が息をのみ——

「は、防衛結界を展開しろ——射線上から退つ」

言い終わる前に、白目をむいて気絶する。

ドロリアは幅広の剣（ストラトキヤスター）を下ろし、冷ややかに言った。

「動くなど命じたはずです。このグロリア、社交界では四つの形容で知られています。若く、麗しく、情熱的で、何より嚴格である——とね」

長い指をくねらせて、挑発的に魔竜を手招く。

「撃つてみなさい、ブリュウの娘よ。そなたに撃てるものならば……ね」

グロリアは射線の中央、竜と正対する位置にいる。自分の命を危険にさらしているのに、まるで動じていない。愉しんでいるようですらある。対照的に、幕僚たちは顔面蒼白。じつとりと嫌な汗をかき、運命のときを待つ。

魔竜は、まだ動かない。

バチバチッ、と激しく粒子が弾ける。

精霊があちこちで消滅し、オゾンのような臭氣が漂った。

シャルの目の前に、巨大な滅元素の魔法陣ができている。

金髪が汗で頬に張りつき、ひどく不快だ。呼吸もいつしか浅くなり、強烈な眠氣に襲われていた。そろそろ魔力が限界……なのだが、敵は動かない。

「何で下がらないのよ……！ バカなの？ バカの集まりなの？ 死にたいの!？」

いら立って叫ぶ。眼下の機巧師団は憎たらしいくらい静粛で、攻撃もせず、撤退もせず、防衛する素振りも見せない。撃てるものなら撃つてみる、という態度だ。

シャルの子想では、少なくとも、散開してくれるはずだった。

戦列が崩れれば、立て直しに時間がかかる。敵前逃亡する者が出れば万々歳。しかし、敵は巨人をわずかに下げただけ。そこは敵の最前列で、巨人を狙えば、背後の大部隊をも巻き込める、あまりに絶好の標的だった。

シャルの頭の中に、自分ではない誰かの声が響いた。

「もう無理！ もう、保持できない……っ！」

守護精霊ロツテの声だ。滅元素の魔法陣は（鏡）の精霊、魔法生物のリフレクターで形成されている。大量の精霊を支配するには、当然、かなりの魔力が必要になる。

「もう……頑張らなくて……いいわよね……っ！」

「だめー あきらめないでー！」

「無理よ！ 死んじゃうー！」

「泣きごと言わないで！ 守護精霊が死ぬわけじゃないじゃない！」

「死ぬわよ！ 貴女が死ぬばー！」

——自分のことはいい。だが、精霊の支配が解かれるのは困る。

リフレクターの輪が一部でも決壊すれば、滅元素はその方向に雪崩をうつ。市街のどの方角を消し飛ばしてしまうか、わからない。

「シャルロツト！ もう当ててしまいなよ！」

シダムの足のところで、アリスが叫んだ。

眩暈魔術（虚像）を使い、自分の分身をまいて逃げ回っている。シンも肩を押さえなが

ら、黒ずくめの部隊と格闘を繰り広げていた。

「正面の大隊を消し飛ばせ！ 巨人もろとも、司令官を巻き込める！」

「絶対、嫌！」

シャルは人間も人形も殺さない。まして相手は同国人、罪のない軍人だ。

しかし、迷いも生じていた。撃ってしまった方がいいのでは？

シャルの戦闘は、大した時間稼ぎになっていない。自分では長く感じたが、せいぜいが一〇分——希望的観測でも、二〇分弱といったところ。

それでも、イオネラならば、夜々をどうにかしてくれたのではないか。動かせる程度に修復できていれば、自輪の転移で逃げ延びてくれないか。

撃てば、二千は減らせるだろう。だが、確実に民家も巻き込む。

撃つか。撃たないか。当てるか。外すか。

「シャル……もう……らめっ……わらひ……限、界……っ」

いっばいいいっばいな声が脳裏に響く。シャルは歯を食いしばり——決断した。

「仰角！ 上げて！」

剛に合わない。わずかに数度、魔法陣が上向いたところで、ロツテが消える。

「シグムントっ」

悲鳴同然の叫び。シグムントはシャルの想いを汲み、斜め上にラスターカノンを発射した。魔法陣中の元素が誘導され、その方向へと突き進む。

視界を埋め尽くす光の奔流。射線上の空気が消え、真空が生じる。吹き込む突風が民家の窓を破り、強烈なダウンバーストが機巧師団を叩き伏せた。瘴気のカーテンは一掃され、路上で暴風が荒れ狂い、大通りがぐちゃぐちゃに攪拌される。

やがて突風が収まったとき、そこには台風通過後のような光景があった。

陶器の破片や新聞紙など、大量のゴミが散乱している。かすめただけのアパートの屋根は、焼きゴテを当てたように溶けていた。

ひとまず、市街を破壊させてはいない。

安堵して、気が抜けた途端、視界がブラックアウトした。

魔力切れた。貧血を起こし、引っくり返る。――高さ数十メートルの空中で。

「シン！ 彼女を！」

助けてくれようとしたのだろう。だが、シンが飛ぶより早く、巨人のこぶしがハンマーのように振り下ろされた。シンは脳天から打ちのめされ、アリスの眼前に落下する。間欠泉のように瓦礫が飛び、アリスの腹を直撃した。

空中ではシグムントが羽ばたき、シャルを追う。だが、魔抗ワイヤーに阻まれて、伸ばした首が届かない。

巨竜は大地に引きずり落とされ、大量の砂塵が舞い上がった。

金髪をきらめかせながら、シャルも砂塵の中へ消えていった。



Chapter 6 あなたが愛した人形 #1

1

雷真（らいまこと）を乗せた列車が、ロンドン近郊に差し掛かった。

列車は速度を落とすことなく、ダイヤを乱して暴走中。鉄道会社はこれを止めるところか、むしろ積極的に線路を開けて、暴走運転を助けていた。

仕方がない。何せ、乗客数百名が人質同然で中にいる。

バリケードを築いたところで、ブレーキをかける保証はない。空前の大事故に発展する恐れがある。それをやりかねない男が、この便を支配しているのだ。

「もう後戻りはできないぜ？」

雷真の胸中を見透かしたように、エドマンドが笑った。

そこは先ほどと同じ車両。今や最後尾となった、壁の破れたコンパートメント。

エドマンドは座席に寝そべり、くつろいだ姿勢で後方を眺めている。雷真は通路の壁にもたれて立ち、小紫はそのとなりでしゃがみ込んでいた。

追手がいつくるかと思うと、気が気ではない。今や雷真はエドマンドの一味だ。



この流れ——何もかも、この男の思い通りじゃないか。

「そう悲観するな。花柳齋にはちゃんと会わせてやるよ」

「……………どういう裏がある」

「俺は公正な男だ。特に、おまえに対しては誠実でありたいと思ってる」

「けっ、反吐が出るぜ」

「陛下に向かって何たる暴言っ！ 陛下、この生ゴミを埋める許可をくださいー」

ばーんっ、とドアを開け放ち、前方のドアから一人の乙女が現れた。

乙女の姿を見た途端、雷真と小紫はぎよつとなった。

アーモンドを彫らませたような、つぶらな眼の形。ちよんとついた小鼻。まつ毛の長さから反り具合、背格好や頭身に至るまで——あまりにも似すぎている。

花柳齋の真作、雪月花に――

(こいつ……離富士……!?)

衣装は着物ではなく、黒っぽい戦闘服だ。腹まわりに布地がなく、へそが丸見え。露出度以外は、以前シヤルが使ったものによく似ている。

雷真に向かってくる離富士に、エドマンドは自分のブーツを投げつけた。

「黙ってろ貴。おまえを先に埋めてやろうか？」

「陛下のブーツ……かぐわしい……っ！」

ブーツを抱えて恍惚とする。エドマンドはその頭を殴り、ブーツを奪い返した。

「馬鹿が、何しにきやがった。(ヘレガシー) 連中と機関部を見張ってろ」

既倒されてもへこたれない。麗富士は水筒を取り出し、うやうやしく差し出した。

「温かい紅茶をお持ちしました。お飲みください」

「……おう」

「ご所望とあらば、ご一緒に人肌のぬくもりもご提供いたします」

ぬぎっ、と上半身をはだける。雷真と小紫は仰天したが、エドマンドは慣れた様子で、

足で彼女を遠ざけた。

「あっち行つてろ七號。やっぱおまえ、うぜえ」

「うざ……っ!?」がーん！

「七號……だつて？」

思わず口を挟んでしまう。エドマンドはにやりとした。

「何だ、顔見知りか？」

「いいえ、陛下。このような廃棄物、私のレジストリには塵ひとつも存在しません」

麗富士がきつぱりと否定する。雷真は深く突っ込まず、別のことを訊いた。

「……何でそいつがここにいる。どうやって、そいつを手に入れた」

「黙れ下郎！ 陛下になれなれない口をきくな！」

麗富士が雷真をにらむ。感情が消え、本来の機械じみた冷徹さがのぞいた。

「私は陛下の近衛だ。大中小、シモのお世話が我が任務——」

「すっこめ馬鹿」

エドマンドの隙りが飛ぶ。魔富士は車外に放り出され、涙目でよじ登ってきた。

「お許しください陛下——願望がダダ漏れただけです」

「何だか……夜々睡さまみたい……」

小紫がひそひそとささやく。エドマンドは耳ざとく聞きつけ、肩をすくめた。

俺の趣味じゃないぜ。金薔薇の婆さまが、思考にいらん変更を加えたんだ」

金薔薇。昨日ロキが倒したという魔女か。

「金薔薇ってのは……生きてるのか？」

「ああ、花柳斎と一緒にいるよ」

「——」

「昨日の戦いは傑作だったな。名を上げたのはおまえや（剣帝）で、魔王と魔女は半殺し

で撤退——二人とも大層ご立腹だね。ご機嫌取りする俺の身にもなってくれよ」

「……てめえがいつ、誰のご機嫌を取ったんだよ」

神経を逆撫でする方が得意だろう。

まとわりつく魔富士をあしらいながら、エドマンドは水筒の茶を飲んだ。

「だが、昨日の喜劇も無駄じゃなかった。おかげで、駒が補充できている」

「駒……？」

「七號とイカロス、おまえと俺、手下六名に伝説級六体が持ち駒だ。敵は第三機巧師団と

陸軍三万。軽くはねえが、やり方次第と俺は見た。逆賊どもの親玉をぶつ殺して、協会とは縁切り、大英帝国は世界に覇を唱える」

妄想じみた大言壮語だが、少なくとも（官殿突入）までは成功してもらわないと困る。硝子（しょう子）を連れ戻せなければ、雷真（らいまこと）は夜々（よや）を救えない。

しかし、エドマンドの勝利は、英國の大転換を意味している。

（こいつを……殺した方がいいのか？）

世界大戦の引き金となる男が、すぐ目の前で茶をすすっているのだ。イカロスは機関車の方（かた）にいて、ここには薩富士（さふじ）しかない。今なら……殺れる、かもしれない。

（こいつの首を使って、協会と取引すれば……？）

エドマンドの首を協会に差し出して、硝子の罪を見逃してくれと願う出る。

——いや、協会がどう出るか読めない。硝子がどう出るかも、わからない。

硝子が自らの意志で結社に参加したのなら、協会の出方に関係なく、硝子は戻らない。

それではやはり、夜々は死ぬ。明日の夜明けを持たずに……。

世界大戦は阻まねばならない。だが、相棒は死なせたたくない。

身悶（みもだ）えしそうな板（いた）ばさみ。煩悶（わんもん）で人が死ぬなら、ここで死んでもおかしくない。

すっかり暗くなった空を見て、エドマンドがつぶやいた。

「そろそろ、見えてくるぜ」

あごをしゃくって進行方向を示す。雷真は通路側の破れ目から外を眺めた。かなり先で

耕作地が切れ、その先に市街地が広がっている。

夜に浮かび上がる無数の明かり。発展した近郊都市群の灯だ。

「あの街並みを二つ越えたところが首都ロンドン。俺の実家だよ」

「……バッキンガムには正規軍が駐留してゐんだろ。どうやって取り戻す？」

「正門から突撃、強攻して本丸を陥とす」

——雷真が言うのも何だが、正気を疑うような言葉だった。

「叛逆の首謀者を殺す。そうすりゃ、俺に味方する奴も出てくる。議会の承認を取りつけちまえば、後はどうとでもなる」

実に大雑把だが、簡潔な構想だ。

彼の大局観では、それで形勢をまとめられる……らしい。ただの無謀か。精緻な計算が潜んでいるのか。とにかく、エドマンドには相当の自信があるようだ。

「黙って俺についてこい。そうするのが利口だ。なぜなら、俺が正しいから」

笑って告げる。それから、空になった水筒を驢富士に投げ、立ち上がった。

「七號、前の迷中に伝える。『進路を阻む者、銃口を向ける者、近付く者には容赦無用。好きに暴れて進路を開け』ってな」

「承りました。進路のみならず、私のふとももも開きましようか？」

「こんなふうにか？」

「痛い痛い痛い大腰骨が開いちゃいますーっ！」

エドマンドは魔富士を先頭車両の方へ躍り出し、高らかに笑った。

「さあ、王のご増進だ！」

一週間ほど前、ロンドンには隕石が降りそそいだ。

幸いにも市街地への直撃は避けられたものの、衝撃波で建造物に被害が出た。あわせて交通事故、火災なども発生。その日は戦時のような騒ぎとなった。

軍、警察、消防各隊のスムーズな連携により、負傷者は最小限に食い止められた。復旧作業も滞りなく進み、ようやく街が落ち着いてきたというのに――

今夜、爆走する鉄の塊が、ロンドン市街に突っ込んだ。

機関車を止めようと、銃弾の雨が降りそそぐ。しかし、イカロスの空間歪曲の前では、そよ風程度の効果もない。後方へとすり抜けるだけだ。

あちらの攻撃が流された後、こちらの反撃が飛ぶ。

軍用車両が炎にまかれ、待ち伏せの小隊が次々に倒れていく。列車は減速もせずに突き進み、市街中心部まで到達した。

運悪く乗り合わせた乗客たちが、天に祈りを捧げている。その悲愴な詠唱を聞きながら、雷真も小紫に儼然の言葉を口にした。

「……悪いな、小紫。おまえにこんな……狭みてえな戦いをさせちゃう」

我ながら弱気だ。気に障ったのか、小紫は雷真の胸を叩き、怒り出した。

「あのねえ！ 私はね、戦うのがすっごく怖いんだよっ！」

ばしばしと雷真の胸板を打ち、気持ちをぶつけてくる。

「私は、姉さまたちみたいには、できないよ。だって、私の魔術はかくれんぼだし。相手の人形を壊す度胸も……あんまりない。そんな私が、震えずに立っていられるのは……戦おうって思えるのは、雷真がいるからだよ！」

――

「戦い方を教えてくれたのは、雷真だもん。だから、謝らないで——一緒に頑張ろ？」
いつもの元気な笑顔を見せてくれる。雷真の胸にも熱が伝わった。

「ああー」

迷いが吹っ切れる。雷真の目的は、夜々を救うこと。そのためならば、悪魔の力だって借りる。世界にワビを入れるのは、夜々を救ってからでいい。

「ここから帰れるぜー 備えろー」

エドマンドの警告と同時に、暴れ馬のように列車が跳ねた。

脱線——いや、レールが撤去されていた！

枕木が盛大にへし折れ、しぶきのごとく木っ端を飛ばす。列車はレールのない道を走り、フェンスを突き破って、市街地へと暴走した。

横転していれば、乗客に多数の死者が出ていたはずだ。だが、列車はしぶとくバランスを回復し、ストリートを突っ走る。

次第に速度が鈍り、商店を二軒つふして、ようやく止まる。

「降りろ。バツキングムに向かう」

自らもひよいと列車を降りて、エドマンドが歩き出した。

雷真は急いで魔力を練り、小紫に手渡した。八重霞を使い、エドマンドと雷真、二体の花柳南人形を夜の闇に隠す。エドマンドは意外そうな顔をした。

「お、何だ？ 俺たちにまでかけてくれたのか？」

「……これで、無駄な殺しをしなくて済むだろ」

「無駄な殺しだって？ つまらないことを言っただもんだ」

エドマンドは露骨に失望の色を見せた。

「この世に『無駄な殺し』なんてものは存在しない。そして、俺が手をくださなくても、死人は出る」

あごで市街を示す。既に戦闘が始まり、イカロスのほかに数体——六体の人形が暴れている。前者の姿は確認できないが、かなりの大魔力が周辺に満ちていた。

この異様な魔力の高まりには覚えがある。霊薬（神酒）を使っている。

自動人形は膨大な魔力を受け、バリケードを粉碎し、トーチカを破壊させ、歩兵をなぎ倒していく。人形が相手では、敵の小火器は明らかに分が悪い。おまけにあの人形たち、そこらの安物とは性能が段違いだ。大魔力にもオーバーヒートせず、むしろ生き生きとして、破壊の颯りを尽くしていた。

人間型のもの、獣型のもの、鳥型のもの。モチーフはずいぶん違うが、六体にはどこか共通する雰囲気があった。部品のデザインが古く、しかし精密で、昔の機械時計のよう。頭部は生物的で美しいが、ボディはいかにも無機質だ。

エドマンドは得意げに、自慢の玩具を見せびらかすように紹介した。

「わざわざ機巧都市まで出向いて回収した機体だよ。それぞれが蔵一杯の金に勝るぜ。右からアガレス、アモン、アスモダイ、マルコシアスにムールムール、そしてベリアル——ライコネンがレメゲトンから抜き取ったもんだ」

「レメゲトン——学院長の……魔導書か」

「魔本を開くのに、兵士が六人、犠牲になった。陰險なジジイだぜ、まったく」

おぞましい言葉に、小紫が口を覆う。雷真も唾棄したくなった。

同時に、理解する。ライコネンの学院長就任は、あれを奪うためでもあったのだ。

不意に真顔になって、エドマンドが雷真に言った。

「この際だから覚えとけ。撤退や降伏ってのは、ときに勝利と同じ価値がある。撤退にはそれだけの代償を求めろ。それが王たる者の義務だ」

「……偉そうに戦争論ぶちやがって。ただの盗賊だろ。王道とは真逆をいってる」

「神から盗んだ武装で天下を取る——神話じゃよく聞く話だろ。俺はここらで、古い神々にはご退場いただきたいのさ」

いつも通りの、人を食ったような笑顔に戻る。一瞬、この男の心の奥——秘めた何かに

触れたような氣もしたのだが。

「さて、連中とは別行動だ。七號もあっちにつけ。俺はライシンと正門から行く」

「いけません陛下――それは短慮というものです」

龍富士がその場にひざまずき、涙ながらに訴えた。

「こやつは絶対裏切ります――この顔――この顔を見てください――明らかに反骨の相、悪たれスケコマシ粗チンの相が出ています――」

「どんな相だよ――俺は何だ？」

「味方をお連れください。いっそ私だけをお連れください――」

要はそれが言いたかったただけだ。捨てて行くのかと思つたが、エドマンドは頭痛をこらえるような仕事をして、しぶしぶ、首を上下させた。

「……ほつとくどろくなことしねえからな。目の届くところにいろ」

ばあああつと龍富士の顔が輝いた。歩き出すエドマンドの後ろを、鷹の雛のようについていく。雷真も我に返り、小紫と二人、エドマンドの後を追つた。

待ち伏せを迂回しつつ、王宮へと驅ける。やがて広大な庭園に突き当たり、四角い焼き菓子のような建物が見えてきた。

王城バツキングム宮殿。

かがり火に照らされ、壮麗な彫刻が浮かび上がっている。そこに至る庭園には、多数の軍人がひしめいていた。

エドマンドは足を止め、やれやれというふうに隊をにらんだ。

「邪魔くせえな。まして、この先は警報結界がめじろ押しだ。隠密行動は難しい」

「……なら、どうすんだ」

「俺の城だぜ？ 堂々と行くさ」

真正面から突っ込む。何かの結界が作動し、エドマンドの隠形が解けてしまった。

複数の投光器が当てられ、闇にシルエットが照らし出される。

警告もなく銃撃が加えられる。……が、弾丸は一発も命中しない。

魔富士の魔術回路が起動し、銃弾は空中に静止した。

エドマンドは悠然とふところに手を入れ、エメラルド色の液体が詰まった、小さなピンを取り出した。コルク栓を抜いて、一息に飲み干す。それだけのことで、彼の体から爆発的な魔力があふれ、魔富士へと流れ込んだ。

空中で停まっていた銃弾が、時間を巻き戻したように、反対方向へ飛ぶ。

自らの弾丸に撃たれ、兵が倒れる。彼らを蹴散らし、庭園を踏み荒らして、魔富士が敵部隊のと真ん中を駆け抜けて行った。

走るだけで大地が割れ、腕を振るだけで自動人形がひしゃげる。

圧倒的な破壊力。まして、いきなりふところに入られている。部隊はひどく混乱し、対応が遅れていた。おまけにあちらは普通の歩兵で、魔術師の数が少ない。

こんなさまで、魔富士の進撃を止めることはできない。

もとより、魔富士には山を崩すほどの攻撃能力が備わっている。雷撃の効果で力を増した今、手のつけられない暴威となっていた。

さらに——ここには雷真と小紫もいるのだ。

雷真のアシストで、魔富士は頻繁に敵の視界から消える。相手にしてみれば、「攻撃の瞬間だけ現れる」神出鬼没の死神となる。

行く手を阻むことは誰にもできず、四人は宮殿前までやってきた。

デコレーションケーキのような女王記念碑を飛び越え、玄關から突入。中に入った途端、まばゆいばかりの装飾に圧倒され、雷真は立ちすくんだ。

貴金屬を惜しげもなくあしらひ、手すりからドアノブに至るまで、徹底的に作り込まれている。敵地であることも忘れ、雷真はあんどりと大口を開けた。

「何でこんな……無駄な……」

「無駄じゃねえさ。城は命を守り、誇りを持たせ、権威を知らしめるもの——国の格が決まる建造物だ。手抜きが許されるのは劣等国だけだぜ？」

エドマンドの帝王学はともかく、美しいのは間違いない。夜々を連れてくることができたら、きつと喜んだだろう……。

雷真は難金を追い払い、エドマンドに従って奥へと進んだ。

内部に侵入されるとは思っていなかったのか、警備は手薄だ。フレンジリーファイアの危険もあるため、外からの攻撃も続んでいる。こちらにとっては町都合なのだが——雷真

は嫌な予感を覚えた。どうも、簡単に行き過ぎている。

開見の間、絵画の飾られたギャラリーを抜けると、大ホールに出た。豪華なシャンデリアが吊られ、天井も隙間なく飾り立てられている。どぎついほどの美に氣を取られ、隙が生じた。

足もとでバリッと魔力の火花が散り、全員の八重葎が解除される。

「ようこそ、無法者たち」

芝居がかった台詞とともに、ホールの奥から淑女が歩いてきた。

豪華なドレスをまとっている。首から下が金属製で、どう見ても自動人形だ。が、操者の姿が見えず、気配も感じない。単独で動いている……ようだ。

「この再会を残念に思いますよ、エディ」

人形はエドマンドを見つめて、親しげに微笑んだ。

エドマンドは苦笑して、

「俺もですよ——縹母上」

2

剣に立ち乗りして、ロキが飛び去る。

もう人間の足では追いつけない。ヘイゼルは息を止まらせずに舌打ちをして、それから、

意地悪な顔をフレイに向けた。

「私を倒す作戦……だっけ？ そんなものがあるの？」

フレイは無言で見つめ返す。ハイゼルは嘲笑を浮かべた。

「そう、あるはずがない。貴女は弱い。ガラムに懐かれていたから、選ばれただけ」

——フレイの背景を知っている。やはり、ハイゼルはDワークスの関係者だ。

殺したくない、と思った。

きつと、この子は悪くない。姉弟と同じように、つらい目に遭っている。

ちらりと横を見る。斬られたリビエラはぐったりとして、舌を出していた。

急げば、助けられるかもしれない。ここを切り抜けることができれば……。

「よそ見をしている場合？」

殺気を当てられ、あわててハイゼルに向き直る。

ハイゼルは眉をひそめ、不機嫌につぶやいた。

「……収めた態度、気に入らない」

「う。ごめんなさい」

「それが気に入らない。勝ち目がないのに、どうして残ったの？ 剣帝の言う通り、協力

して戦うべきだったのに」

「う……貴女、勘違いしてる」

「勘違い？」

「勝ち目は、あるよ」

「だって、私はロキの——お姉ちゃんだから」

きりつと表情を引き締め、ブラウスの袖をまくって、言い放つ。

「ラビー」

がうつ、と吠えて、愛犬はフレイの手首に噛みついた。

鋭い牙が肌を破り、血管に穴があき、鮮血がこぼれ落ちる。

「……それ、オルガ一味との戦いでもやってた。何のつもり？」

「（魔心解放）——貴女は使えないんだね？」

フレイは微笑んだ。よかった。これで本当に勝機が見えた。

オルガのチームと戦ったとき、〈十三人〉の一人ドロシーを倒すには、この力に頼らざるを得なかった。

まして今回、相手の魔術は驚異的——何せ、あのロキが精神支配を受けたのだ。ガラム犬は人間よりも抵抗力が弱いため、簡単に支配されるだろう。

フレイが一对一で、真正面から戦うには、やはり心臓を使うしかない。

だくだくと血があふれ、血圧が少しずつ下がっていく。浮遊感をともなう吐き気。その苦痛に歯を食いしばって耐え、フレイは昂然と顔を上げた。

（ライシンと夜々ちゃんは……何度も、私たちを……助けてくれた……！）

姉弟がわかり合えたのも、ともに過ごせるのも、二人のおかげだ。

だから、たとえこの身や、家族が倒れることになっても、二人の目的——夜会を終わらせるわけにはいかない。

（私も……戦う！）

機巧の心臓を酷使して、血液を魔力に変換する。

空気が粘るほどの濃密な魔力。輝く魔素の反応で、周囲が昼間のように明るくなった。

ヘイゼルは脅威を察し、黒刀を抜いて叫んだ。

「父なる王の声を聞け——おまえは犬を殺す！」

強烈な誘惑が生まれ、フレイの精神が支配されそうになる。魔術師の精神に直接的影響を与える魔術など、フレイはこれまで触れたことがない。

イオネラの（絶対王権）のように、圧倒的な魔力で実現しているのか。

あるいは金薔薇の（万物流転）のように、限定条件を積み重ねているのか。

わからない。わからないが、今回ばかりは、極めてシンプルな対策がある。

こちらにもまた、強大な魔力で抵抗すればいい。

今やフレイの心臓は限界を超えて、暴走状態にあった。（約束された子ども）の芳醇な

魔素を含む生き血を、片っ端から魔力に変換している。

理不尽な誘惑が去り、肉体の支配権が戻ってきた。

「（致命詔書）が、効かない……!?」

ヘイゼルの表情に緊張が走った。

はるか格下だと思っていた相手に、純粋な魔力で圧倒され、冷静さを失っている。

フレイがつけ入る隙はここしかない。ガラム大それぞれに手渡すような気持ちで、一顧ずつ、十分な魔力を渡していく。

（ロキ。ライシンと仲良くしなくちゃ……だめだよ？）

微笑みを浮かべて、ガラム全頭の〈音圧操作〉を起動。

夫たちがヘイゼルに向かって吠えた。吠え声は〈音の砲弾〉を生み、互いに融合し合いながら、大地を切り刻んで突き進む。

刃の嵐が吹き荒れ、一帯の地面が耕される。神話の狼の大顎のような、巨大な牙が殺到し、ヘイゼルを一口でのみ込んだ。

魔竜が討伐されると、機巧師団はただちに学院に踏み込んだ。

統率の行き届いた正規軍は、ものの一〇分足らずで制圧を完了。全隊の三分の一に相当する四千で敷地内を押さえ、学院長公邸、各学部にまんべんなく人員を配した。

学生と教職員の人数確認、設備の点検、負傷者の収容が始まる。

グロリーアがその場に到着したのは、そうした作業が行われているときだった。掘り返されたような土の上に、血まみれの女子学生が転がっている。

「プロミスチルドレン——」

グローリアは足を止め、少女を観察した。

傷は浅い。だが魔力が尽きている。防衛で使い果たしたか。

（ヘイゼル……そなたが後れを取りましたか。一体、誰に……）

黒刀を握りしめた指が、かすかに動く。

グローリアは手を上げ、暮僚を呼び寄せた。

「息があります。この少女を助けなさい」

「了解です。——あちらにも一人、いるようですが。」

かなり遠く、街灯の下を示す。確かにもう一人、少女が座り込んでいた。

その周辺に、十数頭もの犬が（おすわり）している。彼らが全然動かないので、一瞬、茂みと見間違えた。

犬は自動人形なのだろう。主の回りを取り囲み、ビスビスと鼻を鳴らしている。

しびれを切らしたように、オオカミ犬が少女の肩に前脚をかけた。

鼻先を押しつけ、頬を舐める。軽く押しただけなのに、少女はゆっくりと上体を傾け、ごとりと、と血だまりに転がった。

——死んだのか。あの出血では、生きている方が不思議だが。

犬たちが落ち着きを失くし、騒がしくなる。

ひとしきり吠えて——くうん、と鳴く。

少女はやはり、答えなかった。

幕僚が背伸びして、そちらの様子を探る。

「犬が邪魔ですな。一応、蘇生を試みますか？」

「……捨て置きましょう。遺体の収容は学院と連携して行います」

「では、そのように」

「魔竜はどこです？」

「ご案内いたします」

幕僚が先に立って歩き出す。ストリートの中ほどで、遊撃中隊が待機していた。

魔剣の竜を護っている。竜はもう鳥ほどの大きさに、鳥かごに入れられていた。

「……先ほどは見事な戦いぶりでした。さすがはブリュウの血筋——機巧師団相手に一歩も退かず、吠えて立つとはね」

ゲートの向こう、荒れた市街を見やっつて、笑みをこぼす。

「しかし、覚悟が甘い。一兵も殺せぬのでは、何も護れはしません」

シダムントがもたらした破壊の規模は凄まじい。負傷者は多数、自動人形の被害も甚大だ。しかし、一人も死んでいない。人形も（ヘイブの心臓）を失っていない。

「そうでしょう、魔剣の竜よ」

鳥かごの中、傷だらけの仔竜を見下ろす。

仔竜は石像のように動かない。

魔力を封じられ、強制的にスリープさせられている。

「ふむ……これは偽物ではないでしょうね？」

中隊の兵に問う。兵士はナイフを仔細に突き立て、

「この通り、幻でも複製でもありません」

あふれる血を示した。グローリアは納得し、うなずいた。

「よくやりました。ただし——これは英国の財産です」

グローリアは付近の兵士を見回し、厳しく申しつけた。

「無礼は許さぬ。敬意を持って丁寧に扱え」

「御名にかけて——」

一糸乱れぬ敬礼が返ってくる。グローリアは満足し、学内を見渡した。

既に、抵抗する者はいない。

学生はそれぞれの建物で、大人しく軍人の言いなりになっている。予想していた教授の

抵抗もなく、むしろ協力的との報告を受けていた。

グローリアは可笑しくなり、口元を隠して、含み笑いを漏らした。

「学院など、本気でかかればこの程度のもの……」

セトの魔女は、お遊びが過ぎたのだ。

「それでは、もうひと働きしましょうか。謀反人を片付けるとしましょう」

残照の残る空を仰ぎ見る。そちらは南方、ロンドンの方角だった。

（ババアめ。案の定、俺を追い落としてきたか）

内心で笑ってしまいがち、エドマンドは娘女人形を見やる。

自動人形イージス。コレクターでもある継母が、特に気に入っている機巧だ。

エドマンドは金蓄薇の手駒であり、継母は今や銀蓄薇——ともに結社の幹部だが、同じ蓄薇なら味方同士……というわけではない。

むしろ敵対しているからこそ、議論で利害を調整する必要がある。銀蓄薇にしてみれば、エドマンドは目障りな叛逆者に過ぎないだろう。

「おい、バカ王子。あの人形は何だ？ とんでもない凄みを感じる……が、禁忌人形じゃねえ。使い手の気配もない」

となりの雷真がつぶやく。ひと目で性能を見抜くとは、さすがに目が利く。

「兵器マニアの継母上が、特にご執心の一体でね。あれをベースに何かコソコソ造ってるらしい。……それと、使い手はいるぜ、遠くにな」

「遠く——って、どこだ？ 官殿の外から魔力が届くってのか？」

「魔女の（影）に距離は関係ない。仕込みさえしておけば、地球の裏側からでも届く」

影とは何か。困惑する雷真を無視して、エドマンドは人形に皮肉を言った。

「ご機嫌置しく、継母上。ご無沙汰しておりますね」

「ふん……よくもぬけぬけと申したもののよ」

人形の淑女は苦笑した。顔立ちとは違うが、表情は持ち主のそれをトレスしている。

「皇太子の地位にありながら、我が夫——いと異き英国王を亡き者とした大道の罪、母であつても見逃すわけにはいきません」

「見逃す必要はないぜ。帝王とは力で王座を奪うものだ」

「王は君臨すれども統治せず……善き伝統を否定するつもりですか？」

「ちやっかり將軍におさまつてゐる女に言われたくはないな」

「——おい、バカ王子。一家団圓なら勝手にやつてくれ。俺は急いでる」

雷真が割り込んでくる。淑女人形がルビーの眼を向けた。

「無礼なこと……。彼がライシン・アカパネ……ですわ？」

「さすがにお詳しい。左様、そいつが俺の機巧都市制圧を妨げ、魔王ライコネンに恐怖を与え、貴女のプライドを叩きのめす野郎です」

エドマンドの返答を聞いて、雷真が横目の視線を寄せた。

「つまり、こいつは突破していいんだな？」

「そう言った」

すぐさま、雷真が仕掛けた。小紫に魔力の糸を飛ばし、八重電を使う。

魔術で身を隠して、死角から奇襲するつもりだ。だが、二人が固合いを詰め切る前に、

淑女人形の周囲に魔法陣が浮かび上がった。

強靱な金動防御。魔力が干渉し、隠形の魔術が解けてしまう。

雷真と小紫が、敵の眼前に出現する。両サイドから挟撃を仕掛ける予定だったようだが、不可視の壁に阻まれて、動きが止まっていた。

「愚昧ですね。実に」

淑女は優しく微笑み、機械の指を二人に向けた。

斥力が生じ、二人を弾き飛ばす。雷真が左手の壁に叩きつけられ、床に落ちた。

「今です」

淑女の号令で、そちらの壁が火を噴いた。

マズルフラッシュ！ 壁の向こうに銃を隠していた！

魔術で遮蔽していたようだ。今さら気配が充満し、肉眼でも銃口が確認できた。

ガトリング八基と、小銃を持つ一箇中隊。当然、雷真を狙う。もちろん、やらせる必要

はない。エドマンドは魔富士に魔力を渡し、雷真を護ろうとした

だが、魔力は魔富士に伝わらず、強制支配も遅れた。

（――魔力の伝導が遮断された？）

雷真と雪月花のような信頼関係はない。魔富士はエドマンドの意図に気付かず、自身の

魔力を使って、自分とエドマンドだけを護った。

銃撃音が鼓膜を殴り、硝煙の臭いが立ち込める。雷真と小紫は八重葎で姿を消したが、

射手は掃射で死角をカバー、ホールを隙間なく銃弾で埋めた。

十分な鉄道を叩き込んだと見るや、淑女人形は右手を上げた。

びたりと射撃が止まる。遠くなった耳に、グロリアの声が刺さった。

「やはり愚昧よ。雷視や天眼に頼るから、壁の擬装に気付かぬのです」

自動人形イーリス——（魔防の盾）の究極系。

華母は無類の兵器好き。その彼女が、並ならぬ興味を示したのは、原始的かつ初歩的な魔術回路（魔防）を搭載した自動人形だった。

普通は銃弾を止める程度の使い方しかできない。だが、一流の魔術師なら、その強度は鉄壁となる。先ほどエドマンズの魔力を遮断したように、敵と人形のあいだに壁を築いて、魔力伝導をさえぎることもできる。

魔力の伝導が妨害されれば、天眼や雷視も精度が落ちる。まして相手は海千山千の魔女——雷真には、少々荷の重い相手だったか。

雷真と小紫の死体は見当たらない。まだ八重葎の効果が残っているのだ。それでも、敵は勝利を確信したらしい。淑女人形は余韻を味わうように、うっとりとした。

「愚者の思考はよく通ける。焦って仕掛けてくるのはわかっていました……そう、わかっていたのですよ。彼が魔術を妨害できることも、防壁の魔術を使うこともね」

だから、魔術師ではなく銃砲を配置していたというわけか。確かに、八重葎を使おうが使うまいが、空間を銃弾で埋め尽くせば、必ず当たる。夜々がない今、銃弾は雷真の命を奪うのに十分な殺傷力だ。

「……さすがは士官学校出の才媛、伊達に機巧師団を任されてはいない。そうやって他人を転がし、嘲弄する——てめえのそういうところがカンに障るんだ」

「あら、ひがみですか？ それとも、同族嫌悪というものかしら？」

軍女人形はますます縮しそうに相好を崩した。

「お気の毒ですね、エディ。自慢の手駒を……ふふ、こうも簡単に失った。次はどうするのです？ そなたが自ら戦いますか？」

しゃべりながら、抜け目なく對手たちに狙いを変更させる。

「鹽富士の〈天手力〉も、イージスの盾の前では無力です。無駄な抵抗はおやめなさい。

そなたは生け捕りとし、金髻薇へのおさえとしたい」

「優さまがそこまで俺を大事にするかよ。もう一つ、悪味な継母上に申し上げるが、その攻め手は無理筋つてもんだ」

「無理筋……？」

「俺のライシンは結社の暗殺者をしのぎ、今や灰十字の戦士にも迫っている。魔術師でもない凡百の雑兵や、二流の将に倒せるものか」

「二流……ですって？」

びく、とグロリアの肩が動く。エドマンドはさらに挑発した。

「その顔、自分じゃ一流だと思ってるらしいな。お気の毒に——」

「無礼者が——」

人形の顔に怒りがたぎったその瞬間、がいんつ、と刃が頬を打った。

見えないが、察しはつく。——小紫の銀剣だ。

人形の顔に傷が走る。ただし、魔防が間に合っている。致命傷にはほど遠い。それでも、敵の生存を知って、射手たちに動揺が走った。敵の姿が見えない——滑稽な状況だ。エドマンドは声をあげて笑った。

「これで逆転だな。臭ってくるぜ、かませ犬の体臭が！」

「撃て！ 撃ちなさい！」

すべての銃口が轟然と火花を散らす。そのうちの一発が、淑女人形に飛んだ。

射手が焦り、外そうとする。かえって弾が集まり、やがて集中豪雨となった。

——八重霞に眩惑されて、方向を見失っているのだ。

先ほど雷真を仕留められなかったのも、これが理由だ。空間を弾丸で埋めたつもりで、どこかに隙が——認識の歪みができていた。

出し抜けに、イージスの魔防が効力を失った。

知覚はできないが、理由はわかつている。紅霧陣の糸を流し込まれ、魔術の効果を抑害

されたのだらう。紅霧陣の収束が生む出力は、瞬間的には魔王の魔力にすら勝る。(影)

ごときの魔防で止められはしない。

射撃停止の命令が間に合わず、淑女人形は弾雨に叩きのめされた。

轟然と微笑み——ふっと稼働を停止する。

「へっ、負け惜しみのひとつも言っていれば、少しは可愛げもあるんだがな」

エドマンドは淑女人形の顔を蹴り、射手たちに向き直った。

「さて——お次はおまえらの始末か」

射手たちの顔から、気の毒なくらい血の気が失せた。

鹽富士の髪が逆立ち、ホール全体の重力が重む。

魔術回路（天手力）が起動。それは重力を自在に操るもので、魔剣と同様、宇宙の真理に迫る強大な魔術だ。

肉が軋み、引き裂かれる。鉄の銃器がねじれ、ひしゃげて壊れる。

人間が鉛細工のように変形し——そして、破裂。硝煙の臭気を上書きするような、強烈な血の臭いが広間を満たした。

雷真が虚空から飛び出してきて、エドマンドの胸ぐらをつかみ上げた。

「てめえ……っ！」

「陛下に何をするかつ、この下郎！」

鹽富士が狂り、雷真を魔術で引き裂こうとする。エドマンドは強制支配でそれを止め、胸ぐらをつかまれたまま、雷真に笑いかけた。

「どうした、ライシン。何を怒ってる。怪我でもしたのか？」

「なぜ、殺した！　こんな——皆殺しじゃねえか！」

「やれやれ……おまえの馬鹿は尊いが、その発言はいただけねえな」

エドマンドは雷真の腕を払い、はつきりと言った。

「皆殺しは当然だ。俺に銃を向けるような連中、生かせばのちの禍根となる」

「……………」

「どのみち使いでもない。俺たちに傷もつけられねえような雑魚だぜ？」

転がってきた頭部を蹴り飛ばす。絶句する雷真の胸を突き、冷然と告げた。

「履き違えるなよ。俺がおまえを買っているのは、おまえにそれだけの価値があるからだ。わかつたら、二度とくだらねえ質問をするな！」

「さすがです陛下！ 素敵です！ 濡れます！」

「濡らすな。臭え」

「くさい……………」「ガーン」

涙ぐむ雷富士を置き去りにして、エドマンドはホールの奥へと歩き出した。

しかし、雷真はもう、ついてこようとしなかった。

自分がどんな男と手を組んだのか、改めて思い知ったようだ。血の海に立ち尽くし、肩を震わせている。

「どうした、ライシン。玉座を奪い返しに行くぜ？」

「……………硝子さんは、どこだ」

「何だ？ もう別行動がしたいってか？」

にらみ合いになる。ややあつて、エドマンドが折れた。

「止めても勝手にに行つちまいそうだな……。いいぜ、教えてやる」

立てた親指を下に向け、足もとを示す。

「下へ、下へ、降りろ。地下深く、ブラッディ・マリーが築いた礼拝堂がある」

「……そこに硝子さんがいるんだな？ この城を占拠してる連中や、魔術師協会の連中は、何でそこに踏み込まない？」

「入れないのさ。鍵が必要になるからな。——おまえに預けてあるだろうか？」

雷真ははっとした。とっさに胸ポケットをまさぐる。

金色に輝く薔薇の指輪は、ちゃんとそこにあつた。

4

真紅のカーペットを蹴り、小紫は雷真と宮殿を駆けた。

小さな胸で不安が暴れている。本当は雷真にしがみついて、泣き出したい。ついさつき、胸が悪くなるようなものを見た。この世の地獄を……。

だが、泣いたところで、雷真の足を引っ張るだけだ。

だから、我慢する。我慢して雷真を追いかける。

城内は喧騒に満ち、警備兵が右往左往していた。先ほどの戦調音を聞きつけて、庭園の兵たちも突入してくる。広大な宮殿が狭く感じるほど、兵の密度が高い。

八重霞は効果を發揮している。警報結界と衝突にさえ気をつければ、やり過ぎることはできる。二人は慎重に兵をかわしながら、地下への入り口を探した。

口の字型の城内をさんざん駆け回って、中庭にそれらしきものを見つける。

植え込みにまぎれ、ひっそりと立つ小さな祠。舊儀のつるがからみついた祭壇の裏手に、大人が入れるだけのスペースがあった。

湿気とともに、死そのもののような、瘴気の臭いが漂ってくる。

「入り口は狭いが、道は広いぜ。天国に至る隠気な通路は（死の胎道）と言う。せいぜい、途中で死なないように気をつけな」

先ほど、エドマンドはそう言っていた。

雷真は躊躇なく飛び込んでいく。小紫もその後が続き、園の中を歩き出した。

エドマンドがほのめかした（トラップ）は、ひとつも作動しなかった。本当に、舊儀の印章がトラップ制御の鍵らしい。

……ひどく不気味だ。王宮の地下に、結社の幹部しか入れない場所がある。だとしたら、結社はいつからこの園に果食っているのだろうか？

——園は深い。その深淵のさらなる深みへと、小紫は雷真とともに降りていく。

ほどなく、最下層に到達。

天然の洞窟なのだろうか。鍾乳石が並んでいる。奥に行くほど天井が高くなり、やがて、高さ一〇メートルはありそうな、大きな扉に突き当たった。

その前で、小さな人影が待っている。

それは冷気をまとって立つ、青みがかった銀髪の、和装の乙女だった。

「いろり姉さまっ！」

雷真より先に気付いて、小紫は駆け出した。姉はきつと抱き止めてくれる——そう信じて走ったのに、いきなり氷の格子が出現し、小紫を阻んだ。

驚いて、立ちすくむ。

姉の視線に、いつもの優しさはない。

ただ冷ややかに、氷の彫像のように、小紫を見据えている。

「……………どうかお引き取りを。主はお会いになりません」

突き放すように告げる。姉は殺気をみなぎらせ、完全に敵意を向けていた。

だが、雷真は意にも介さず、氷の格子に張りついて、脱力した。

「よかったぜ……………いろり」

「え——」

「おまえ、本当に無事だったんだな……………このバカ、心配かけやがつて！」

「そ……………そのような場合ではありませんっ」

いろりは銀髪を左右に振り、ゆるみかけた敵意を立て直した。

「ここは通さぬと——敵対すると申しているのです！」

「はあ？ 敵対？ 何でだよ？」

「な、何でと訊かれてましても……それは……」

「言つとくが、俺たちはバカ王子の手下になった。硝子さんが結社の側についたんなら、俺は敵じゃねえぞ。むしろ味方だ」

「何ですって？ それは、まこと……なのですか？」

小紫もうなずく。いろりは裏切られたような顔をした。

「貴方は何をしているのです……！ そのような愚かなことを、なぜ！」

雷真は氣負った様子もなく、いつも通りの声で応えた。

「夜々が助かるなら、悪党の手助けくらい、軽いもんだ」

「――」

「夜々のためなら、煉獄に放り込まれようが、牢獄で泥水すすろうが、かまうもんかよ。」

たとえ火の中、泥の中だ」

いろりは眼を潤ませ、うつむいた。

たまらなくなつたように、両手で顔を覆つてしまう。

まるで、雑踏に放り出された迷子のようなだ。

そんな姉を、小紫は初めて見る。いつも優しくて、涼々しくて、軽しい姉が、今は幼い

子どものように、途方に暮れて泣いている。

（姉さまは……やっぱり、いろり姉さまなんだ……！）

硝子はどうか知らないが、いろりはいろりのまま――別れたときの姉のままだ。

雷真にもそれがわかったのだろう。氷の格子を叩き割って、いろりに歩み寄った。

「さあ、いろり。そこを通してくれ。俺が硝子さんと話をつける」

「なりません！」

いろりが腕を振る。凶悪な冷気が凝集し、氷霧が雷真を包み込んだ。

この技は知っている。かつてシンを撃退した大技——霜降り。

氷結すれば、人体は粉々だ。しかし、雷真をとらえることはできなかった。

とつくに跳躍している。(剛体)のスキルで身体能力を向上させたようだ。

いろりの頭上を飛び超えざま、右手の指を突きつける。

雷真の背中から赤い霧が飛び、同時に指先から魔力の光が飛んだ。

紅興陣の糸がいろりの首筋に伸び、たやすく身動きを封じてしまう。

雷真は軽やかに着地して、ぼんというりの肩を叩いた。

「いつものキレがねえな。覚悟の鈍ったおまえなら、一対一でも勝てちまうよ」

小紫は目を見張った。

(雷真は……やっぱすごい……！)

自動人形の助けもなしに、雪月花を押さえ込むなんて。

学院に編入されたときの、劣等生の面影はない。雷真はもう、一流の魔術師だ。

「さあ、いろり。硝子さんに会わせてくれ。そして、みんなで帰るんだ」

「……わかりました。主に取り次ぎを」

「あきれた不忠者ね、いろり」

びくつといろりの肩が緊張した。

いつの間にか、かすかに開いた扉の陰から、淡い光が漏れている。

逆光の中に、なめらかな曲線を描く、女性的なシルエットが浮かび上がる。

豊かな胸、くびれた腰の、妖艶な美女――

「この花柳斎、決して入れるなと命じたはずよ」

暗がりのせいか、いつもより化粧が濃く思える。

――だが、確かに、硝子だった。

硝子はいつものあだっばい笑みを浮かべ、なじるように言った。

「よくここがわかったわね、坊や」

「……俺は軍の密偵。大つてのは鼻がきくもんだ」

「さてしまったものは仕方がないわ。許してあげるから、帰りなさい」

「知ってるだろ。俺は聞きわけが悪いんだ」

「ええ、そうね。坊やは私の言いつけを守ったためしがない」

雷真は奥歯を噛んだ。横顔が苦しげに歪んでいる。

硝子の瞳が、ほんの一瞬、優しい光を宿した――気がした。

センサーの誤認だろうか。硝子は極めて冷ややかに、責めるように言った。

「協会とコトを構えたそうね。実に愚かなこと……。夜々を救いたいのなら、彼らの力を



こそ惜りるべきだったのに」

「だが……それじゃ、硝子さんと生き別れだ」

硝子が言葉につかえる。何かを言おうとしたが、言葉にならない。

雷真は一步踏み込み、まっすぐ硝子を見つめて言った。

「大だつて恩は理解する。拾ってくれた飼い主を、忘れやしない」

「……嬉しいことを言ってくれるじゃない。だけど、無駄足だったわね」

硝子はふっと笑つて、左手にはめた指輪を見せた。

雷真の印章——幹部の証だ。

「私は紅蓮の席を得た。もう軍に戻るつもりはないわ」

小紫の境界が涙でぼやけた。

覚悟はしていたはずなのに、実際に本人の口から聞くと、胸にこたえた。

どうして、硝子はある人たちの味方になってしまったのだろうか？

私たちが嫌いになっちゃったのかな……と思つたら、もう涙が止まらなかつた。

雷真はこぶしを握りしめ、しばらく出すように言った。

「……それが硝子さんの決めたことなら、文句はねえ。けど、夜々は助けてくれ。元通り、

治してやつてくれ。……この通り、頼む」

その場に膝を折り、両手をついて、こうべを垂れる。

いろいろも着物の裾を払い、同じようにひざまずいた。

「主、私からもお願いします。どうか——」

「……何をしているの、いりり」

「後生です！　どうか、夜々だけは……っ！」

「黙りなさい！」

平手が飛ぶ。いりりは頬を打たれ、その場に倒れた。

自分が打たれたわけでもないのに、小紫の頬にも痛みが走った。

小紫の記憶にある限り、硝子がこんなふうに、姉妹に手を上げたことはない。

硝子は赤くなった手を袖に隠し、冷たく言った。

「帰りなさい、坊や。……目障りだわ」

「……どうして」

雷真の声が上ずり、震えた。

「なぜ、駄目なんだ……？　何で、こんな……あんたは何を抱えてるんだよ！」

硝子は無言だ。ただ、うるさい野良犬を見るような目で、雷真を見ている。

「言ってくれよ！　どうして何も教えてくれないんだ！　何で……」

「このきかん坊には、口で言っても時間の無駄ね。——いりり」

うんざりした様子で、いりりに魔力を飛ばす。

「体に教えてあげなさい。逃げ帰りたいようになるように」

「……………」

「人形の主は、この私よ」

「……………はい」

いろりが立ち上がり、雷真に向き直る。赤くなった左頬が痛々しい。

無表情のまま、いろりは胸元で手刀を作り、臨戦態勢になった。

急激に気温が下がり、鍾乳石に霜が降りる。

硝子は十分な魔力をいろりに渡し、指示を飛ばした。

「辻殺し」

いろりが機械的に腕を振る。冷気が八方に飛び、壁からつららが飛び出した。

地上で見たガトリングが可愛く思えるほど、それは凶暴な威力を示す。岩を砕き、壁を

削って、鋭い氷筋が雷真に襲いかかった。

床も、壁も、たちまち穴だらけになる。だが、雷真には当たらない。

天眼を用いて射線を読んでいるのか。あるいは魔防で弾いているのか。

小紫の眼には、雷真はただ突っ立っているだけに見えた。

「刃傷殺し！」

焦れた様子で硝子が次の指示を出す。いろりは応え、巨大な氷刃を生み出した。

氷割太刀が、なめらかに床を切り裂く。

わき腹から肩口へと刃が抜けても、雷真はやはり、かわそうともしなかった。

墓標のような建築物——重要機巧保管施設の屋上で、ロキはアスラに追いついた。いや、追いついたと言うより、アスラが待っていたと言うべきか。アスラは屋上のへりに立ち、ぼんやり学院を見下ろしていた。

この高さからなら、学院全体が見渡せる。

日没後の淡い闇。今や城壁すら失った学院は、もうありし日の面影もない。機巧師団が野営の準備を進めていて、あちこちでかがり火が焚かれていた。

アスラは何を思っているのか。その背中からは、うかがい知ることができない。

「……瞬がなくなつて、さっぱりしたね」

ただのおしゃべりのような調子で、アスラは言った。

「このくらい聞かれていた方が、学府としては好ましいんじゃないかな」

「……あんたがやったのか？」

「ヘイゼルはどうした？ 殺してしまったのか？」

「質問しているのはオレだ！」

アスラはふつと笑つて、振り向かずには答えた。

「僕たちで読したよ。その必要があつたからね」

「……何のために？」

「ラザフォードの手から、学院を奪還するために」

奪還——？

アスラが振り返る。漆黒の瞳がわずかな光を集め、強く輝いた。

「学院は英国のものであり、世界のものだ。あの男の専横に委ねるわけにはいかない」

「……それはあなたの考えじゃない。そうだろう？」

「学院は今日、生まれ変わる。元通りの王立機巧学院に」

「誰の命令だ！」

アスラは微笑^{ほほえみ}みただけで、答えなかった。

生まれはインドだが、今のアスラはイギリス人だ。

弁が立ち、人望も厚い。オルガをのぞけば、もつとも優等な学生と言える。

その彼が、学院の存続をあやうくするような、馬鹿げた行為に加担している。

「……オレは謙虚で寛大だが、どうにも許せないものが三つある」

ロキの肩から魔力が立ちのぼり、足もとの砂ぼこりが浮き上がった。

「まずは、オレをバカ呼ばわりする大バカ野郎——あいつは実に最低だ。それから、泣いてばかりで鈍臭かった姉——これは少しマシになった。そして」

真正面から視線をぶつけ、告げる。

「借り物の理屈で、己を騙^{たぶらか}している奴だ」

それが誰のことを言っているのか、もちろん、アスラにも伝わっているだろう。

アスラは寂しげに微笑み、かたわらのインドラに右手を向けた。

「許せないなら、どうする？」

ロキもまた、相棒ケルビムに右手を向けた。

視線が交差する。

互いにもう、言葉はいらなかった。

「万物一切、焼滅せしめよ！ インドラー」

「ケルビム――廻れ！」

インドラが天に剣を掲げる。先端から高压電流がほとばしり、夜天を貫いた。

それは天空で反射して、雷撃の雨となって落ちてくる。

精確にロキを狙ってくる。直撃すれば黒コゲだが、ケルビムが大剣に姿を変え、ロキの

頭上で炎を帯びて回転している。

熱風のレインコート。雷が炎の表面をすべり、足場のコンクリートに流れた。

アスラが飛びのき、距離を取る。

「プラズマでアースする――それは（静電遮蔽）と言うそうだね？」

冷静に現象を見抜く。ケルビムの高熱が空気をあぶり、電離したプラズマの層を生む。

通電性が高いので、避雷針の役割を果たすのだ。

つまり、魔防でブロックするまでもなく、ロキはインドラの雷撃をそらすことができる。単純な防衛より、よほど効率がいい。のみならず――

「熱風操作で雷の誘導方向を操れる。かわしつつ、次は僕に当てる——だろう。」
ロキは無表情をたもつ。だが、國星だった。

相手の観察眼に舌を巻く。雷撃のわずかな動きで、ロキの実験に気付くとは。
この敵は普通ではない。そしてそれは、あちらも同じ意見だった。

「時間をかけていては、リスクが増えるね。君はとても賢いから」
互いに冷や汗を浮かべ、笑みをかわす。

アスラは渾身の魔力をインドラに注ぎ込んだ。

アスラの黒い瞳が、黄金のそれへと変貌する。

「万象一切、輪転せしめよ！」

インドラが強烈な閃光を放ち、青白い雷電に変わった。

雷電がアスラにからみつく。と同時に、アスラもまた雷電となった。

雷の精霊が具象化すれば、こんなふうに見えるのだろうか。かろうじて人間の姿をして
いるが、向こう側が透けて見え、激しいスパークで輪郭が判然としない。

それは、つい昨日、ロキの命を救ってくれた魔術だった。

稲妻が走る。比喻ではなく、本物のいかずちだ。当然、見てからではかわせない。

だから、事前に避けている。横をすり抜けられた途端、凄まじい圧力がきた。衝撃波が
鼓膜をぶっ叩き、意識が遠くなる。高電圧の刃が、足場に焼けた亀裂を刺んだ。

途方もない威力。直撃していたら、ロキはトーストみたいにされていた。

吹き抜けた稲妻は、はるか彼方^{かなた}で止まっていた。

（あんな遠くに……！）

アスラが夜会で使わなかった理由を悟る。これでは、術者も制御できない。万が一にも誤射すれば、味方や観客が即死する。

大勢の仲間に見まわっているからこそ、アスラは脅威なのだと思っていた。

だが、その認識は誤りだ。仲間を遠ざけても、アスラはやはり脅威だ。

アスラがゆっくり振り返り、慎重に狙いをつけて――閃く。

稲妻がロキに突き刺さる。――正確にはロキが握った大剣に。

ブラズマでアースしたのはずなのに、アスラは後方に流れず、押し合いになった。

魔力と魔力、衝撃と衝撃が拮抗^{きつこう}する。

「アスラ……あんたは言った！」

至近距離でにらみ合いながら、ロキは叫んだ。

「学生は苦楽をともしする仲間だと……弱者を虐げない、新しい世紀を築くと！」

「ああ、言った！ それが僕の信念だ！」

「信念？ 笑わせるな！」

――

「甘ったれた理想を信念と呼ぶなら――その綺麗事^{きれいごと}、最後まで貫きやがれ！」

魔力を高める。限界まで。熱風操作を駆使して、大量の熱を生み出した。

金（きん）器（き）を仕留めた一撃には、少し足りない。それでも、相手が学生ならば——だが、高熱の噴射が炸裂する寸前、アスラが消えた。

手ごたえが消失する。雷電の速さで後ろに引いた！

衝撃波に翻弄され、ロキは相手を見失った。ここで引いてくるとは、予想外だ。

背後、右、左後ろ、頭上と動き、アスラの気配が定まらない。

たつぷり翻弄された後で、正面から攻撃がきた。

ロキには対応できなかった。だが、ロキの代わりに対応した者がいる。

あるいは思考が貧弱だから、フエイタもフエイントも無効だったのか。

最初から最後まで、ロキの正面を守っていた者——

ケルビムが、雷撃の槍を受け止めた。

当たった部位が装甲ならば、あっさり貫通され、ロキも死んでいた。だが、どんな人形

にも、一か所だけ、装甲よりも魔術抵抗力に富む部分がある。

必ず魔力が集積している場所——命の源、（ハートの心臓）だ。

「ケルビム——」

どうして名前を呼んだのか、自分でもわからなかった。

雷撃がそれていく。吹っ飛ばされながら、ロキは砕け散る剣の破片を目で追った。

紅い魔石のかけらが、ガラスの容器が、バラバラに飛び散るさまを。

亀裂に叩きつけられ、もんどり打って転がり、屋上から放り出される寸前で止まる。意識が朦朧とする。はるか遠いところから、アスラの声が聞こえてきた。

「決着だね、剣帝」

決着……？ 何を言っている。オレはまだ死んでない。

「殺しは僕の本意じゃない。とどめは刺さないでおくよ」

「待……て……」

足音が遠ざかる。ロキは通いすがろうとしたが、脳震盪を起こしたらしく、立ち上がることもできなかった。

ふと、英雄と呼ばれた男、グレンダン將軍の死に際の言葉を思い出した。

「私の陣団がここにあれば、と思うのは……未練だな……」

——それと同じ未練を、今のロキも感じている。

万金の状態だったなら、こんな結末は避けられたのではないか？

（未練……か）

自嘲すら浮かばない。ロキは横たわったまま、折れた剣の柄を握りしめた。

やがて身を起こし、重傷の体を引きずって、相棒のもとへ向かう。

屋上の中ほどに、ケルビムの上半身が転がっている。既に死んでいるように見えたが、ロキの接近を感知すると、光点のような眼をまたたかせ、再起動した。

「Master」

ロキを呼ぶ。はっきりあいた胸で、ばち、ばち、と火花が散った。

ロキは相棒の前にしやがみ込み、耳を澄ました。ケルビムは何度かノイズを響かせた後、長いため息のような、割れた音声をしほり出した。

「Master」

「ああ。ここにいる」

「[I'm glad to meet you.]」

「——それは、初めて会ったときの台詞だろう？」

焼けた装甲をさすり、ロキもまたしほり出すように、つぶやく。

「オレもだ」

光点のような眼がかすかに細められ——ふっ、と消えた。

ギア、シリンドラー、回路。すべての作動音が止まる。

貴方に会えて嬉しい——そんな台詞は、ケルビムのOSにプリセットされていない。

つまり、これが、ケルビムが自ら考えて発した、最初で最後の言葉となった。

「……世話になったな、相棒」

もっと早く、そう呼んでやればよかった。

ケルビムの装甲に点々と、ロキの血がしたたり落ちる。

ロキは血の染みたハーフマントを脱ぎ、ケルビムの体にかけてやった。



折れたブレードを見つけ、拾い上げる。

オレはまだ動ける。だから、立ち止まっているわけにはいかない。

……胸のあたりがひどく冷える。マントを脱いだせいでろうか。

舌にからみつく血の味を嘔みしめながら、ロキはブレードを引きずり、歩き出した。

6

振り抜かれた氷の刃は、粉雪となって飛び散った。

ひらひらと宙を舞い、吹雪のようにあたりを覆う。

雷真は無傷だった。紅翼陣で止めたのではなく——いろりが自ら氷結を解いていた。

いろりはうつむいている。銀髪が顔を隠し、表情は読み取れない。

「なぜ……抵抗されぬのです……！」

「おまえは俺を殺さないって、信じてたからだ」

「……………」

いろりが顔を上げる。もう、涙に濡れてべしよべしよだった。

「できません、主……私には、できませんー」

「……………」
「……そう。なら、おまえはもう、いないわ」

とん、と軽く突き飛ばす。つんのめったいろりの胸から、いきなり鮮血が飛んだ。

着物の胸元が真っ赤に染まり、糸が切れたように崩れ落ちる。

——体内で魔力が暴れ、炸裂したようだ。

雷真は反射的に駆け寄り、いろりを受け止めた。

「雷……真……殿……？」

何が起こったのかわからない、という顔で、いろりは雷真を見上げる。

損傷の程度はわからない。ただ、体内の魔力循環が乱れ、めちゃくちゃだ。

血の染みが広がり、青い着物が黒く変色していく。稼働レベルが見る間に低下し、失神寸前まで追い込まれていた。

（今の……自壊機構……？）

強力な自動人形が敵の手に渡らぬよう、自爆させる人形師もいると聞く。

「姉さま！ 姉さまっ！」

半狂乱で小紫が駆けてくる。その小さな体に、硝子が視線で狙いをつけた。

ふところから短銃を引き抜き、小紫に銃口を向ける。

容赦なく放たれた弾丸は、小紫の眉間に当たると、つぶれて落ちた。

——雷真の指先から伸びた魔力の糸が、高密度の念動となって、受け止めたのだ。

小紫は後ずさり、信じられないという顔で硝子を見た。見る見る涙の粒が盛り上がり、はろり、はろりと頬を伝う。

硝子は冷たく視線を外し、雷真に言った。

「これが最後の警告よ。帰きなさい」

「……断る。硝子さんは……野良犬同然の儼（がま）を拾ってくれた……。生（な）きる術（すべ）を、くれた。あつたかい場所を……くれたんだ。簡単に……あきらめられるかよ……！」

雷真（らいまこと）の腕（うで）の中で、いろりが震えた。閉じたまぶたから、とめどなく涙（なみだ）があふれる。彼女の体を小紫（こむらさき）に預（たづな）け、雷真（らいまこと）は硝子（しょうし）に向き直った。

くつと目元（めもと）を袖（そで）でぬぐい、硝子（しょうし）を見据（み）える。硝子（しょうし）はうんざりした様子で、

「どうするつもり？」

「言（い）つたろ。力（ちから）尽（つ）くでも、遅（おそ）れて帰（かえ）る」

「……坊（ぼく）や。どうして坊（ぼく）やは生（な）きているの？」

「え——？」

「魔王（まおう）さまに焼（や）かれて、血（ち）が煮（に）えたはずよ。その前（まえ）、流星群（りゅうせいぐん）が降（ふ）った夜（よ）は？ あのとさ、坊（ぼく）やは立（た）って歩（あ）ける体（てい）だったの？」

不意（ふい）の間に、立ちすくんでしまう。

いつからか、疑問（ぎもん）にも思（おも）わなくなっていた。目（め）覚（さ）めて体（てい）が動（うご）いたから、思（おも）っていたより軽傷（けいけう）だったのだと——自分は強（つよ）くなったのだと、そう思（おも）い込んでいた。

だが、それが奇跡（きせき）でも何（なに）でもなく、雷真（らいまこと）の力（ちから）でもないとしたら——

「……持（も）つてくれ。まさか……夜（よ）々が……あんなつたのは」

「そもそも、力（ちから）尽（つ）くなんて不可能（ふ可能）よ。こちらには金薔薇（きんばい）さまがいらっしやるのだから」

扉の向こうを示す。差し込む光の中で、あの魔女が笑っていた。

猫みたいな金の瞳。外見はせいぜい一五、六歳の乙女だが、秘めた魔性はラザフォードにも劣らない。そのかたわらには、獅子の姿の自動人形も控えている。

魔術回路（万物流転）を持つ禁人形。この魔女は口キ、シャル、日輪の三人がかりで対処した相手だ。たとえ小紫がいても、一人でどうこうできる相手ではない。

だが、雷真は退かなかった。退けるはずがない！

「……勝ってみせる」

「ほー 言うの、小僧。面白い」

魔女は値踏みするように雷真を見て、舌なめずりをした。

「よかろう。この婆が避んでやるわえ」

「いえ……金満さまには悪いけれど、用心棒でカタをつけるとしましょう」

硝子は雷真の背後、入り口の方に目をやった。

今さら気配に気がついて、雷真と小紫もそちらを振り向く。

すたすたとほけた足音を響かせて、和装の男が歩いてくる。

足は草鞋履き、腰には二刀をぶら下げている。何人斬ったのか、着物は返り血でまだら

模様。――トラップとやらは、この男の侵入を妨害できなかったらしい。

剣の師、雲雀だ。

雲雀は状況を見て、困ったように笑った。

「これはまた、お取り込み中のようで……。つくづく、私は間が悪い」

「遅かったわね、雲雀さん」

硝子（しょうし）が責める。雲雀は泣柿を食わされたような顔をした。

「貴女（あなた）がおっしゃいますか……。依頼主が行方不明では動きようがありませんよ」

「早速で悪いのだけど、その坊やを斬り捨ててくださるかしら？」

雷真（らいしん）を示す。雷真は自分でもわかるほど青ざめ、剣の師と向き合った。

「間がいいぜ、師範——頼む！ 俺（おれ）に味方して」

くれ、と言い終わる前に、一陣の風が吹き抜けた。

最初に認識できたのは、痛みだった。

通常は最後に把握すべき感覚が、最初にきた。痛みがやがて熱さに代わり、肉が裂ける

感覚に代わり、ようやく、斬られたのだと理解する。

何も見えなかった。雲雀が刀を抜いたのかどうかすら、把握していない。

自分の胸からあふれた血潮が、座り込んだ小紫と、倒れたままのいろりを濡らす。

「……………」

膝が震える。雷真は苦悶（くもん）し——踏ん張りきれず、べしゃつと倒れた。

すつと意識が遠くなり、戦慄（せんりつ）した。

馬鹿野郎、気絶するな！ 今、俺が気絶したら、小紫はどうなる！

この敵地にたった一人、取り残されてしまう——

足音が遠ざかる。金善嚴のブーツと、硝子の下駄と、雲雀の草鞋が。

扉の向こうに向かっている。小紫は……どうなった？ 連れて行かれたのか？ わからない。目が見えず、気配も探れない。

追わなければならない。わかつていゝのに、体に力が入らず、立つことができない。待つて……くれ……」

叫んだつもりだったが、蚊の鳴くような、小さなうめきが漏れただけだった。

硝子の耳には届いたらしい。硝子は一度だけ振り返り、

「さようなら」

寂しく笑って、別れを告げた。

（くそ……立て……立てよ！ ここで……行かせちゃまったなら……）

もう二度と硝子には会えない。そんな予感がする。

「硝子さん……せめて……夜々を……こいつらを……」

助けて欲しい。救って欲しい。

だが、そこまで。

火災のように播らめく闇が、雷真をのみ込む。

自分がどうなったのかもわからないまま、雷真は意識を失った。



Intermission I

旅路の果て



「我、アスラ・オーエンは告げる」

はるか遠くから、拡声器越しの音声が響いてくる。

「一昨日、学院は卑劣な者たちの脅迫を受けた。昨日、学院は二つに割れ、正視に堪えない争いもあった。我らが学友——極東よりの友が、愚かにも王城を強襲し、名誉と生命を投げ捨てた。夜会の舞台で相対した彼は……常に、好敵手だった。彼は多くの罪を犯したが、何より自らを殺したのだ。……無念でならない」

美声が湿る。だが、それは一瞬で、アスラはすぐに朗々と、

「しかし今日、学院は大英帝国の庇護を得て、明日への一步を踏み出した」
高らかに言う。おそらくは、数千人規模の聴衆たちに。

「我ら一同、貴女への変わらぬ忠誠と、帝国への帰属を宣言します。学生八九七名の署名を添えて——第九九代（学生総代）より、我らが栄光グローリア紀殿下へ」
盛大な拍手。頭に血がのぼり、ソーネチカは舌打ちした。

はっとして扇で顔を隠す。今のは淑女らしからぬふるまいだった。

辛い、周囲に視線はない。……それも当然か。

そこは駅前のカフェ、半壊したバルコニー席。昨日の爆破に巻き込まれたのか、刃物で

切斷されたような傷が、手すりから下の道路まで走っている。

異様な光景だ。しかも、吹きさらし。こんな場所、誰も寄りつかない。

ばちんつと履を閉じ、一応は平静を装って、紅茶をすする。

（アストラ……少しは認めていましたのに。そもそも、〈剣審〉や〈下から二番目〉は何をしていたのです。常ならば、あのような横暴、決して許しはしないはず……）

好敵手のはずのオルガは療養中。アリスも連絡がつかない。

「いつもこいつもつ、という気分になる。彼らの抵抗がないのをいいことに、英国は力尽くで学院を接収、新学院長には王妃が座り、学生総代にはアストラ——」

「冗談ではありませんわ！」

ついに我慢できず、カップを皿に叩きつける。

ソーネチカはふつとむなしくなり、小さなため息をこぼした。

「……ですが、シャルロット・ブリュー。貴女だけは、評価に値しますわ」

かの機巧師団に属することなく立ち向かい、壮絶な討ち死にをしたという。

「わたくしも、貴女の志に殉じたいものですが……」

あいにく、そんな自由は、ソーネチカにはない。

「……時間ですわね」

傾いた太陽を見上げ、塵を立つ。ふと、バルゴニーの隅に光るものを見つけた。

（何ですか？）

誰かの忘れ物か。かがんで手を伸ばすと、テーブルの下にもひとつある。それは、二つに割れた金属管だった。楽器……いや、喫煙用のパイプか。オリエンタルな意匠が美しく、もとは見事な品であつただろうと思われた。

「殿下、お急ぎください。船に遅れます」

いかにも屈強そうな紳士が、店内から顔を出し、うながす。

「……『殿下』はおやめなさい。まだ機巧都市の中ですよ」

ソーネチカはパイプをバッグに放り込み、男たちに護衛され、カフェを後にした。

「……不思議と、もの哀しいものですわね」

大型客船のデッキから、遠ざかる街並みを眺める。

昨日の戦場で荒れた市街も、この距離では傷跡が目立たず、美しく見えた。ただ一点、城壁の崩れた学院は、大きく外観を変えている。

帰りたくない、と思つてしまつて、ソーネチカは自嘲した。

一昨日、アスラが言つていたように――

十年後も、二十年後も、きっとここでの日々を思い出すだろう。苦い記憶として、生涯抱えていく。最後までオルガに勝てなかったことも。他國の学生たちとともに戦つたことも。裏切られたことも。そして――戦いもせず、祖国に逃げ帰つたことも。

自分が卑怯者へうていしやのように思えて、たまらなくなる。今すぐ学院に戻り、アスラに宣戦布告

したい。機巧師団など知ったことか。力の限り叩きのめしてやる。たとえそれが、皇帝の意志に背くことになっても――

「……うらやましいですわよ、シャルロット・ブリュエ」

力なく微笑み、もう一度、機巧都市の街並みを網膜に焼きつけた。

「さらば、学院よ。今となっては……何もかもが懐かしい」

バツグからハンカチを取り出そうとして、例のパイプに気がついた。

そう言えば、持ってきてしまっていた。思ひ出の品としては出所不明にすぎる。――が、

それもまた一興か。苦笑しながら手に取って、切断面を合わせてみる。

これほど綺麗な断面ならば、魔術で溶着できないか。

そう思つて魔力を込めた途端、パイプは「にゅるんつ」と丸くなった。

（流体金属……？ 何の魔力も感じませんでしたのに……）

一体、これは何だろう？

魔力親和性に富んでいる。魔力を流すと、硬くなったり軟らかくなったりする。

てのひらでころころ転がし、指で突ついているうちに、とある仮説にたどりつく。

「――魔術回路、ですの？」

蒸気の鼓動を響かせながら、船は機巧都市を離れ、大海原へと漕ぎ出して行った。

あとがき

こんにちは、海冬レイジです。

おかげさまでアニメ化決定☆の本シリーズ、11冊目となりました！

前回10巻は若干ドヤ顔で出した面もなきにしもあらずなのですが、こ、今回は震えながらあとがきを書いております（びくびく）。

というわけで、後編に「つづく」——ああ、石を投げないでっ。

当方、デビュー前から上下巻というものに慣れておりました。

現実問題として、上下巻（前後編）構成は、よほど条件がそろわないと実現しません。虎視眈々とチャンスをうかがっていたとき、担当さんが「次は大きな話で行きましょう。上下巻とか！」と言ってくださって——

気付いたら即答してたよね……。そこは「ラッキーー」って言っちゃうよね……。

ストーリー的にも「硝子と三姉妹をガッツリやりたい！」と思っていたところで、満を持して、ここしかないタイミングでの実現となりました。

しかし、そこが地獄のエントランスホール。迂闊だぜ海冬レイジ……強大な魔物が出現するのはわかってただろお……？ お盆進行、年末進行と並び、あまたの編集者と作家を

殺してきた大天魔（GW進行）のことはよお！

（ほかに年度末進行というのもありますが、あれは四天王の中では最弱——でもないのかな、どうなのかな。会社にお勤めの方は大変そうですが、自営業の作家には確定申告進行の方が強敵で、これが尾を引いてしまいました……）

激戦の直後でMPもアイテムも尽きているとき、強ボスに当たるとどうなるか。奇しくも今回、雷真たちが体感したものが、それにあたります。

本編をご覧になった方はご存知かと思いますが、おそらく、今回は今までで一番つらい戦いとなり——毎回言ってるな——作者もつらく、雷真たちもつらく、ご覧になった貴方もつらく感じてくださったかもしれません。

前回のヒキで「うっわやべえー！でもこれ、すぐ復活するよね？」と思った方も多いと思うのですが（※作者もそう思ってた）、フタ開けてみたらこれだよ！

初めての上下巻ということ、至らぬ点多々あるかと思えます。

もっと伏線をまくか、それとも流れで押すか、作者も迷いながらの戦いでした。常日頃、「七〇ページ閉ったー」とか「一〇〇ページ絞ってスリムにしたぜー」とかドヤ顔うざい海冬レイジも今回はその逆で——用意したテキストの半分しか使えないと気付いたときには青ざめました。シメキリ二週間前だったしイイイ！

この執筆ペースなら毎月本出せるよっ、というくらい担当さんと二人で頑張っ、どう

にかカタチになりました。もう二度とやれませんか！

おかげさまで「ここだ！」と思える比重で前後分割できた……んじやないかと思えます

……そのはずだ！ 実際のところはぜひ、貴方あなたのその目でお確かめくださいね！

また、やってみて初めてわかることもありました。上下巻は一冊を膨らませるのだからと、気楽に考えていた部分もあったのですが、実際は二冊分の労力では無理！ 最低でも三冊分のカロリーがいる！ ハーママラソン完走とフルマラソン完走では、必要な体力がまるで違うんですよ！（このたとえ、合ってます？）

トップアスリートなら「ハーフいければフルも余裕」なのかもしれませんが、軟弱者の海冬レイジには凄まじくハードでした。雷真たちの気持ちがよくわかった！

超編集☆池本さんの危険予測と名作的采配、それに応えてくださった植阪・校正・デザイン・印刷関係の皆さまのお力がなければ、もう本当に……確実に……やらかしてました……つまり……○としてましたアアア！ ありがとうございます！

るろおさん、過酷日程の中、今回も美麗なイラストをありがとうございました。今回のカハースこいよね！ 神がかつてるよね！ しかもこれ、よく見ると仕掛けがありますね。ピンときた方は「その先」を想像しながら、12巻をお待ちくださいいね。

アライブさまにて連載中☆高城計さんのコミック版が同月発売で、ちようと書店さんに並んでいると思います。最新6巻は原作2巻が決着！3巻突入のあたりで、ロキ&フレイ

が姉弟愛を見せつけてくれます。二人の幼少時シーン、めちゃくちゃ素敵なので、ぜひご覧くださいねー 高城さん、いつもありがとうございます！

編集・営業・映像部の皆さま、印刷・取次・流通に携わる皆さま、全国の書店さま——ほかにも多くの方のお力添えで、本書を世に出すことができました。

そして誰よりもまず、お手に取ってくださった貴方に最大の感謝を！

土壇場で折れずに完走できたのは、ゴールで待っていてくれる貴方のおかげです。

今回つらかったぶんだけ、仲間たちには明るい未来が待っている——いつもの笑顔が戻ることを願ってやみません。マジで頼むよー 頼むからな！

ではまた次回、後編【Nigger's Doll】でお会いできますように！

2013年4月 海冬レイジ

追加情報1。本書の帯でアニメスタッフさまが本邦初公開となりました！

設定、音楽、脚本、コンテが送られてくるたび、作者の魔力が超回復してました。ありがとうございます……！ そしてキャストさまにもご注目。海冬レイジ、めちゃくちゃにつっこんです今。周囲が軽くイラッとするレベルです。

公式サイト (<http://www.machine-doll.com>) ではPVも公開されています。本編放映前にぜひこの映像美を体感してくださいね。マシンドールドットコム！

いやあ、このPV本当にイイよね。ガチで賞えたもんね。公開日の作者、ずーっと張りついて観てたもんね（原稿やれよ！）。

追加情報2。アライブさまの兄弟（妹？）誌ジーンさまにて、先月から機巧少女スピンオフ作品が始まっております。描いてくださるのは超新星☆釜田（かまだ）みさとさん！

本編から少し時が流れた日本。血風吹き荒び、血塗れのだんびらがうなりをあげる——という、作者の趣味丸出しのチャンバラ活劇ものです。

原作者・担当さん（お二人！）・釜田さんの全員が本気出した結果、「スピンオフって言うか新作だよな？」という領域に突入しました（ありがとうございますすみません！）。釜田さんデザインの白夜ちゃんは原作読者さまも必見ですよー

お話は海冬レイジが（漫画原作者）として担当しております（エモモに続き二度目）。普段の機巧少女より「ハードな」お話になりそうですが、我こそはと思うアナタはぜひチェックしてくださいね。ちなみに男子増量でジャ○ブ度アップー！

はい。絵の人です。

いやはや。

海冬さん、前後編なのを良いことに
もーやりたい放題ッスね。すげえ。
後編どうなるんでしょうね。ドキドキ。

あ、ロリババ様がもっと残酷ちっくに
ぶち活躍するのを期待してたりしなかったり。
するかなあ。しないかなあ。



「機巧少女は傷つかない」コミカライズ

ジーン&月刊コミック にて2作同時連載中!

機巧と魔術の香り立つ
正統派学園
パドルファンタジー



マシンドール

機巧少女は
傷つかない

高城 計

原案 御零レイジ
キャラクター原案 るるる

COMIC
alive

27日
発売!

月刊コミック アライブ

海冬レイシ完全ボロボロし
機巧少女は傷つかない・るペンオフ!

機巧少女は傷つかない
メタリカ
Re:Acta

原作：笠田みさと 作画：海冬レイシ
キャラクター原案：るろお

月刊
コミック
アライブ

15日
発売!



マシンドール
機巧少女は傷つかない11
Facing "Doll's Master"

発行	2013年5月31日 初版第一刷発行
著者	海客レイジ
発行人	三瓶孝二
発行所	株式会社 メディアファクトリー 〒158-8502 東京都港区浜田町3-2-8
印刷・製本	株式会社廣洋堂

©2013 Rei Kasei
Printed in Japan ISBN 978-4-86015-515-1 (JAN)

※本書の内容を無断で複製・転写・翻訳・ネット配信などを行うこと
は、固くお断りいたします。

※定価はカバーに表示しております。

※返り本/返り金はお断りいたします。下記ホムサーチサポートセ
ンターまでご連絡ください。

※その他 本書に、関するお問い合わせも下記までお願いいたします。

メディアファクトリー カスタマーサポートセンター

電話 03-573-0027 001

受付時間 10:00～18:00(土日 祝日除く)

【ファンレター、作品のご感想をお待ちしています】

〒158-0002 東京都港区浜田町3-2-8 NBFお茶屋イースト
株式会社メディアファクトリー 編輯部宛
「海客レイジ先生」様 「花るめ先生」様

- ★スタートアップにも対応しております！一冊から送っても構いません。
- ★お墨付きの、方箋に、この書籍で提供している書籍の権利情報も併せて！
- ★マサシ、アクセスの便や、送料、メール返信時に必要な返信料はご負担ください。
- ★中学生以下の方は、保護者の方の了承を得てお送りください。

Copyright ©
media factory inc.
All Rights Reserved



<http://mf.jp/wri>